野　畑　遺　跡

——第1次発掘調査報告——

1981年6月

豊中市教育委員会

野　畑　遺　跡

——第１次発掘調査報告——

1981年６月

豊中市教育委員会

序　　文

私達の町豊中市は、古い歴史と新しい文化が融けあい、戦後、大阪のベッドタウンとして急成長をとげた町である。

知られるとおり、市域の北東部には千里丘陵の名で呼ばれる丘陵地帯が連なり、古来、景勝の地としてすでに萬葉集に島熊山の名が見えている。

近年、この地に日本住宅公団北豊中団地が建設されることになり、計画道路小野原・豊中線が敷設されるとき、市内では希有な縄文遺跡が発見され「野畑遺跡」と名づけられた。

住宅が隙間なく建ち並んだ現代の住宅都市・豊中市の下に古代の姿を見出すことは、大いなるロマンである反面、貴重な遺跡が開発によって姿を消していくことは、止むを得ないこととはいえ、まことに残念なことである。

野畑遺跡は、この様な背景のもとに、昭和51年11月から52年２月にかけて、関係者の御協力を得て発掘調査が実施されるに至った。この調査によって古代社会の足跡の全てが解明されるものではないが、縄文時代後期の遺跡として、周辺地域でも数少ない貴重な資料が得られた。

古代豊中の文化・生活の足跡を記した貴重な文化財を保護し、後世に伝えることもまた、現代に生きる私達の使命であることを考えるとき、今回の調査の内容が、市民の郷土の歴史や文化財に対する理解と認識に少しでも役立つことを願うものである。

終りに、本調査の実施にあたり多大の御援助、並びに適切な御指導、御助言をいただいた関係各位に深く感謝の意を表し、刊行の言葉としたい。

昭和56年６月

豊中市教育委員会

教育長　湯元　英世

例　　言

1．本書は、都市計画道路小野原－豊中線敷設工事に伴う第一次発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、昭和51年11月から昭和52年２月まで実施した。

3．発掘調査は、島田義明（元豊中市教育委員会）、橋本正幸（豊中市教育委員会嘱託）が専従し、三宅俊隆（財　枚方市文化財研究調査会）、厚美正子（豊中市教育委員会嘱託）、木下亘（国学院大学）、大手前女子大学考古学研究会、その他多数の参加協力を得た。また、発掘調査進行等については、島越憲三郎博士（大阪府文化財保護審議会委員・豊中市文化財保護委員）に御指導を賜った。

4．遺物整理は、島田義明、橋本正幸が進行し、本書の執筆は各担当者が行ない、その文責は目次に記した。なを、石材の鑑定については、奥田尚氏に依頼し、寄稿していただいた。編集は、柳本照男（豊中市教育委員会）、橋本正幸が行なったものである。

5．報告書の作成にあたっては、泉拓良、岡崎正雄、置田雅昭、下村晴文、鈴木重治、中村友博、堀田啓一、間壁忠彦、間壁葭子、松藤和人、松村恵司、松尾信裕の諸氏から種々の御教示を賜った。記して感謝いたします。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経緯……島田義明……1

Ⅱ　地理的環境と周辺の縄文遺跡……島田義明・橋本正幸……3

Ⅲ　調査の経過……島田義明……6

　　調査日誌抄

Ⅳ　調査の概要……島田義明……8

　1　層序

　2　遺構

　3　出土遺物

　　(1)　縄文土器……柳本照男……10

　　(2)　石器……橋本正幸……19

Ⅴ　石器の岩質とその原石採集地について……奥田　尚……47

Ⅵ　要約……橋本正幸……50

挿　図　目　次

第1図　発見時の遺跡遠景……1

第2図　周辺遺跡分布図……2

第3図　遺跡地形図……4

第4図　調査地域図……5

第5図　平面・断面実測図……9

第6図　第1類・第2類A種土器拓影……11

第7図　第2類B種土器拓影……12

第8図　第2類A種・B種胴部文様拓影……13

第9図　第3類土器拓影……14

第10図　第3類・第4類・垂下沈線・　条線文土器拓影……15

第11図　無文土器拓影・底部実測図……16
第12図　石錐実測図……22
第13図　石鏃実測図……26
第14図　削器実測図……27
第15図　削器実測図……28
第16図　使用痕のある剥片実測図……29
第17図　ピエス・エスキーユ実測図……30
第18図　ピエス・エスキーユ実測図……31
第19図　ピエス・エスキーユ実測図……32
第20図　ピエス・エスキーユ接合資料実測図……33
第21図　石核実測図……34
第22図　剥片実測図……35
第23図　剥片実測図……36
第24図　剥片実測図……37
第25図　礫石錘実測図……38
第26図　礫石錘実測図……39
第27図　礫石錘実測図……40
第28図　礫石錘実測図……41
第29図　礫石錘未製品・素材・折損品実測図……42
第30図　礫石錘・折損品・切目石錘実測図……43
第31図　敲石・すり石実測図……44
第32図　台石・磨製石斧・用途不明品実測図……45
第33図　砥石実測図……46

表　目　次

第１表　地区別石器総計表……19
第２表　石器計測値表……20
第３表　石器計測値表……21
第４表　石錘長幅分布比表……24
第５表　石錘重量分布比表……24

図　版　目　次

図版1　野畑遺跡

(1) 遺跡の遠景（北西より）

(2) 発掘風景（西より）

図版2　野畑遺跡

(1) 調査区全域の遺構（東北より）

(2) B・C地区の遺構（北より）

図版3　野畑遺跡

(1) 焼礫遺構

(2) 焼土遺構

図版4　縄文土器

(1)　1類

(2)　2類A種

図版5　縄文土器

(1)　2類B種

(2)　2類A種・B種胴部文様

図版6　縄文土器

(1)　3類

(2)　3類

図版7　縄文土器

(1)　4類

(2) 垂下沈線・垂下条線文

図版8　縄文土器

(1) 無文土器

(2) 底部

図版9　石器

(1) 石鏃・石錐

(2) 削器・使用痕のある剥片

図版10　石器

(1)　ピエス・エスキーユ

図版11　石器

(1)　ピエス・エスキーユ接合資料

図版12　石器

(1)　石核・剥片

図版13　石器

(1)　礫石錘

図版14　石器

(1)　礫石錘・切目石錘

図版15　石器

(1)　敲石・磨石・台石

(2)　台石・磨製石斧・用途不明・砥石

I 調査の経緯

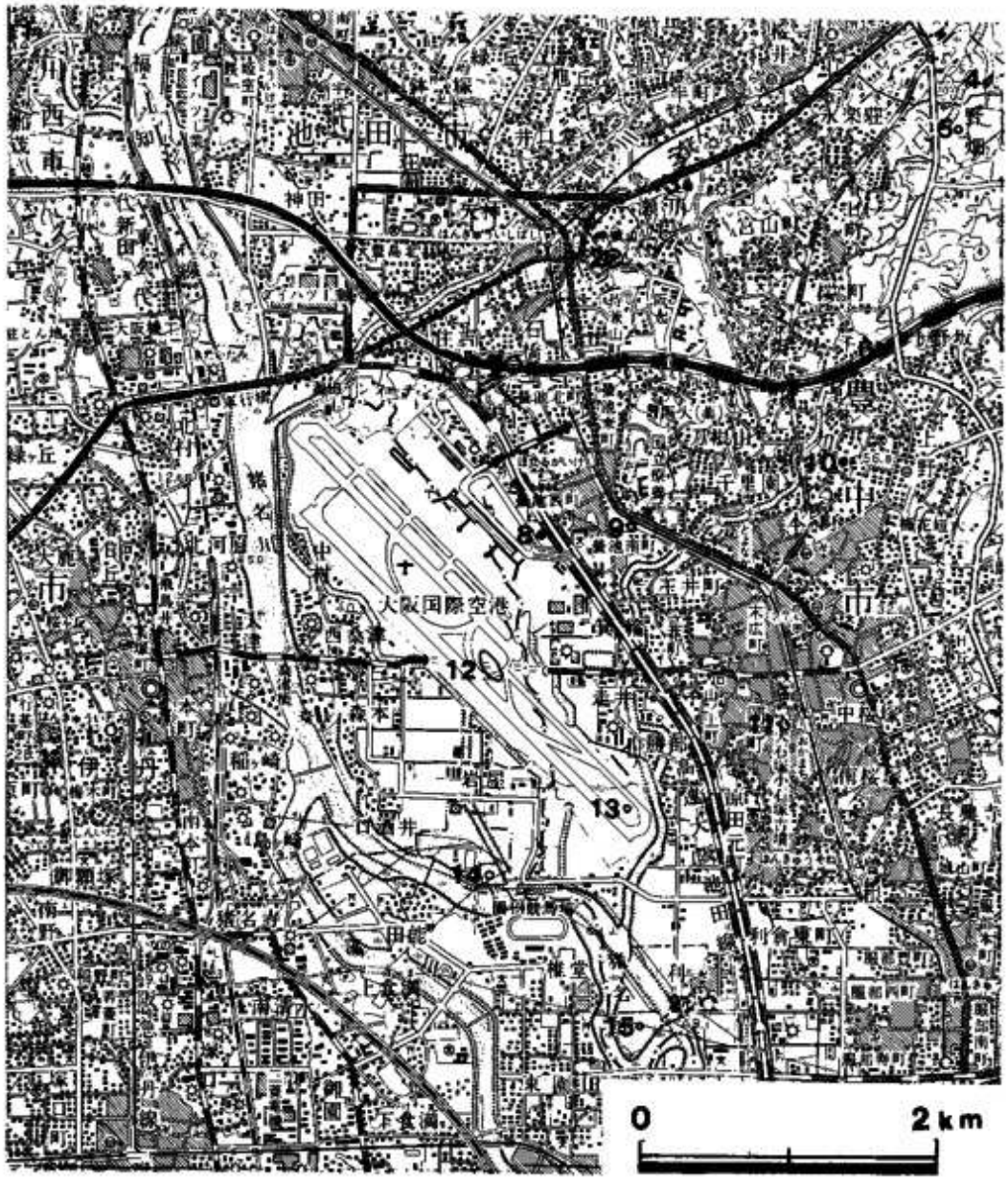
野畑遺跡は、昭和51年５月30日に桜井谷丘陵の地域において、分布調査をされていた橋本正幸氏によって発見された遺跡である。

北豊中団地建設に関連して、豊中市北緑丘二丁目と西緑丘三丁目を区画する計画道路小野原－豊中線の敷設工事に伴って発見されたもので、道路工事によって掘削された畑の切り通し面において土器を若干採集し、教育委員会に連絡されてきた。採集された土器は、保存状態が著しく悪いため所属時期の不明確な土器であったが、同年９月に橋本正幸氏は、掘削された畑の切り通し面から縄文時代後期の土器とサヌカイトの破片を採集され、再度、教育委員会に連絡された。

野畑遺跡の千里川西岸に弥生時代中期の春日町遺跡があり、これらとの関連遺跡と推測していたが、明確な遺物の発見により本遺跡は、縄文時代後期に所属する遺跡で、周辺地域でも数少ない遺跡確認であり、その重要性を力説しながら各所への連絡を行なった。

昭和51年の秋頃に、小野原－豊中線の工事は進捗し、仮設道路の敷設から畑の切り通し面に擁壁が設置されることになり、昭和51年11月から昭和52年２月までにかけて、発掘調査を実施した。

第１図　発見時の遺跡遠景



1．加茂遺跡
2．待兼山古墳
3．瀬川遺跡
4．桜井谷２－19、24窯跡
5．野畑遺跡
6．下村町池窯跡
7．宮ノ前遺跡
8．螢池西遺跡
9．御神山古墳
10．金寺山廃寺跡
11．大石塚・小石塚古墳
12．大阪空港Ａ・Ｂ遺跡
13．勝部遺跡
14．田能遺跡
15．利倉西遺跡

第２図　周辺遺跡分布図

II　地理的環境と周辺の縄文遺跡

野畑遺跡は、豊中市西緑丘三丁目に所在する遺跡であり、千里丘陵を切って流れる千里川の左岸に形成された標高45mの河岸段丘面に位置する。千里川は、猪名川の支河として流れ込む河川で、猪名川はさらに神崎川を経て大阪湾へと流出されてゆく。猪名川は、北摂山地の丹波との境界にその源流をもち、兵庫県川西市や宝塚市の北部をしめる長尾山地と大阪府池田、箕面市の箕面山地との間を経て西摂平野に流れ出る。北摂山地を切って流れた猪名川の東部地域には、標高138mを頂点とする千里丘陵があり、西側には伊丹段丘が広がり、さらにこの西方を武庫川が流れている。

猪名川流域の遺跡には、縄文時代から中世にかけての遺跡が多く分布するが、旧石器から縄文時代の遺跡としては、伊丹段丘の洪積台地上に川西市加茂遺跡[註1]が所在する。本遺跡からは、旧石器時代後期に所属するナイフ形石器、舟底形石器が採集されている。最近の発掘調査で縄文時代後・晩期に比定される土器が出土している。また、本遺跡の東北部段丘斜面上に位置する小花[註2]からは、昭和初年頃に石棒が単独で出土している。猪名川を挟んで対峙する池田市には宮ノ前遺跡[註3]が所在し、旧石器時代後期に所属するナイフ形石器[註4]と縄文時代の石棒[註5]が採集されている。待兼山丘陵の突端部に形成された北西斜面上に位置する箕面市瀬川遺跡[註6]（縄文時代前・後期）が所在し、遺物としては、前期の北白川下層式土器、後期の元住吉山式土器と石器類などが採集されている。石器散布地は、箕面山系や伊丹、池田の両段丘面で縄文的な石器が採集されている。

猪名川中積低地では、縄文土器が単独で確認され、縄文土器の出土地としては、猪名川左岸に形成された伊丹市大阪空港A・B遺跡[註7]で縄文土器が出土しており、A遺跡では縄文中期（勝坂式）の土器が認められ、B遺跡では縄文後期（元住吉山式）の土器が出土している。空港A・B遺跡の南西部に位置する豊中市（仮称）原田下水処理場遺跡[註8]で縄文中期（船元II式）の土器が出土している。尼崎市田能遺跡、上ノ島遺跡、東園田町藻川川床遺跡[註9]、伊丹市口酒井遺跡[註10]などの遺跡で縄文晩期（船橋式）の土器が、猪名川下流の中積低地に広域に亙って分布している。

註1　武藤誠　「考古学からみた川西地方　文化のあけぼの」（川西市史第1巻　1974年）

註2　註1に同じ

註3　池田市教育委員会　「新版池田市史」（概論篇　1971年）

註4　横本正幸　「大阪府池田市宮ノ前遺跡採集のナイフ形石器について」（アレリュード20号　1977年）

註5　註3に同じ

註6　藤井直正　「原始・古代の箕面　縄文文化とその遺跡」（箕面市史第1巻　1964年）

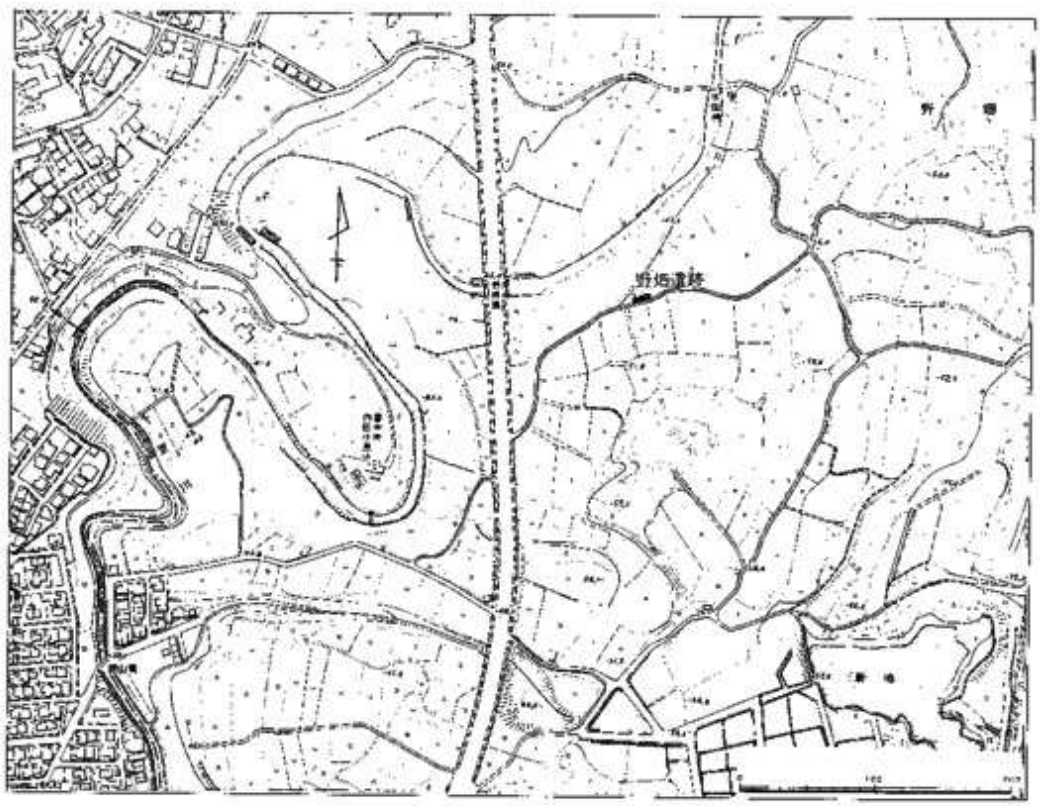
註7　佐原真　「考古学からみた伊丹地方　縄文時代」（伊丹市史第1巻　1971年）

註8　昭和55年1月（仮称）猪名川流域下水道原田処理場遺跡で、縄文堆積時期の地層より出土した。

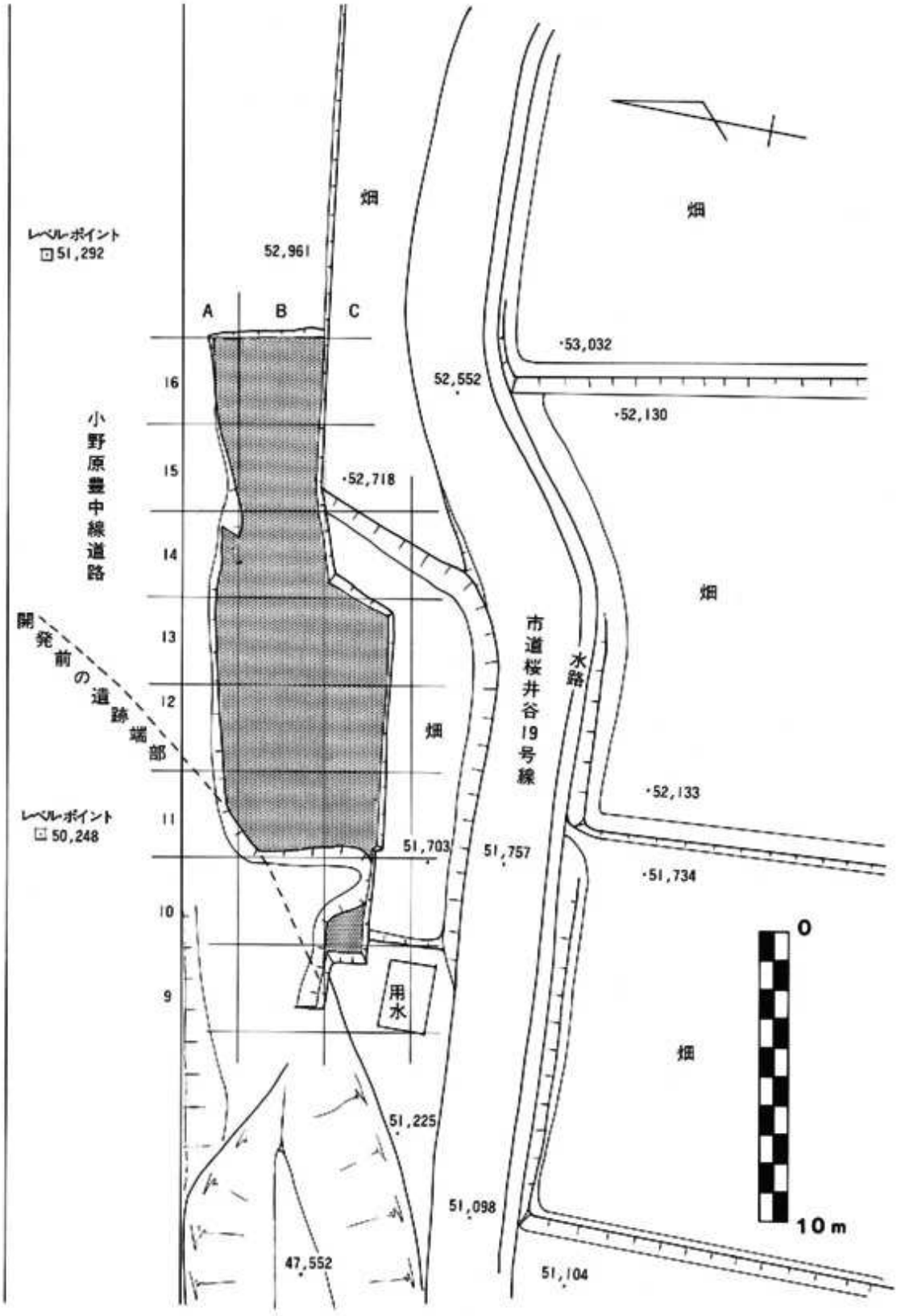
島田義明・柳本照男・橋本正幸・厚美正子「原田西遺跡」猪名川流域下水道処理場遺跡調査団　1981年3月

註9　村川行弘　「考古学からみた尼崎」（尼崎市史第1巻　1966年）

註10　昭和55年3月伊丹市教育委員会による発掘調査



第3図　遺跡地形図


レベルポイント
□51,292
52,961
A
B
C
畑
畑
·53,032
52,552
·52,130
16
15
14
13
12
11
10
9
小野原豊中線道路
·52,718
開発前の遺跡端部
畑
市道桜井谷19号線
水路
畑
·52,133
·51,734
レベルポイント
□50,248
51,703
51,757
用水
畑
0
10m
51,225
51,098
47,552
51,104

第4図　調査地域図

Ⅲ 調査の経過

事前調査は、昭和51年11月６日～24日にかけて実施した。この調査は、遺構・遺物の状態を確認するために実施したものであり、道路の切り通し面を調査した結果、包含層は西側に比較的厚く堆積し、東部にゆくに従って自然に消滅する傾向を示す。包含層に含まれている遺物も多数出土し、遺構の存在することも確認できた。

本調査は、昭和51年12月13日～昭和52年２月２日まで、補充調査は同年２月25日～２月28日まで実施した。調査の対象地域は、日本住宅公団用地のみでなく、これに隣接する民有地が一部含まれているため、民有地者と教育委員会との協議を行なった結果、調査の承諾を得ることができた。このような経過を踏まえて発掘調査を実施した。

調査日誌抄

事前調査

11月６日　本日より調査を開始する。
　　Ａ－11地区の包含層より、土器、サヌカイト片が出土。

11月７日　昨日同様に作業進行。

11月９日　包含層から、土器、石器等出土し木炭が多く含まれている。Ａ－11地区完了。

11月10日　Ａ－12地区不整形な遺構が検出される。遺構内から若干の遺物出土。

11月12日　Ａ－12地区作業続行。

11月15日　Ａ－12地区作業続行。土器、石器等若干出土する。

11月19日　Ａ－12地区遺構は認められなかった。Ａ－12地区完了。

11月20日　Ａ－13地区で当初から確認していた遺構を精査。

11月21日　昨日同様に遺構精査。遺構内より、福田ＫⅡ式土器検出。Ａ－13地区完了。

11月24日　Ａ－14地区では、明確な遺構は検出されなかった。写真撮影、平面図・断面図を作成して本日で事前調査を終了する。

本調査

12月13日　本日より調査を再開する。
　　午前中に資料を運搬する。表土下層より縄文の包含層上面までは、遺構は認めら

れなかった。

12月14日　機械掘削で包含層上面まで除去。

12月15日　調査区地区割設定する。北からA・B・Cとし、西から東へ9～16とする。

12月16日～12月21日　B地区包含層上面まで削除。包含層を削除して精査。B－12，13地区で落ち込み検出され炭を多く含む。

12月22日　B－12，13地区落ち込み精査。午後、雨のため室内作業。

12月23日　B－12地区で、焼石を検出。

12月24日～12月27日　B－12，13地区落ち込み清掃、写真撮影。C－12，13地区包含層削除。

12月28日　正月休みの為、埋め戻し作業を行なう。

1月5日　埋め戻しの土の除去作業。

1月6日～1月20日　C－11，12，13地区包含層削除。多数の遺物出土。C地区包含層削除完了。地山面より不整形な遺構確認。

1月21日　C地区遺構面の清掃を行ない写真撮影、平面実測作成。

1月23日　B－14，15，16地区拡張することを決定する。

1月24日　拡張区機械掘削で包含層上面まで除去。

1月25日　B－14，15，16地区包含層削除。東部にいくに従って包含層は薄くなる。

1月26日　B－14，15，16地区包含層削除完了。B－15，16地区の地山面で焼土を検出する。

1月27日　B－15地区の地山面で石器出土する。

1月28日　B－16地区で楕円形の焚火跡を検出する。

1月29日　B－14，15，16地区地山面を清掃。写真撮影、平面実測作成。

1月30日　平面実測、調査区内の断面実測作成。

1月31日　平面実測、断面実測作成。

2月1日　平板実測作成。

2月2日　発掘調査終了する。

補充調査

2月9日　調査終了後に業者の手違いにより、未調査区を掘削する。

2月25日　本日より業者によって、掘削された部分調査。

2月26日　B－9，10地区包含層削除。包含層内に遺物多く含む。

2月28日　地山面精査する。不定形な遺構が検出された。写真撮影、平面実測、断面実測作成を行ない発掘調査を終了した。

Ⅳ. 調 査 の 概 要

発掘調査区域は、都市計画道路小野原－豊中線の南側擁壁設置部分と民有地であり、調査面積126㎡である。調査区域の北西端部は、旧地形が千里川に添って落ち込む斜面となり、斜面は川岸を形成する狭い平坦面に続き、さらに川床へ落ち込んでいる。遺跡後方は、ゆるやかな斜面で段々の畑が数枚続いて山林の斜面となる。野畑遺跡の位置は、千里川によって形成された河岸段丘の低位置に立地し、段丘面はさらに中位・高位と続いて最頂部に達している。

1．層　　序

標識的な層序は、第4層に大別できる。表土から地山まで水平に堆積し、B－15地区より一段高くなる地形を呈した単純な層序をなしている。

第1層　表土

第2層　黄褐色砂質土

第2'層　暗黄色砂質土

第3層　灰黒色砂質土（包含層）

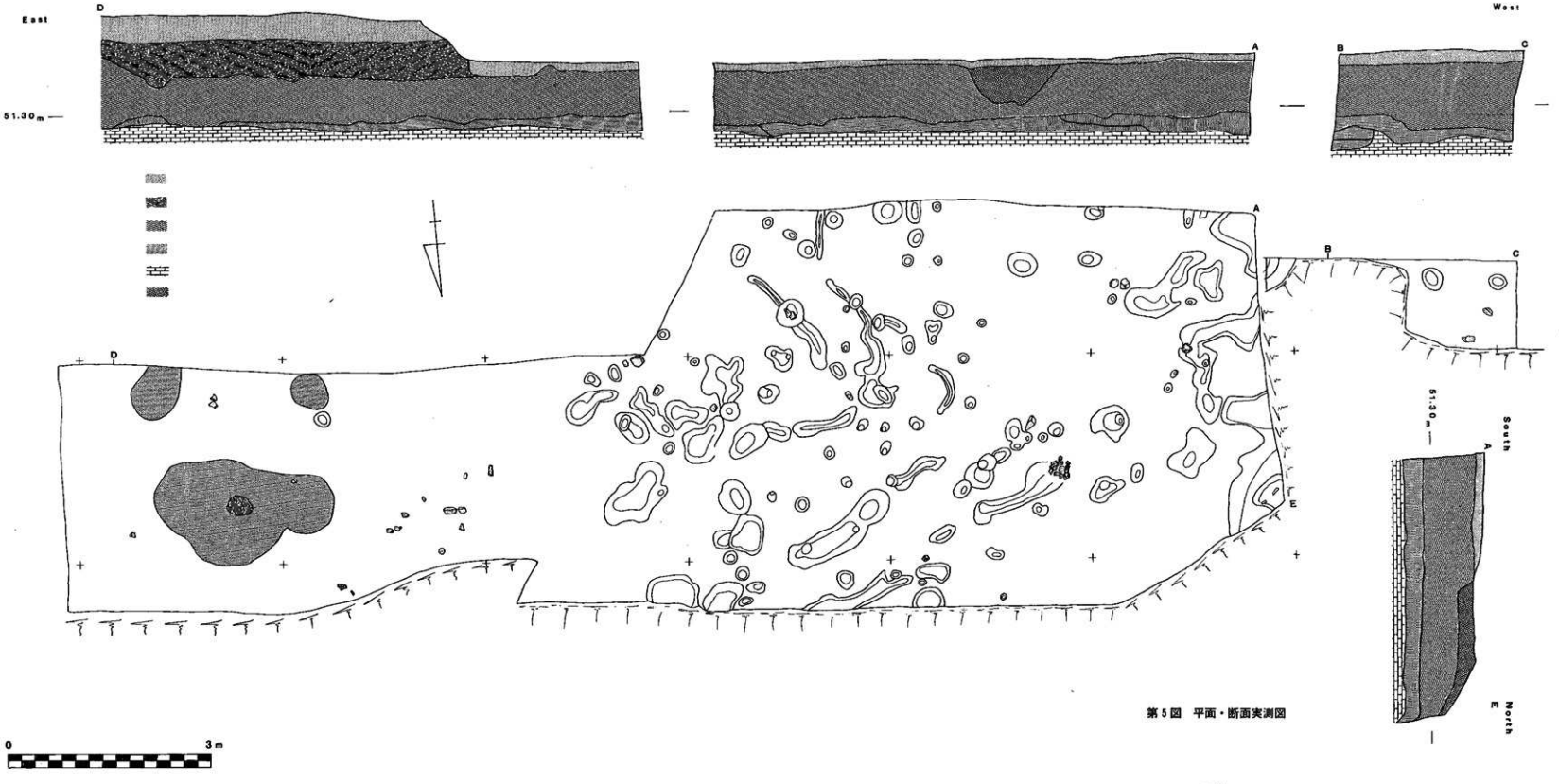
第4層　茶褐色砂質土（地山）

2．遺　　構

調査区域の遺構面は、東側へ除々に高くなる地形を示しているが、それは急なものでなく比較的平坦な地形としてあらわれている。遺跡の立地は、千里川が北東から南西へ流れているため、地形を概観すれば傾斜面は、南東から北西へ低くなるものである。断面図を作成した東西面は、この地形に対して直交したものではなく、斜面を斜めに切ったものとしてあらわれているため、南東－北西方向の断面図を作成すれば、もう少し急になるものと考えられる。西端で旧地形とともに包含層は、東にゆくに従って除々に薄くなり消えている。遺物の状態もこれに相応し、西に多く東にゆくに従い少量含まれているに過ぎない。また、遺構についても同様の結果を示し、調査区域内の中心は西に片寄ったものとなっている。

今回の調査で検出された遺構は、大小の不規則な配置をもつピット群とB－15，16地区で検出された焼土、炭を含む焚火跡と考えられるものである。ピット群は西側に片寄った配置をもち径30cm前後のピットがあり、ピットの深さは小さいものは10cm以下のものが多く、大きなもので30cm前後である。ピット群には、幅が狭く浅い溝状のものが含まれているが、これらもピットと同様に規則的な配置を示さず、これらの遺構の性格を決定することはできなかった。

ピット群のある地区は、包含層の厚く堆積している部分であった。B－15，16地区で確認し



第5図　平面・断面実測図

た焼土は3個所で認められ、焼土の表面は暗褐色に固く焼けている。焚火跡と考えられるものの中には、長径265㎝、短径155㎝を計り、2回の焚火跡が続いたものと考えられるものもある。これらの遺構に伴う遺物はほとんど出土しなかった。

3．出土遺物

(1) 縄文土器

今回の調査で出土した土器類は、すべて縄文土器である。遺構は検出したものの、土器を伴っているものは少なく、伴っていたとしてもごく細片で、器形、文様を判別できるものはなく、すべて包含層中のものに頼らざるを得ない状態である。包含層中の土器は若干の型式差を含んでいるものの、堆積の状況は単一層的であり、一括遺物としてとらえられるほどである。

このような状況であったが、従来の型式編年と器種、文様などを考慮して分類を試みた。

第1類（第6図－1，図版4－1）

いわゆるキャリパー形の深鉢で、口縁は波状を呈するものである。文様は口縁下方に隆帯をもち、その隆帯と口唇部との間を押引き手法の沈線によって区画し、その中に綾杉状の刺突文を二段に設け、隆帯の下方は垂下沈線を施している。隆帯上と口唇部に縄文を施し、撚りはＬＲである。膚色を呈し、金雲母が目に付く胎土である。中期終末の土器と思われる。

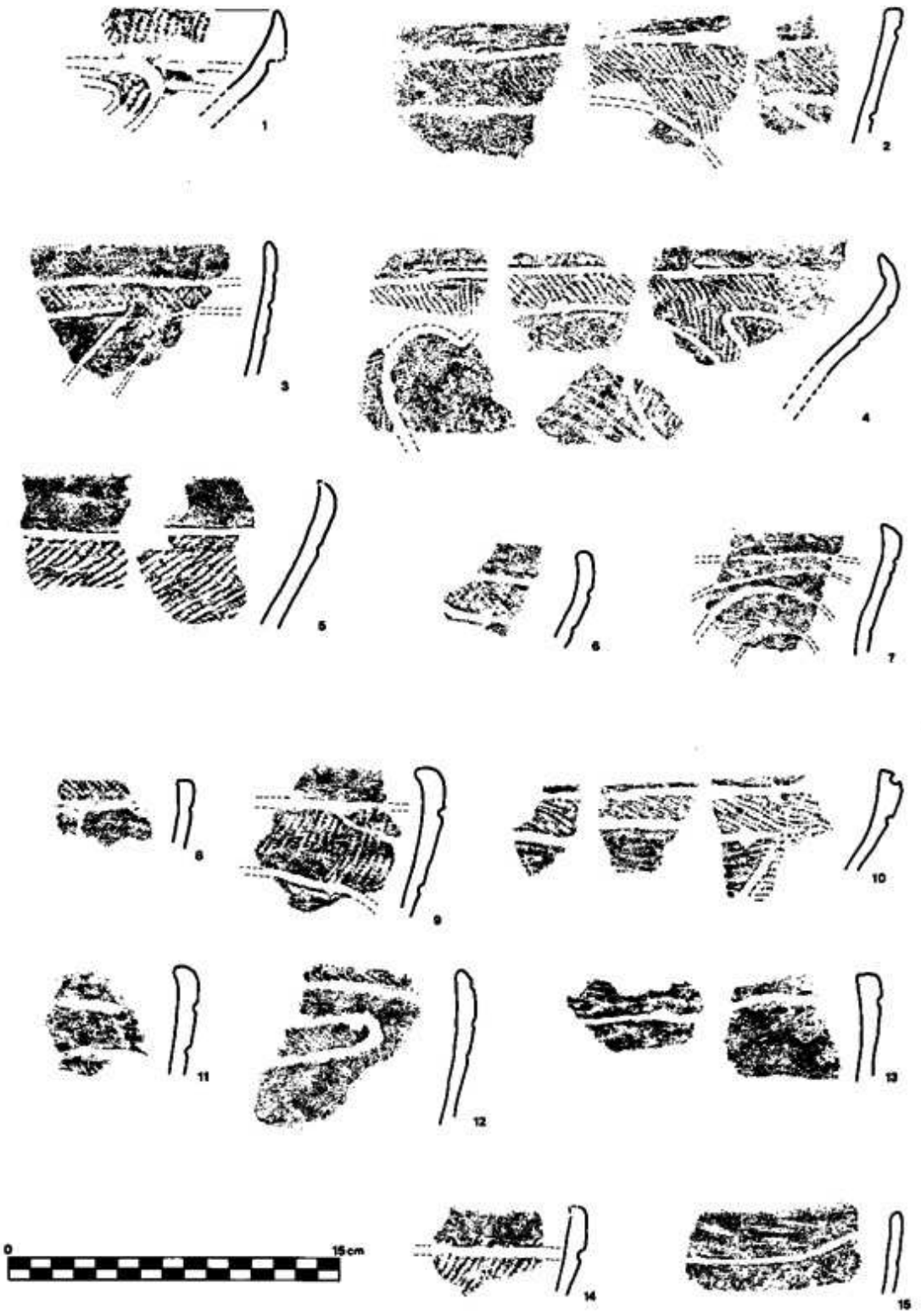
第2類

磨消縄文を有するもので、波状口縁を呈するものをＡ種、平縁のものをＢ種とし、またそのいずれかの胴部と思われるものを第8図にあげた。

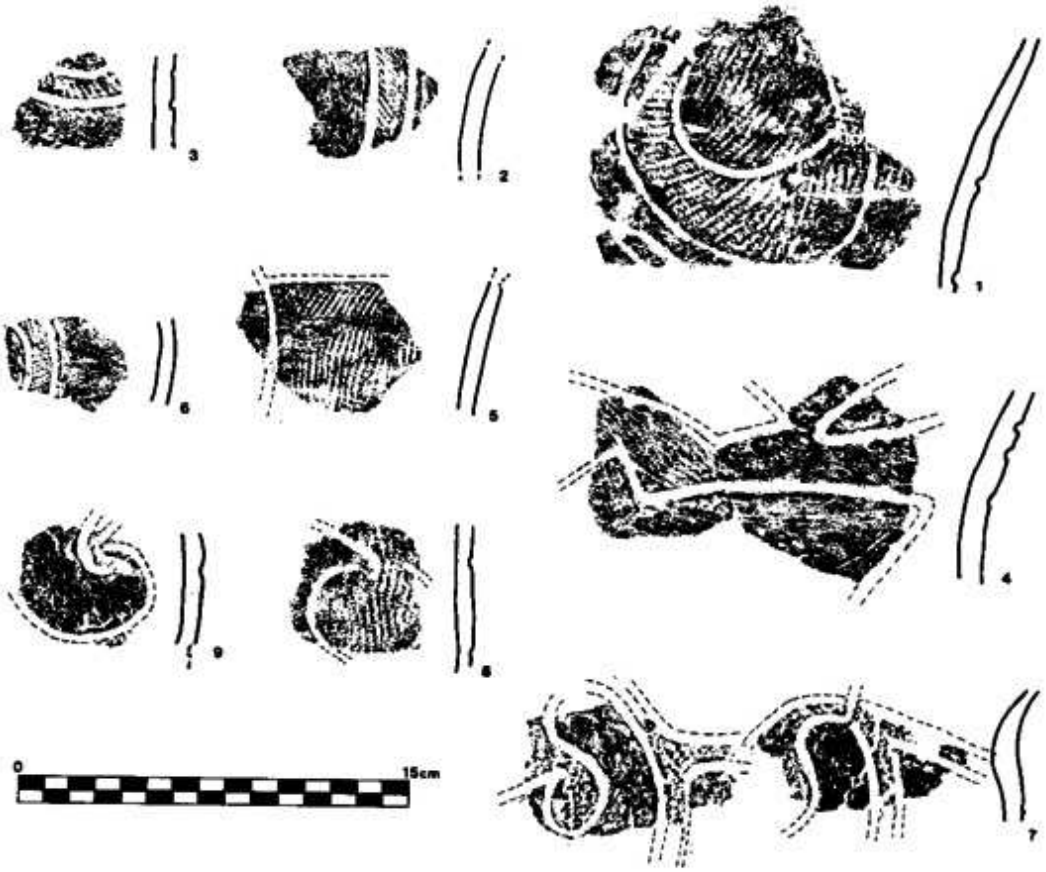
Ａ種（第6図－2～6，図版4－2）

磨消縄文を有し、波状口縁を呈する深鉢である。口縁端部に若干の違いがあるが、すべて内湾するタイプである。しかし文様構成において若干の違いがある。波状頂端部より上下2本の沈線が波状頂端部で垂直に頸部に下がるもの2，5，6（ａ）、波状頂端部に沈線による円形を区画し、その内に「二」の字形を施し、それぞれの端に円形の刺突を行ない、頸部に向かって垂直に2本の沈線を施すもの3（ｂ）、波状頂端部の両側より2本の沈線を引き、その中央に円形の刺突を行ない、その下方に横方向に2本の沈線を施して文様帯を構成するもの4（ｃ）などに分けられる。文様帯を区画する沈線は（ａ）タイプのものがヘラ状の工具で、（ｂ）、（ｃ）タイプのものがヘナタリのような巻具の先端を使用している。縄文は沈線を引く前に行なっているが、文様帯に沿うように施文している。縄文の撚りは（ａ）タイプのものと（ｂ）タイプがＲＬで、（ｃ）タイプのものがＬＲである。

第6図　第1類・第2類A種土器拓影



第7図　第2類B種土器拓影



第8図　第2類A種・B種胴部文様拓影

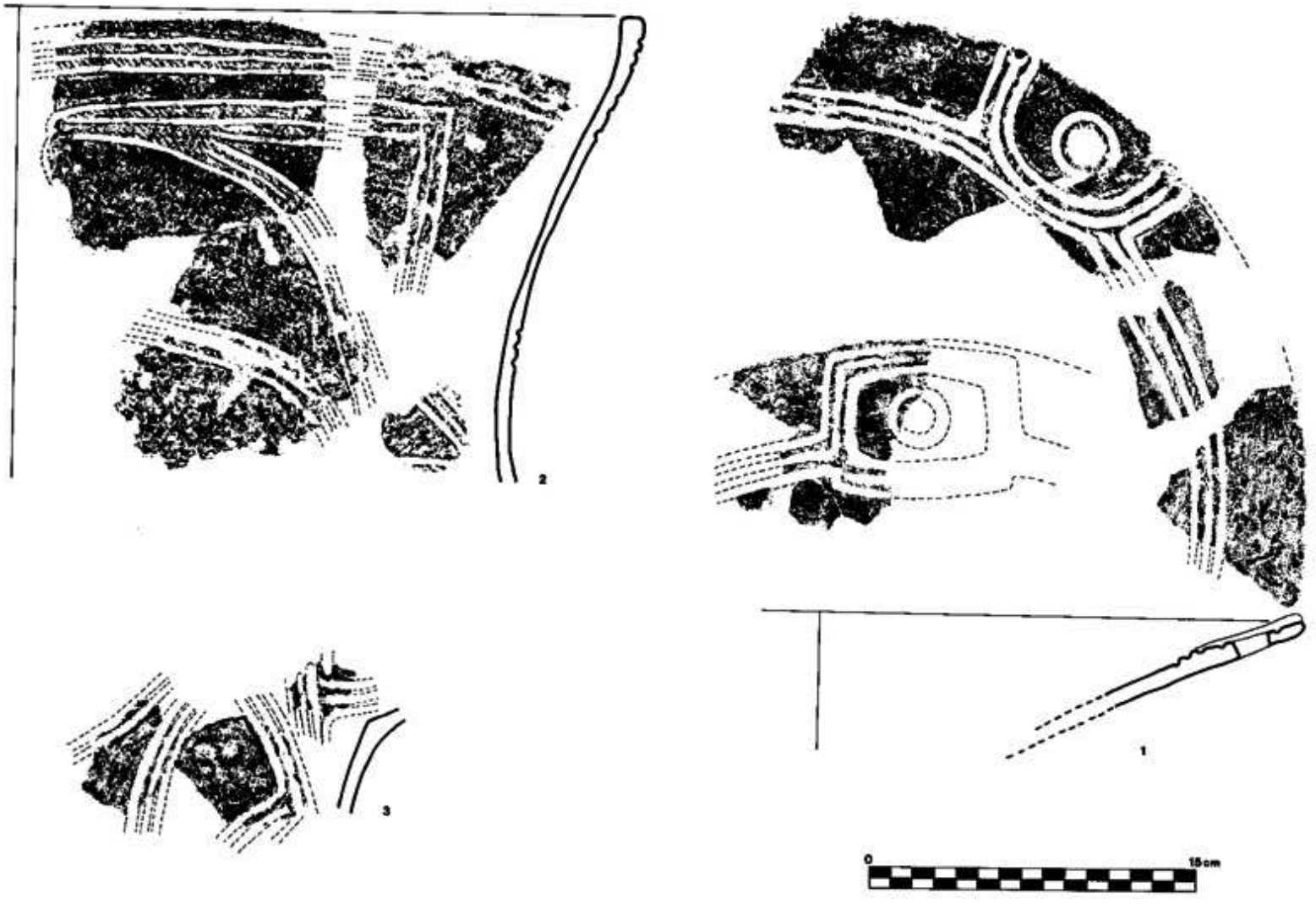
B種（第7図－1～15，図版5－1）

磨消縄文を有し、平縁を呈する深鉢である。頸部がきつくくびれるものと、ゆるくくびれるものとがある。口縁部は内湾、ないし内湾気味のものがほとんどである。頸部がきつくくびれるものほど内湾度が強い。口縁端部の器壁は肥厚したもの、若干肥厚気味のもの、そのままのものなどがある。この中で1番のものだけが、やや違った様相を示す。口縁端部外下側を肥厚させ、一見縁帯文系土器を思わせるけれど沈線のタッチ、縄文もＬＲの太い撚り、文様構成など里木Ⅲ式に類似資料[註1]があり、中期後半の可能性があるが、一応ここではこの一群に入れておく。

他のものもほとんど破片で、文様構成もわかりにくい。その上、風化も激しく縄文の撚りも判別しにくいがＲＬの方が多い。12番は河内の胎土である。

第3類（第9図－1～3，第10図－1，2、図版6－1，2）

三本沈線による文様構成をもつものを一括した。出土量は少なく、図示し得たものがほとんどである。



第9図　第3類土器拓影

1は浅鉢で、口縁部内面に隆帯をもち、そこに三本沈線の文様帯をもつものである。

文様は端部に向かって半円を描き、その中を円形に穿孔し、その周囲に一条の沈線を回すものと、方形に区画し、その中を同じように円形に穿孔し、周囲に沈線を回すもので、おそらく2対づつ交互に配置されているものと思われる。三本沈線の隆帯上にRLの縄文を施している。

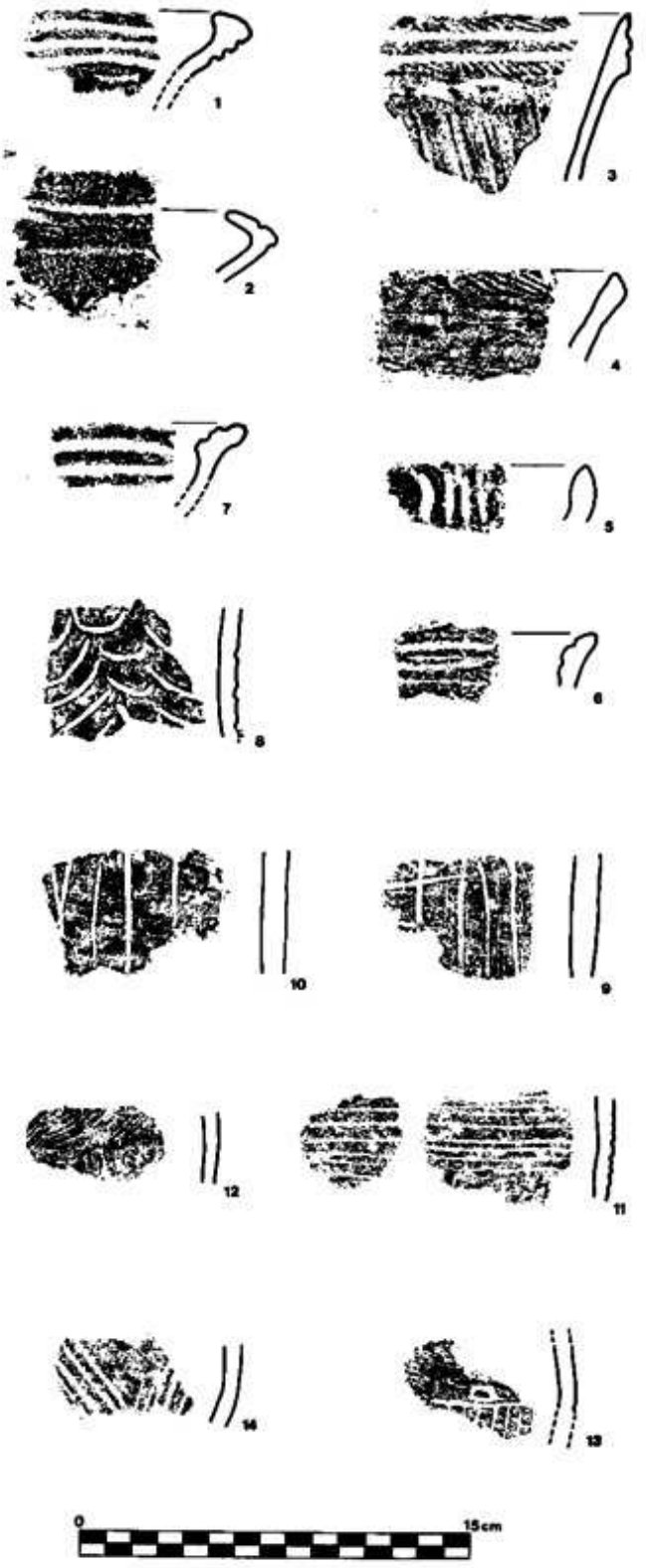
2は大形の深鉢である。このものは三本沈線内に隆帯はないが、RLの縄文を施す。文様は直線的で、三角形状の文様構成をもつものとみられる。三本沈線による施文を福田KII式とみるなかでも、若干異質な感じがするが、布留遺跡出土の資料[註2]に二本と三本の違いがあるが類似のものがみられる。

3は縄文は施されていないが、よく磨かれた土器である。

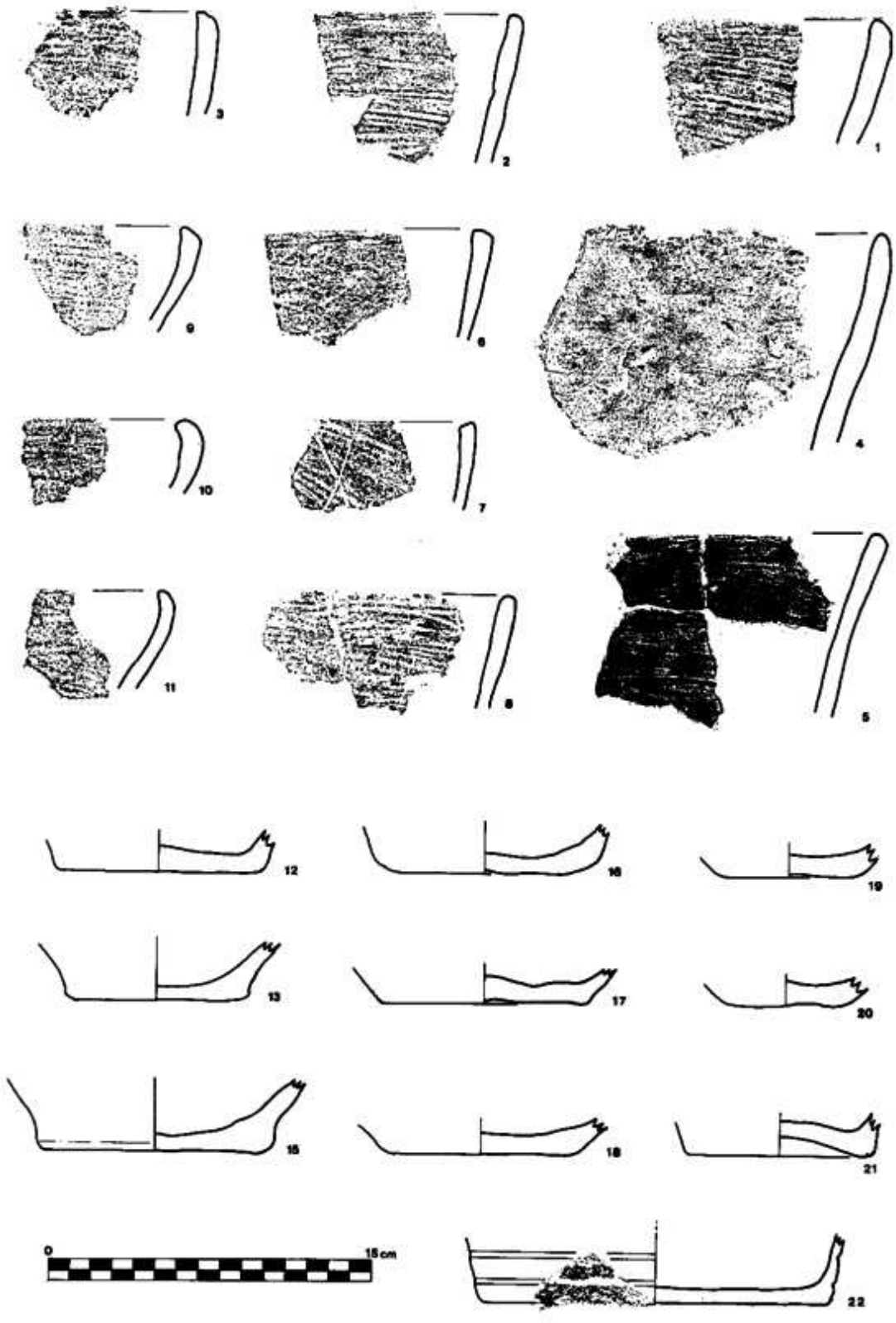
他のものも福田KII式に類例があり、この一群は福田KII式に併行するものと考えられる。

第4類（10図－3～7，図版7－1）

いわゆる縁帯文系の土器を一括した。器形はわかりにくいが深鉢のものと思われる。



第10図　第3類・第4類・垂下沈線・条線文土器拓影



第11図　無文土器拓影・底部実測図

3は口縁部外面にＲＬの縄文を施し、二本の平行沈線を引くもので、その下方は縦方向のあらい条痕仕上である。

4は口縁部外面にＲＬの縄文を施すもので、その下方は横方向にわずかに条痕を残すものである。内面も横方向の条痕仕上げである。5は口縁部外面に沈線による同心円文を施すもの、6は内面を肥厚させ、そこに2条の平行沈線を施すものである。これらのものは北白川上層式に併行するものと考えられる。

第10図－8～14は胴部の破片で垂下沈線、および垂下条線文である。そのほとんどが第4類に伴うものと考えられるが、8のようにヘラ状のもので横方向に弧を描くように施されているものなど、第1類に伴うものと考えられるものもある。[註3] 沈線は櫛状のものと、半截竹管のものとがみられる。

無文土器（第11図－1～11，図版8－1）

条痕仕上げによる粗製土器を一括した。口縁の特徴によると、内湾するタイプ、やや内湾気味のタイプ、真直ぐのタイプのものなどに分けられるが、端部は平坦か、丸く終るものがほとんどである。7のようにヘラ描きで×印の施されているものもある。

底部（第11図－12～22，図版8－2）

平底のもの、凹み底のものに大別できるが、その中でも外端が丸くなっているものも、若干ある。22は2条の平行沈線を引き、その中に縄文を施すものであるが、風化が激しく、撚りは、はっきりしない。平底と凹み底のもののうち、平底のものが多い。

縄文土器のまとめ

以上のような極く限られた断片的な資料で、充分活用できるものとは言えないが、気が付いた事を若干述べてみることにする。

文様構成において全体については定かでないが、2類A種の波状口縁深鉢の口縁部文様は中津式併行期のものとしては、やや特徴的である。縄手遺跡、[註4] 東庄内A遺跡[註5]等の資料にみられる、波状部より若干ずれてＪ字文が施されているものと較べて、波状部より垂直に文様帯がおりるもので、均整がとれ直線的な感覚のするものである。また、3も独特な文様である。しかし、縦方向の文様帯内に横方向の沈線を数段施すものは、他にも二、三例[註6]知られる。

口縁の断面形態をみても、波状口縁のものはすべて内湾するもので、内湾度もきつい。特に波状頂端部の作りは特徴的である。平縁のものでも内湾、ないし内湾気味のものがほとんどである。

縄文の撚りについてみてみると、第1類－ＬＲ、第2類A種－ＬＲ（1点）、ＲＬ（2点）

B種－ＲＬの方が多い。第３類－ＲＬ、第４類－ＲＬである。畿内においては後期前葉から中葉にかけて、概ね、ＲＬよりＬＲが増加する傾向にあるようであるが、野畑遺跡においてはＲＬの方が圧倒的に多く、特に第３類、第４類はすべてＲＬである。資料も少なく、この事だけで一概に言えないが、中部瀬戸内とよく似た様相を示している。このことは地理的な関係によるものかもしれないが、今後資料の増加をまちたい。

今回、第２類は中津式併行期としたが、近年、中津式の細分案[註7]も出され、その細分案に従うならば、中津Ⅱ式併行期になると思われるが、中津式そのものの実態がよく把握されていない現在、これ以上は控えておく。また第３類と第４類との関連も問題がある[註8]。

その他、搬入された土器についてみると、河内の土器が目につく。河内の土器は肉眼観察しやすいこともあり、底部36個体中、５個体分を占めている。また河内以外の他地域の土器も若干ありそうであるが定かにしがたい。

註１　間壁忠彦・間壁葭子　「里木貝塚」（倉敷考古館研究集報７，1971年）

註２　島田暁・小島俊次　「布留遺跡」（奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報第10輯、1958年）

註３　Ｊ、柳ヶ瀬遺跡の資料によくは似ないが、同じような手法の文様がある。岡崎正雄氏の配慮により資料を実見させていただいた。記して感謝いたします。

註４　原田修　「縄手遺跡」１．（縄手遺跡調査会、1971年）

註５　谷本鋭次他　「東庄内Ａ遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県埋蔵文化財調査報告５，　1970年）

註６　滋賀県仏称寺遺跡、和歌山県北山村下尾井遺跡、恩智遺跡等にある。泉拓良、家根祥多両氏より御教示いただいた。また下尾井遺跡の資料は実見させていただいた。記して感謝いたします。

註７　今村啓爾　「称名寺式土器の研究」上・下（『考古学雑誌』63巻１・２号．1977年）

註８　稲口遺跡や森の宮遺跡に共伴している例があり、過渡期の様相を示しているものと思われる。また森の宮遺跡後期Ⅴ群中Fig51－2の資料は、北白川上層式への過渡期的な様相を示しているものと思われる。野畑遺跡においても、包含層の状況から検討の余地がある。『森の宮遺跡第３・４次発掘調査報告書』（難波宮址顕彰会　1978年）

(2) 石器

今回の調査において出土した石器類の大部分は、第3層（包含層）より出土し、遺構に伴う石器は殆んど検出し得なかった。第1表の石器総計表で示すように石器は105点、石核、剥片、砕片類262点である。これらの石器類は、縄文時代の後期前葉から後期中葉に所属する石器である。

石器類の内訳は、石鏃、石錐、削器、使用痕のある剥片、ピエス・エスキーユ、石錘、敲石、磨石、台石、石斧、用途不明品、砥石である。次に器種について、詳述する。

器種	A地区	B地区	C地区	不詳地区	合計
石鏃	4	10	2		16
石錐		2			2
削器		5	2		7
使用痕のある剥片	1	1	1		3
ピエス・エスキーユ	2	5	2		9
ピエス・エスキーユ（削片）	2	13	10		25
礫石錘	4	10	11		25
礫石錘（素材）		2			2
切目石錘		4		1	5
敲石	1		1	1	3
磨石	1		1		2
台石	1			1	2
磨製石斧		1			1
用途不明品		2			2
砥石			1		1
石核	1	1			2
剥片	4	35	7	1	47
砕片	16	134	51	1	202
合計	37	225	89	5	356

第1表　地区別石器総計表

石器番号	器種	地区	層位	石材	現長	最大幅	最厚部	現重量	備考
1	石鏃	C～11	第3層	サヌカイト	2.6	2.5	0.3	1.0	完形
2	石鏃	B～11	第3層	サヌカイト	2.4	1.7	2.0	0.5	完形
3	石鏃	A～14	第3層	サヌカイト	2.4	1.4	0.3	0.6	完形
4	石鏃	A～12	第3層	サヌカイト	1.8	1.3	0.3	0.2	完形
5	石鏃	B～15	第4層	サヌカイト	1.9	1.3	0.3	0.4	完形
6	石鏃	C～11	第3層	サヌカイト	1.4	1.5	0.3	0.3	先端部折損
7	石鏃	B～13	第3層	サヌカイト	1.9	0.9	0.4	0.5	先端、基部折損
8	石鏃	B～15	第4層	サヌカイト	2.0	1.5	0.2	0.6	先端部折損
9	石鏃	A～12	第3層	サヌカイト	2.3	1.7	0.4	0.4	完形
10	石鏃	B～12	第3層	サヌカイト	1.2	1.1	0.3	0.2	完形
11	石鏃	B～11	第3層	サヌカイト	1.4	1.3	0.2	0.4	先端部折損
12	石鏃	B～11	第3層	サヌカイト	1.8	1.1	0.2	0.5	先端、基部折損
13	石鏃	A～11	第3層	サヌカイト	2.2	0.8	0.3	0.7	側辺、基部折損
14	石鏃	B～11	第3層	サヌカイト	1.9	1.3	0.4	0.9	未製品
15	石鏃	B～12	第3層	サヌカイト	1.1	0.8	0.2	0.1	下端部折損
16	石鏃	B～11	第3層	サヌカイト	1.9	1.2	0.3	0.7	未製品
17	石錐	B～13	第3層	サヌカイト	2.4	1.8	0.6	1.2	完形
18	石錐	B～11	第3層	サヌカイト	3.4	1.2	0.7	2.9	完形
19	削器	B～11	第3層	サヌカイト	4.7	5.3	2.0	42.4	
20	削器	B～11	第3層	サヌカイト	3.4	2.9	0.3	5.3	
21	削器	B～11	第3層	サヌカイト	2.8	4.9	1.1	16.7	
22	削器	B～12	第3層	サヌカイト	3.6	2.8	0.7	51.1	
23	削器	B～12	第3層	サヌカイト	1.4	3.3	2.8	2.8	
24	削器	C～12	第3層	サヌカイト	3.7	4.5	0.8	12.5	
25	削器	C～13	第3層	サヌカイト	2.3	3.0	0.6	3.9	
26	使用痕のある剥片	A～11	第3層	サヌカイト	8.5	4.7	0.9	30.0	
27	使用痕のある剥片	B～12	第3層	サヌカイト	3.2	5.6	1.1	12.4	
28	使用痕のある剥片	C～10	第3層	サヌカイト	4.9	2.5	0.8	8.9	
29	ピエス・エスキーユ	B～12	第3層	サヌカイト	3.3	2.3	1.0	7.5	
30	ピエス・エスキーユ	C～12	第3層	サヌカイト	1.7	2.0	0.5	1.6	
31	ピエス・エスキーユ	B～13	第3層	サヌカイト	2.5	2.6	1.8	8.6	截断面
32	ピエス・エスキーユ	A～13	第3層	サヌカイト	3.3	3.7	0.4	18.8	截断面
33	ピエス・エスキーユ	C～11	第3層	サヌカイト	2.8	2.2	0.8	0.6	截断面
34	ピエス・エスキーユ	B～11	第3層	サヌカイト	2.3	2.0	0.8	3.5	截断面
35	ピエス・エスキーユ	B～12	第3層	サヌカイト	2.1	1.9	0.8	4.1	截断面
36	ピエス・エスキーユ	C～11	第3層	サヌカイト	1.3	1.3	0.6	0.8	截断面
37	ピエス・エスキーユ	B～13	第3層	サヌカイト	5.1	3.6	1.4	25.4	截断面
38	ピエス・エスキーユ	B～13	第3層	サヌカイト	5.1	2.6	0.8	11.2	削片
39	ピエス・エスキーユ	C～12	第3層	サヌカイト	4.7	2.3	1.4	8.3	削片
40	ピエス・エスキーユ	C～12	第3層	サヌカイト	3.5	2.9	1.1	7.9	削片
41	ピエス・エスキーユ	C～11	第3層	サヌカイト	2.1	1.2	0.3	0.9	削片
42	ピエス・エスキーユ	C～12	第3層	サヌカイト	3.0	2.1	0.5	2.8	削片
43	ピエス・エスキーユ	C～13	第3層	サヌカイト	3.0	1.5	1.2	3.7	削片
44	ピエス・エスキーユ	B～13	第3層	サヌカイト	2.7	1.8	0.5	2.4	削片
45	ピエス・エスキーユ	B～15	第3層	サヌカイト	3.0	1.7	0.4	1.7	削片
46	ピエス・エスキーユ	C～12	第3層	サヌカイト	3.3	1.3	0.8	2.1	削片
47	ピエス・エスキーユ	B～11	第3層	サヌカイト	1.6	1.1	0.4	0.3	削片
48	ピエス・エスキーユ	C～11	第3層	サヌカイト	2.1	0.8	0.3	0.5	削片
49	ピエス・エスキーユ	B～11	第3層	サヌカイト	1.4	0.8	0.2	0.2	削片
50	ピエス・エスキーユ	B～15	第3層	サヌカイト	1.3	0.4	0.2	0.1	削片
51 a	ピエス・エスキーユ	B～11	第3層	サヌカイト	3.7	3.8	1.4	14.3	
b	ピエス・エスキーユ	C～11	第3層	サヌカイト	2.2	2.1	0.5	2.1	a 接合
c	ピエス・エスキーユ	C～11	第3層	サヌカイト	2.6	2.3	0.6	3.5	a 接合
52 a	ピエス・エスキーユ	B～12	第3層	サヌカイト	3.1	1.7	0.5	2.8	接合
b	ピエス・エスキーユ	B～13	第3層	サヌカイト	3.0	2.0	0.6	4.3	a 接合

第2表　石器計測値表（単位　cm・g）

c	ピエス・エスキーユ	A～12	第3層	サヌカイト	1.7	1.0	0.4	0.5	剥片
d	ピエス・エスキーユ	B～12	第3層	サヌカイト	2.9	2.1	0.6	3.8	剥片
53	石核	A～13	第3層	サヌカイト	8.1	3.9	1.7	45.1	
54	石核	B～11	第3層	サヌカイト	6.0	2.2	1.7	20.9	
55	剥片	B～13	第3層	サヌカイト	6.8	6.8	1.4	62.6	
56	剥片	B～15	第3層	サヌカイト	6.4	2.5	0.9	10.4	
57	剥片	B～15	第3層	サヌカイト	7.1	2.0	1.5	17.3	
58	剥片	B～13	第3層	サヌカイト	4.1	2.8	0.5	7.6	
59	剥片	B～11	第3層	サヌカイト	3.8	4.6	1.0	15.4	
60	剥片	B～11	第3層	サヌカイト	4.0	4.6	0.6	10.0	
61	剥片	C～13	第3層	サヌカイト	2.5	5.8	0.8	8.7	
62	礫石錘	B～13	第3層	砂岩	7.6	7.4	1.3	87.0	完形
63	礫石錘	C～13	第3層	砂岩	7.1	6.5	1.5	87.2	完形
64	礫石錘	C～13	第3層	長石質砂岩	7.2	6.4	1.5	93.5	完形
65	礫石錘	B～12	第3層	砂岩	6.9	6.4	1.5	103.0	完形
66	礫石錘	A～13	第3層	長石質砂岩	8.3	5.8	1.4	80.4	完形
67	礫石錘	B～11	第3層	流紋岩	7.3	6.1	1.4	105.0	完形
68	礫石錘	B～11	第3層	玢岩	6.4	5.7	1.2	68.5	完形
69	礫石錘	C～10	第3層	雑長質砂岩	6.2	5.5	1.8	70.0	完形
70	礫石錘	A～14	第3層	砂岩	7.1	4.7	1.9	83.1	完形
71	礫石錘	C～11	第3層	絹雲母片岩	8.2	7.7	1.5	103.3	完形
72	礫石錘	C～10	第3層	絹雲母片岩	9.2	7.2	1.2	103.0	完形
73	礫石錘	A～13	第3層	絹雲母片岩	9.9	7.2	1.2	173.3	完形
74	礫石錘	B～13	第3層	石英石墨片岩	8.3	7.6	1.5	103.2	完形
75	礫石錘	B～11	第3層	石英石墨片岩	7.7	6.4	1.3	79.7	完形
76	礫石錘	C～13	第3層	石英石墨片岩	8.2	6.6	1.1	99.7	完形
77	礫石錘	B～13	第3層	良台	6.4	5.8	0.9	48.4	完形
78	礫石錘	A～13	第3層	絹雲母石英片岩	6.9	5.3	1.1	59.5	完形
79	礫石錘	C～12	第3層	絹雲母片岩	4.9	4.5	0.8	20.4	完形
80	礫石錘	C～10	第3層	絹雲母片岩	9.1	8.3	2.0	195.1	未製品
81	礫石錘	C～12	第3層	絹雲母片岩	7.9	8.1	1.9	152.4	未製品
82	礫石錘	B～14	第3層	泥質片岩	6.5	6.5	2.0	114.3	素材
83	礫石錘	B～11	第3層	泥岩	6.4	5.4	1.3	71.3	素材
84	礫石錘	C～10	第3層	石英片岩	6.7	3.9	1.3	33.3	½折損
85	礫石錘	B～13	第3層	石英片岩	4.8	5.3	1.2	36.7	½折損
86	礫石錘	B～13	第3層	泥質片岩	8.4	6.0	1.1	56.4	½折損
87	礫石錘	B～11	第3層	石英片岩	4.2	4.9	1.0	22.9	½折損
88	礫石錘	C～13	第3層	ホルンフェルス	8.1	4.5	1.8	84.6	½折損
89	切目石錘	B～11	第3層	泥岩	4.4	3.4	1.6	31.5	完形
90	切目石錘	B～13	第3層	石英質砂岩	5.7	3.0	1.2	28.6	完形
91	切目石錘	B～13	第3層	泥岩	5.6	3.2	1.3	33.9	完形
92	切目石錘	B～11	第3層	赤色泥岩	5.6	2.3	1.0	15.0	½折損
93	切目石錘	表採	第3層	石英質砂岩	5.5	4.2	1.5	54.6	½折損
94	敲石	不詳	第3層	石英斑岩	10.1	7.0	5.3	515.0	完形
95	敲石	A～12	第3層	溶結凝灰岩	11.7	8.8	5.4	740.0	完形
96	敲石	C～10	第3層	石英斑岩	7.5	6.3	2.5	170.0	完形
97	磨石	A～13	第3層	石英斑岩	8.8	6.4	3.7	310.0	完形
98	磨石	C～13	第3層	石英斑岩	9.4	6.2	3.9	375.0	欠損
99	台石	不詳	第3層	長石質砂岩	12.6	8.6	3.6	620.0	完形
100	台石	A～14	第3層	流紋岩	10.3	12.0	3.7	665.0	
101	磨製石斧	B～13	第3層	緑色片岩	5.3	2.5	1.6	23.9	残片
102	用途不明	C～10	第3層	泥質片岩	9.3	7.1	1.8	172.9	
103	砥石	B～12	第3層	硬質砂岩	11.3	9.8	7.0	1350.0	
104	砥石	B～13	第3層	流紋岩	13.6	11.1	3.1	730.0	

第3表　石器計測値表（単位　cm・g）

石鏃（第13図１～16　図版９）

石鏃は、完形品７点、折損品９点出土した。サヌカイトの剥片を用いており、形態的には三角形で、横断面はレンズ状を呈する。

１～11は、周縁剥離調整された石鏃で、器面の一部には第１次剥離面が認められる。１，２，６は、深い抉り状を呈し、他の石鏃とは対象的である。４，７は、両側縁辺部に鋸歯状縁を形成している。12，16は、半欠しているため形態は明確ではない。14，16は製作途中の失敗したものか未製品であろう。

石錐（第12図17～18　図版９）

石錐は、完形品２点出土し、サヌカイトの剥片を用いており、使用痕は認められない。

17は、三角形状で頭部から錐部にかけて細く剥離調整されて、機能部の横断面はレンズ状を呈する。18は、頭部から錐部にかけて棒状であり、機能部の横断面はレンズ状である。

削器（第14～15図19～25　図版９）

不定形な削器で、サヌカイトを用いており、７点出土した。これらの削器は、粗雑な製作技術である。

19は、小形のサヌカイト礫を素材としており、両面共に自然面が見られ片面の縁辺部に刃縁を形成する。20～25は、小形の剥片を素材としており、器面の縁辺部に第２次剥離調整による刃縁を形成している。

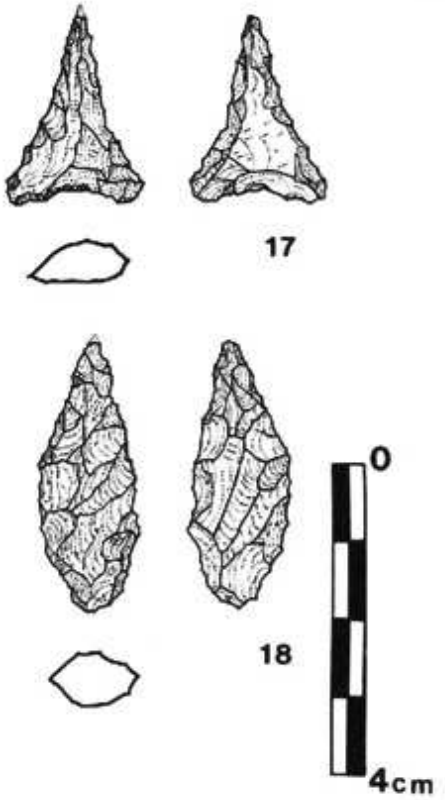
使用痕のある剥片（第16図26～28　図版９）

剥片の縁辺部に小剥離痕が認められた。これらの剥離痕は、使用の際に生じた刃こぼれと考えられるので使用痕のある剥片に分類した。

26～28は、縦長、横長のサヌカイトの剥片を素材としており、剥片の側縁辺部に使用による連続的な小剥離痕が認められる。

ピエス・エスキーユ（第17～20図29～52 図版10･11）

ピエス・エスキーユ[註1]は、サヌカイトの剥片を素材としており、截断面のない石器３点、截断面のある石器７点、削片25点出土した。



第12図　石錐実測図

29，30は、截断面のない石器で両面共に剥離調整を施し縁辺部には潰れ痕が認められる。31～37は、截断面のある石器で、31は相対する二辺に器面調整後に両端部の上下方向から截断面を形成する。他のピエス・エスキーユは、器面縁辺部の一部に潰れた形跡が認められ、器面の相対する一辺に垂直打撃により截断面が形成されている。38～50は、截断面のない石器から縁辺の末端部に加撃され本体より分離した削片である。削片は縦長方向に截断され、43の截断面は上下両端にバルブが著しく認められ、いわゆる両極打法による削片である。51，52は、接合するピエス・エスキーユで、近距離間での接合した資料である。51のAは、台形状で上下両端の縁辺部に小さな潰れ痕が認められ、片面の両側縁辺部に2枚の削片が接合する。Bの剥片は、本体の左側縁辺部の上端より加撃され削片を剥離している。Cの削片は、本体より2枚前後の削片を剥離した後に右側縁辺部末端の斜め方向から加撃され削片を剥離している。52は、同一個体のピエス・エスキーユの削片類である。A，Bの削片は、接合資料でAの上端部より加撃されA，Bの削片が分離している。C，Dの削片は、接合せずDの上端部に潰れ痕があり、その縁辺部には削片を剥離した截断面が認められる。

石核（第21図53～54　図版12）

石核は、サヌカイトの小礫を用いており2点出土した。

53，54は、小形の石核で、原石から初期の剥片を4枚程度生産している。

剥片は、第1表に表示したように多数出土し、石器の素材となった剥片・石器製作時に生じた砕片などが多数出土した。

55は、円形状を呈する剥片で、剥片の両面は新旧関係を示す剥離痕であり、片両の縁辺部に自然面がみられる。56～58は、縦長の剥片で、59～61は、横長の剥片である。57を除く剥片類の片面には、自然面が認められる。図示した剥片は、主に定形化した剥片であり原礫から初期の段階に剥離した剥片である。

石錘

石錘[註2]は、礫石錘と切目石錘の2種類に分類される。出土した石錘は礫石錘が完形品18点、未製品2点、素材2点、折損品5点、切目石錘は完形品3点、折損品2点である。石錘は包含層に分布し、特にB地区において礫石錘は集中して出土した。石錘に用いられた石材[註3]は、11種類の川原の転礫を用材としている。

礫石錘（第25～28図62～79　図版13～14）

62～79は、礫石錘の完形で礫の長軸付近の両端部に数回の剥離調整によって、打欠面を形成している。

礫石錘の未製品（第29図80～81　図版14）

80，81は、礫石錘の未製品で礫の長軸上端部に打欠面を形成し、下端部は未調整である。

石錘の素材（第29図82～83　図版14）

82，83は、形態的に石錘の素材として考えられる。

礫石錘の折損品（第29･30図84～88 図版14）

84～88は、礫石錘の折損品である。折損品は、使用によって折損し得たものか石錘の製作の際に失敗したものかは明らかではない。

切目石錘（第30図89～93　図版14）

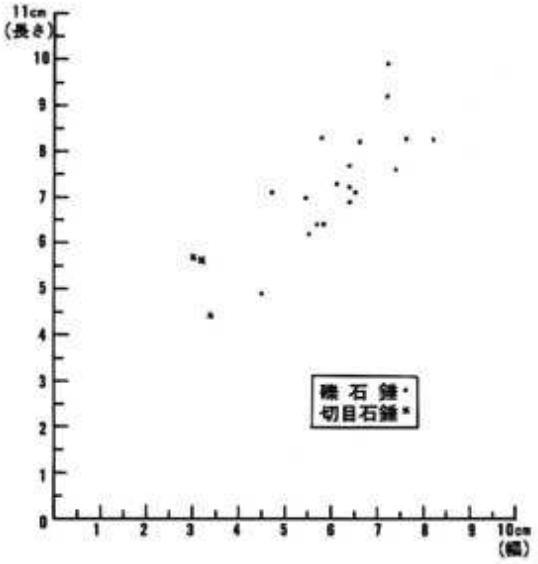
89～91は、切目石錘の完形品で、92～93は折損品である。礫の長軸部に浅い切目調整を施している。礫石錘とは対象的で小形の切目石錘である。

第４表は、礫石錘と切目石錘の長幅関係で礫石錘の最大長9.9cm、最大幅7.6cmであり、表示したように７cm前後に分布している。切目石錘は、４cm前後に分布している。次に石錘の重量比について、第５表に表示したように礫石錘の軽量は48.4ｇで、最大重量は172.3ｇを測り、切目石錘は20～30ｇ台に分布している。

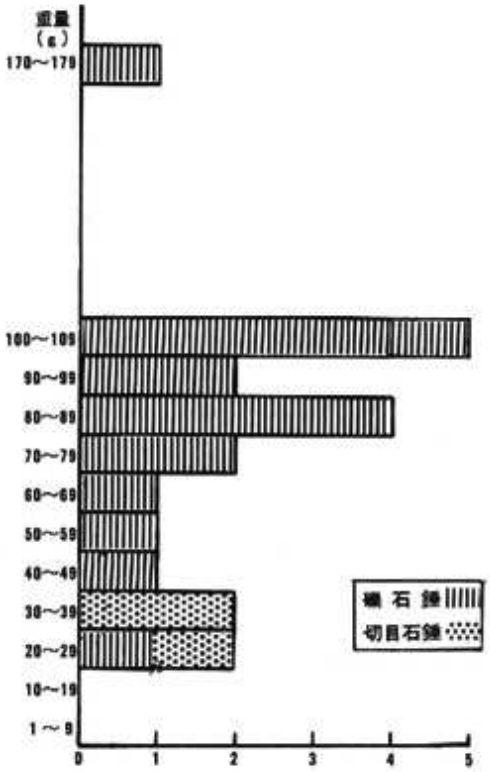
石錘の長幅分布比と重量分布比との相関関係を表示した。次回の調査においても石錘は増加するものと考えられ、石錘の分布比は逆転する可能性もある。

敲石（第31図94～96　図版15）

敲石は、３点出土した。円礫、角礫は、多数出土したが敲打痕のある礫を敲石とし



第４表　石錘長幅分布化表



第５表　石錘重量分布比表

て分類した。敲石に用いられた石材は、石英斑岩、溶結凝灰岩の礫を用いており、器面の一部に使用による敲打痕を有している。

磨石（第31図97～98　図版15）

磨石は、2点出土した。磨石に用いられた石材は、石英斑岩の円礫を用いており、器面縁辺部の局部に使用による擦痕を有している。

台石（第32図99～100　図版15）

台石は、2点出土した。台石に用いられた石材は、長石質砂岩、流紋岩の礫を用いている。

99は、楕円形状を呈し両面の中央に使用による浅い敲打痕を有している。100は、半欠品で器面には自然の凹部を利用した台石である。

磨製石斧（第32図101　図版15）

磨製石斧は、1点出土した。磨製石斧に用いられた石材は、緑色片岩を用いている。磨製石斧の残片であるため器面の研磨方向は明確ではないが、入念に研磨調整が施されている。

用途不明（第32図102　図版15）

楕円形状を呈する泥質片岩の石材を用いており、上端の右側縁辺部の局部に凸状の摩り切痕を有するが、用途は不明である。

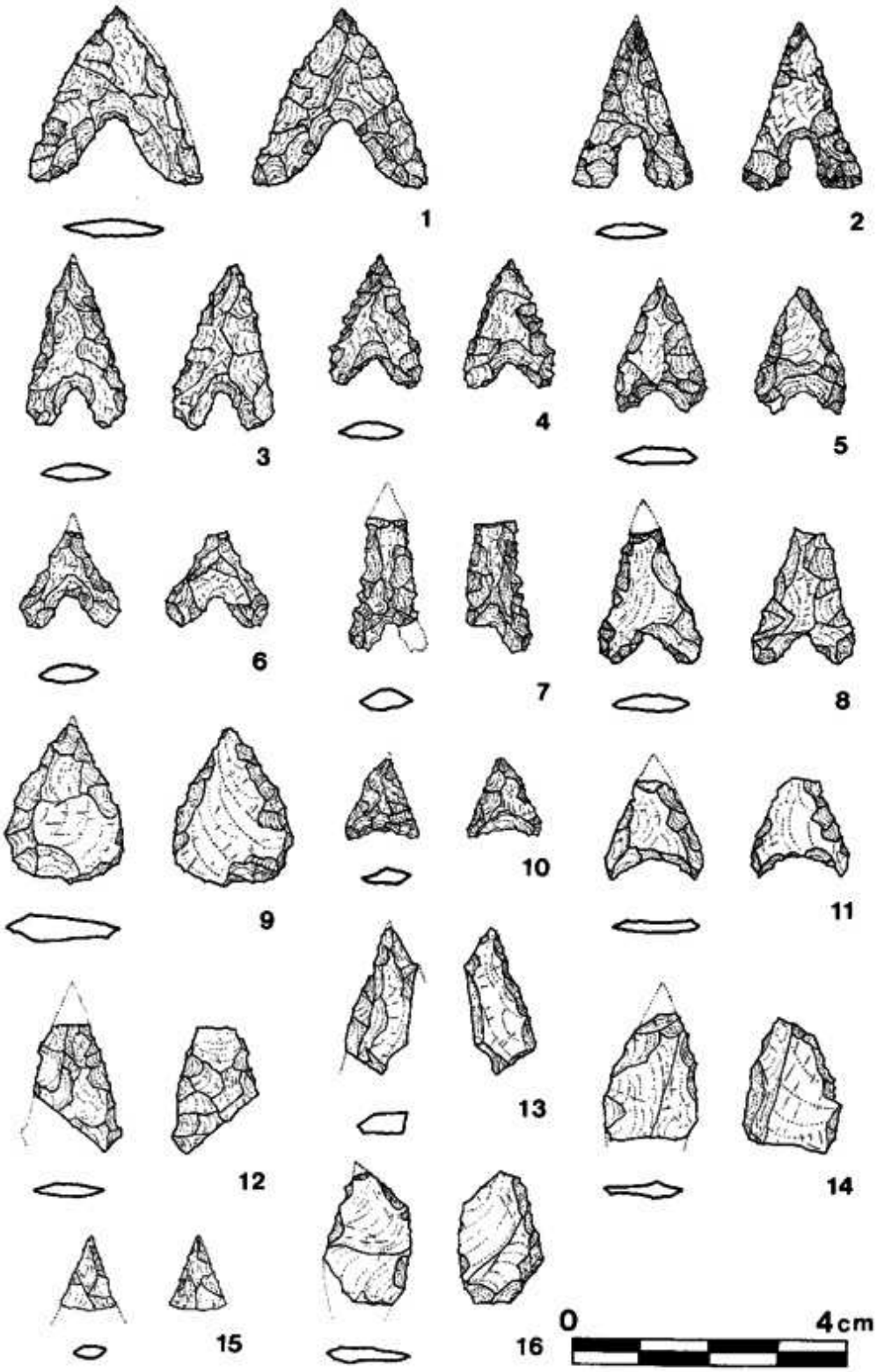
砥石（第33図103・104　図版15）

砥石は、2点出土した。砥石に用いられた石材は、角礫と板状礫の硬質砂岩、流紋岩を用いており、礫の片面に砥面部を形成している。

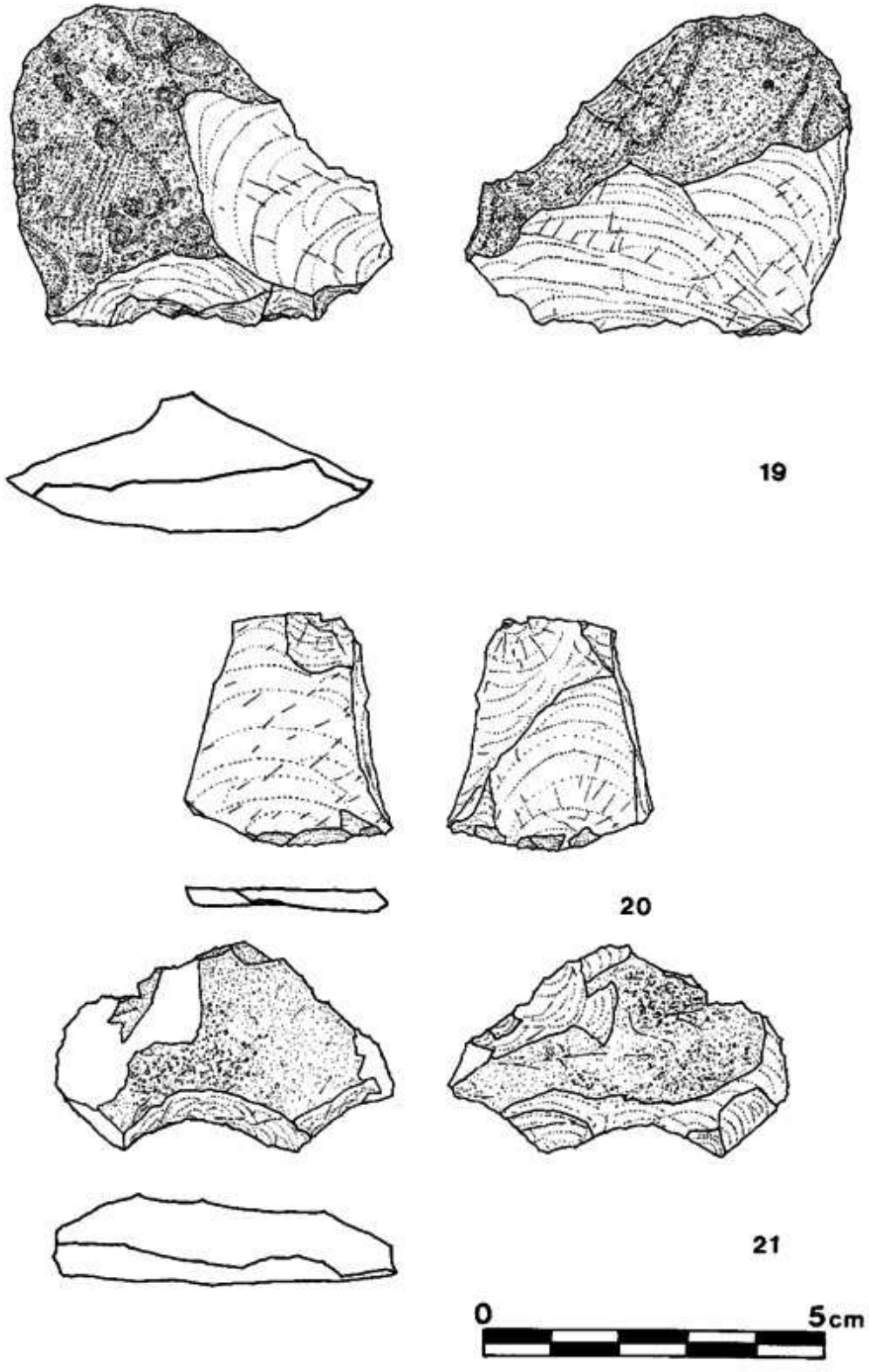
註1　ピエス・エスキーユは、平行四辺形を呈し階段状剥離によって形成され、その縁辺部に使用による小さな潰れ痕と鋸断面が残されている石器で、各地に分布している。ピエス・エスキーユの時期については、旧石器時代後期から弥生時代後期までの年代幅をもたれている石器である。また、使用目的は、複数の使用目的が考えられている。

註2　生産用具である石錘は、従来漁網錘に使用されていたと考えられていたが近年、渡辺誠氏により織物の錘にも使用されていたと指摘されている。

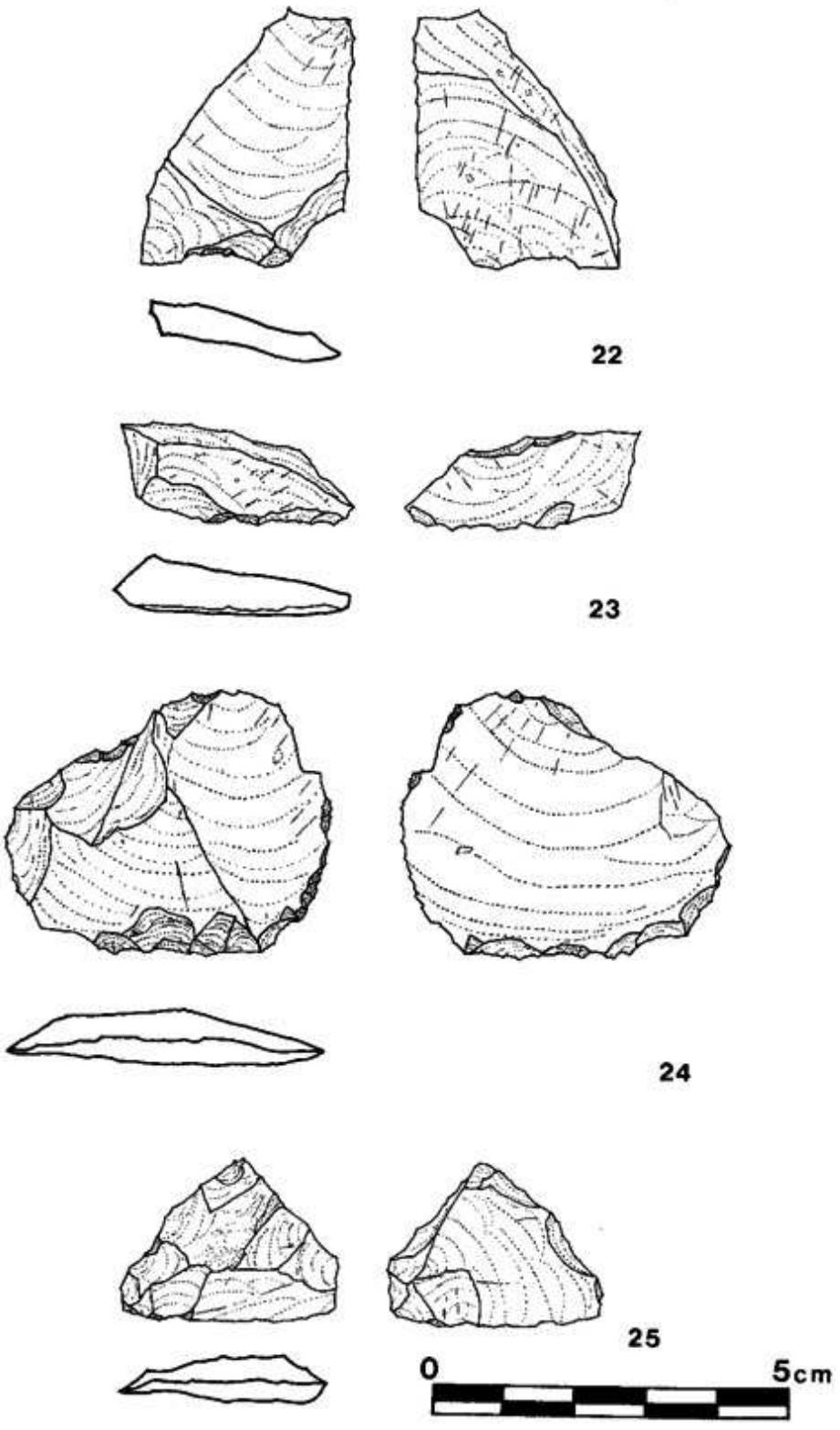
註3　石錘の用材は、大阪府周辺地区の河川床に分布している扁平な自然礫を使用している。石材は、砂岩、流紋岩、珪岩、細雲母片岩、石英石黒片岩、頁岩、細雲母石英片岩、雲母片岩、泥質片岩、石英片岩、ホルンフェルス類の石材を用材としている。



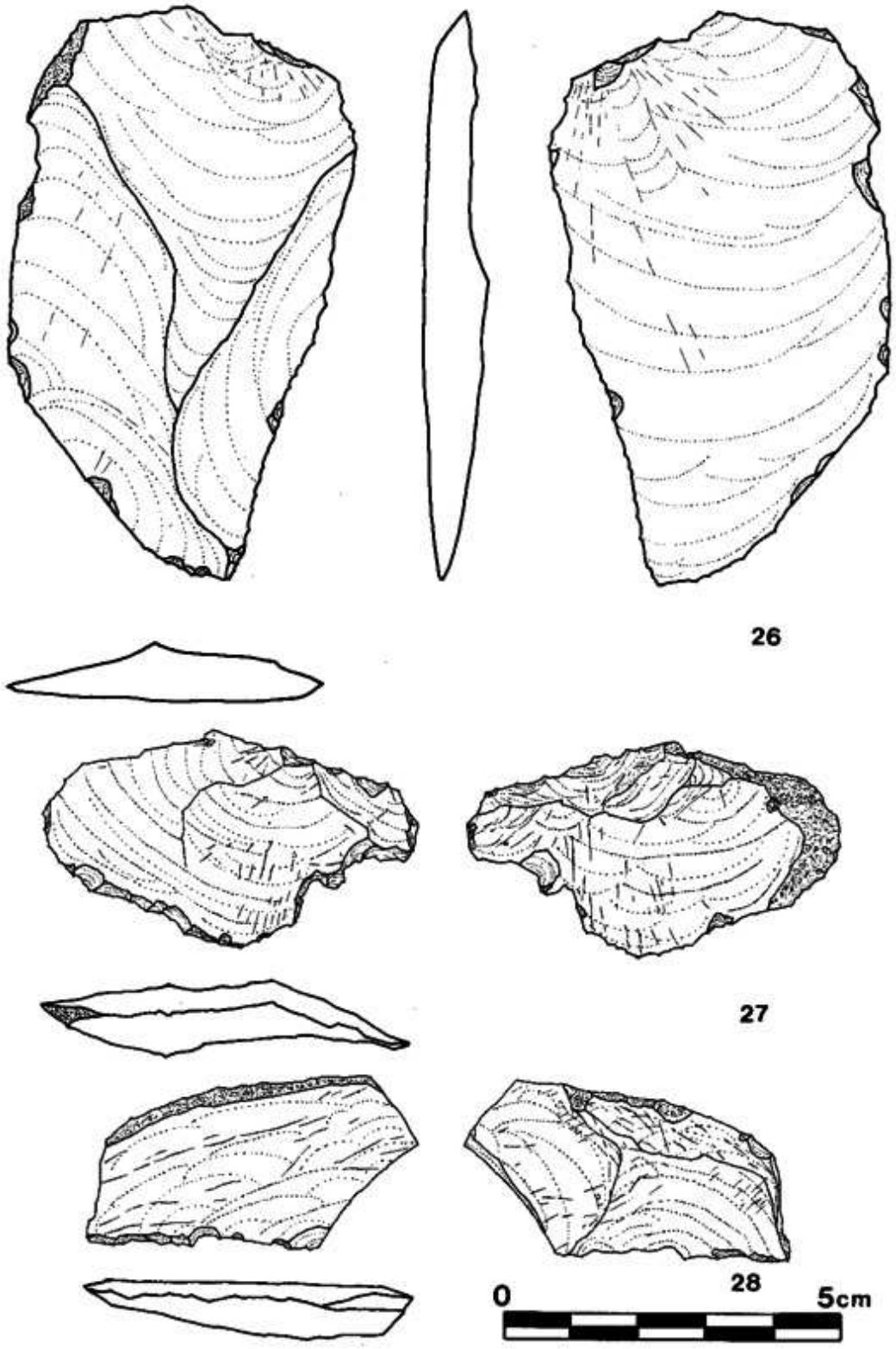
第13図　石鏃実測図



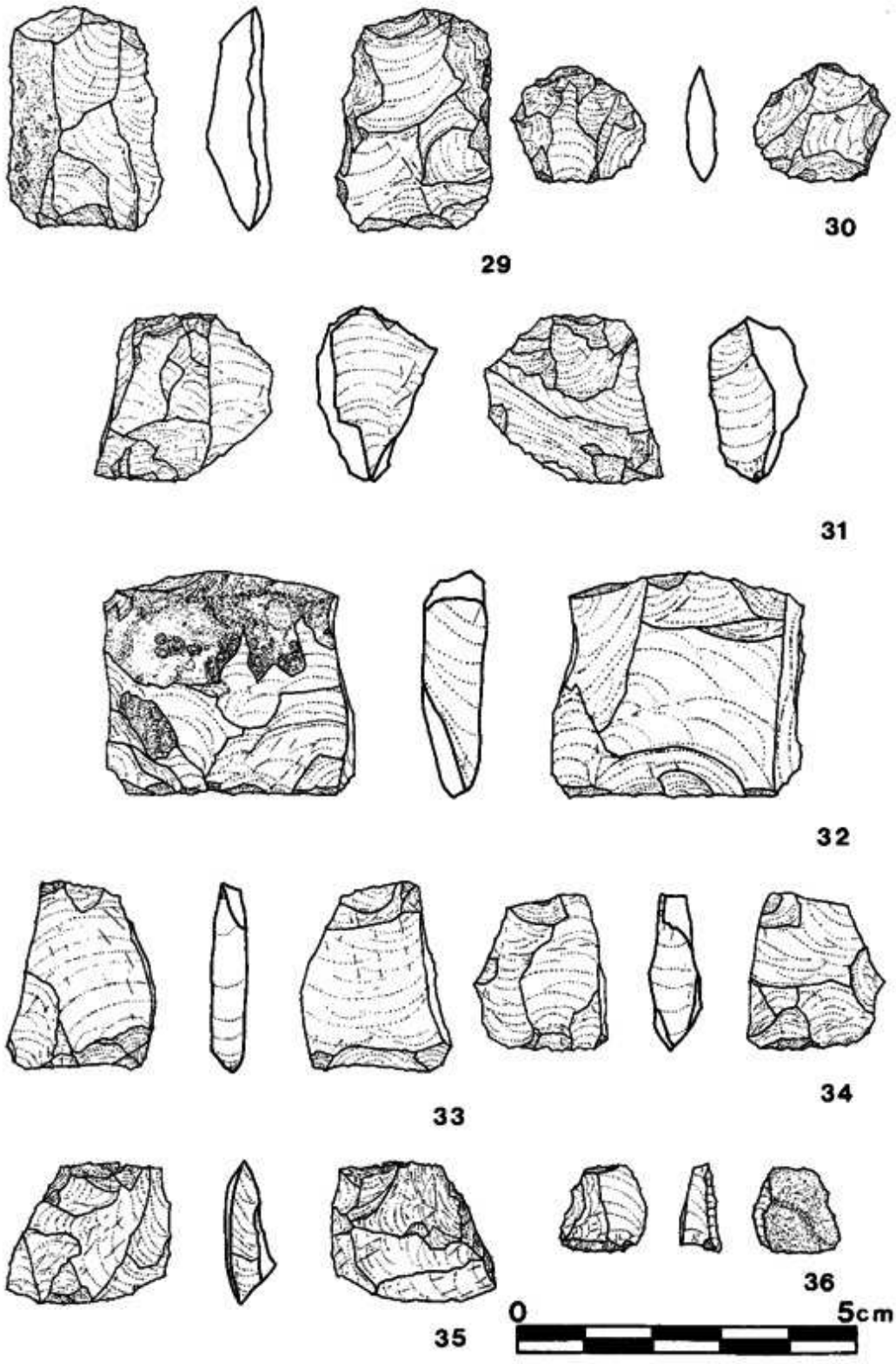
第14図　削器実測図



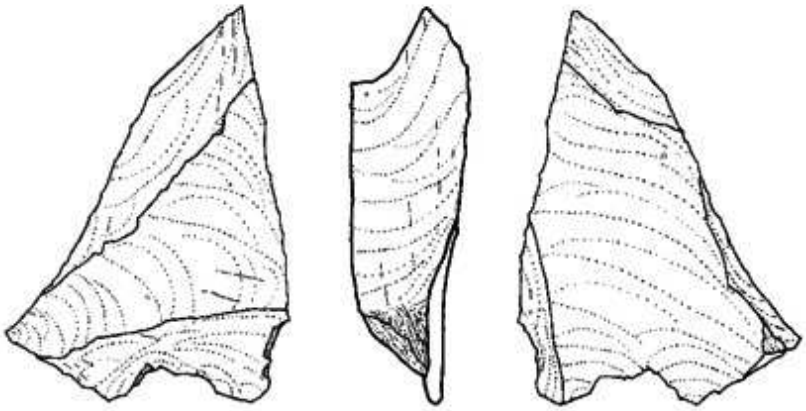
第15図　削器実測図



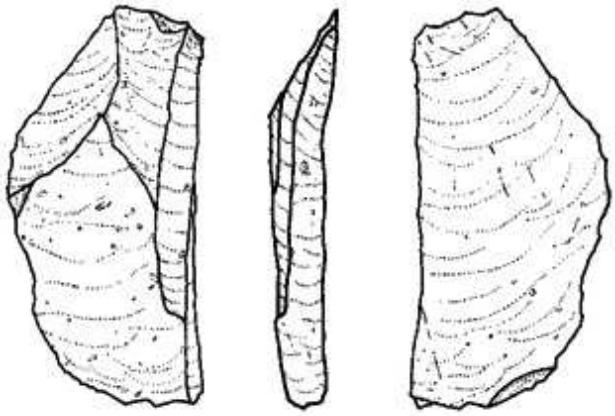
第16図　使用痕のある剥片実測図



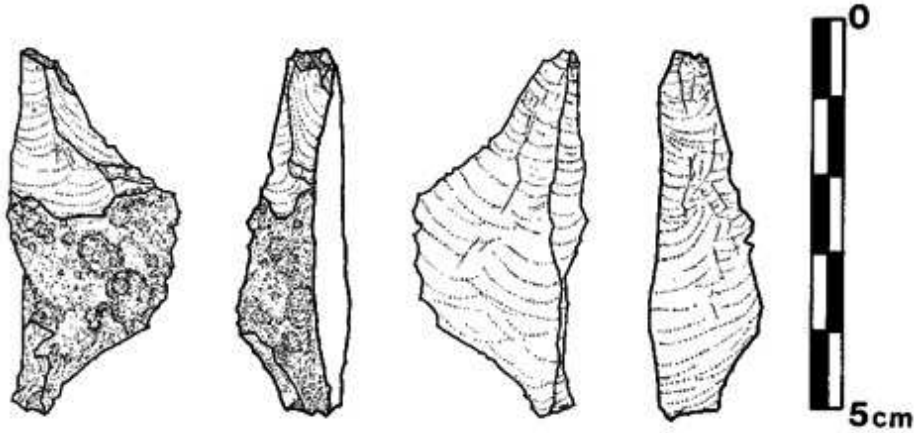
第17図　ピエス・エスキーユ実測図



37

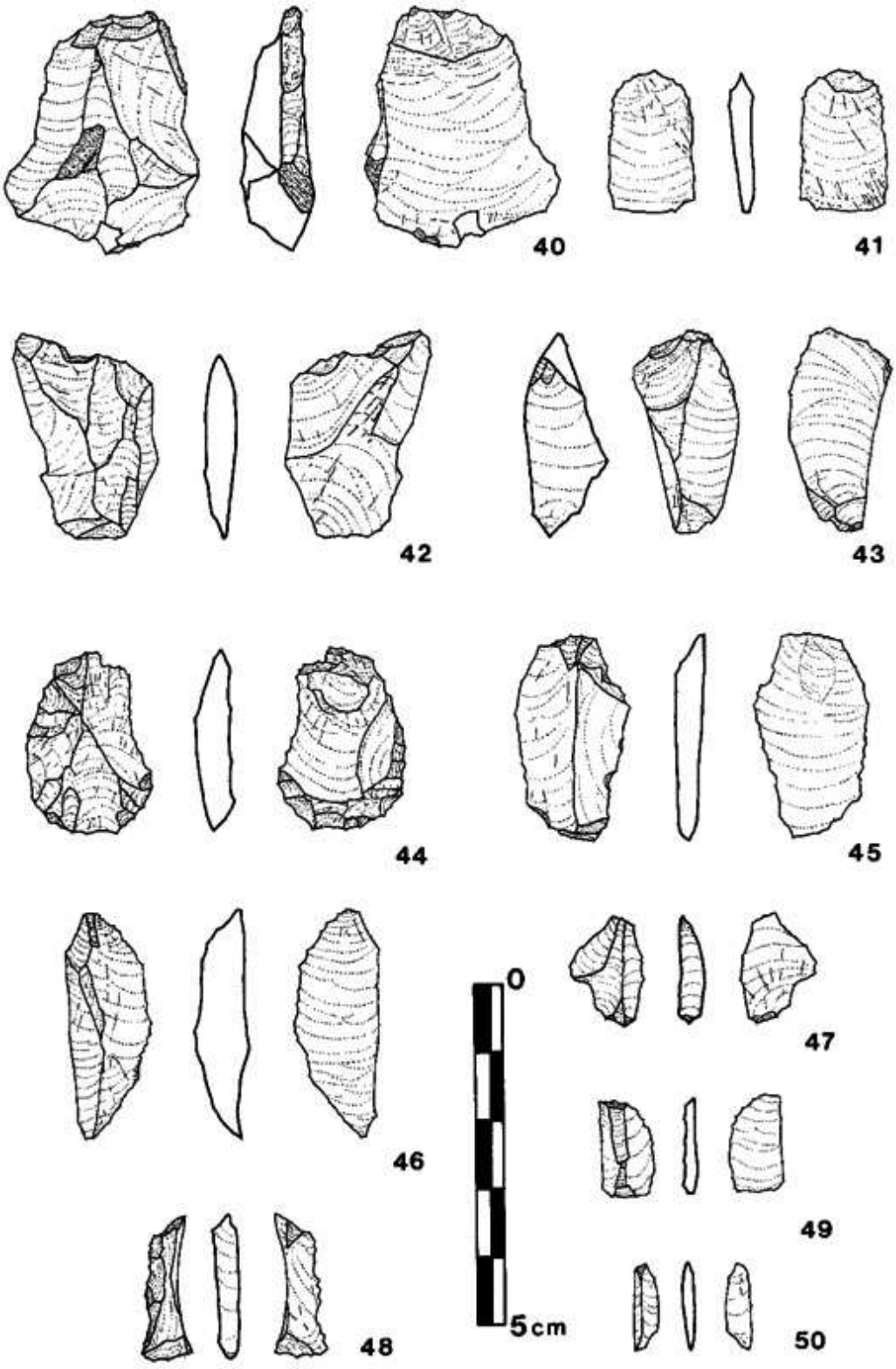


38

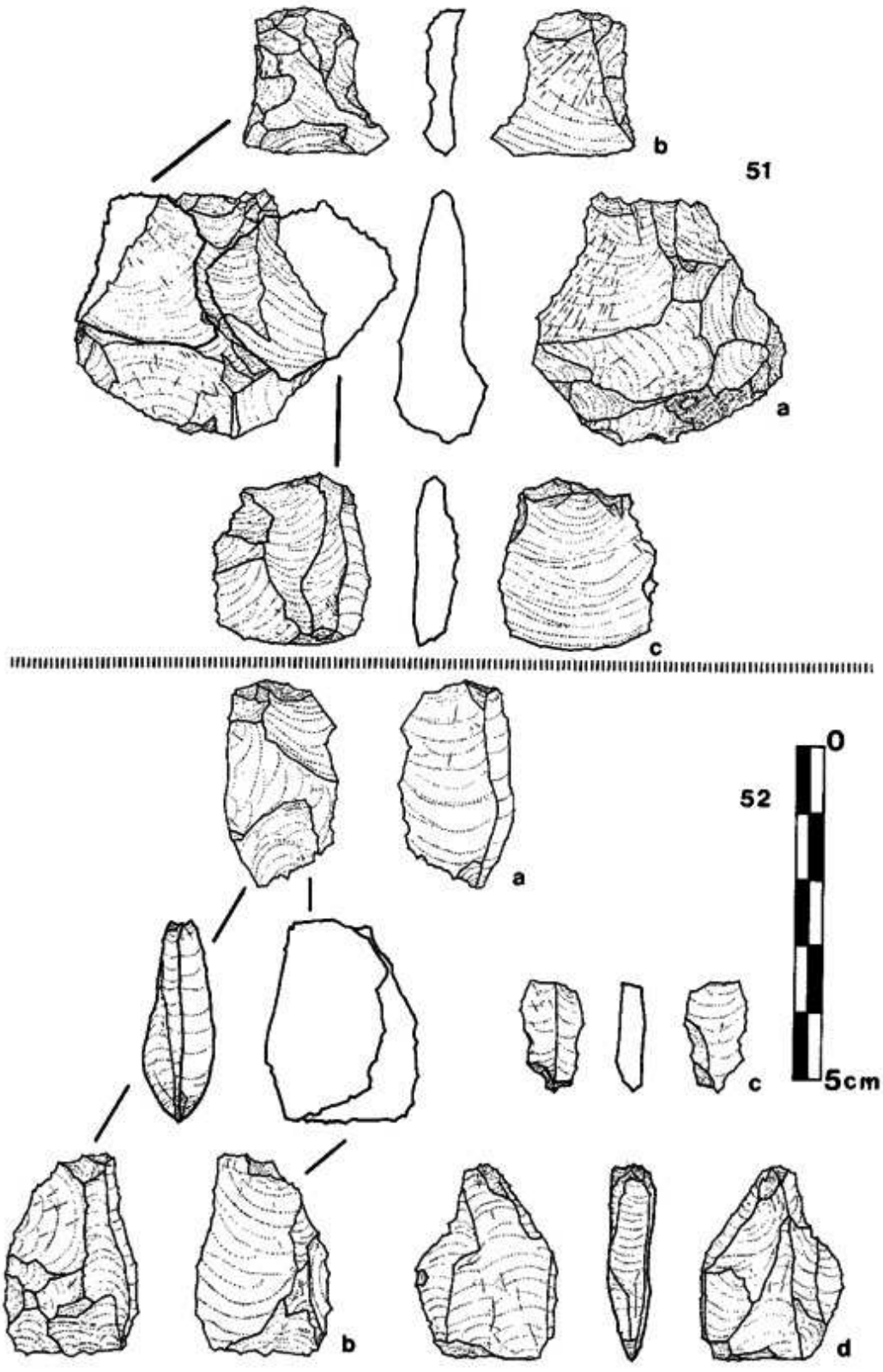


39

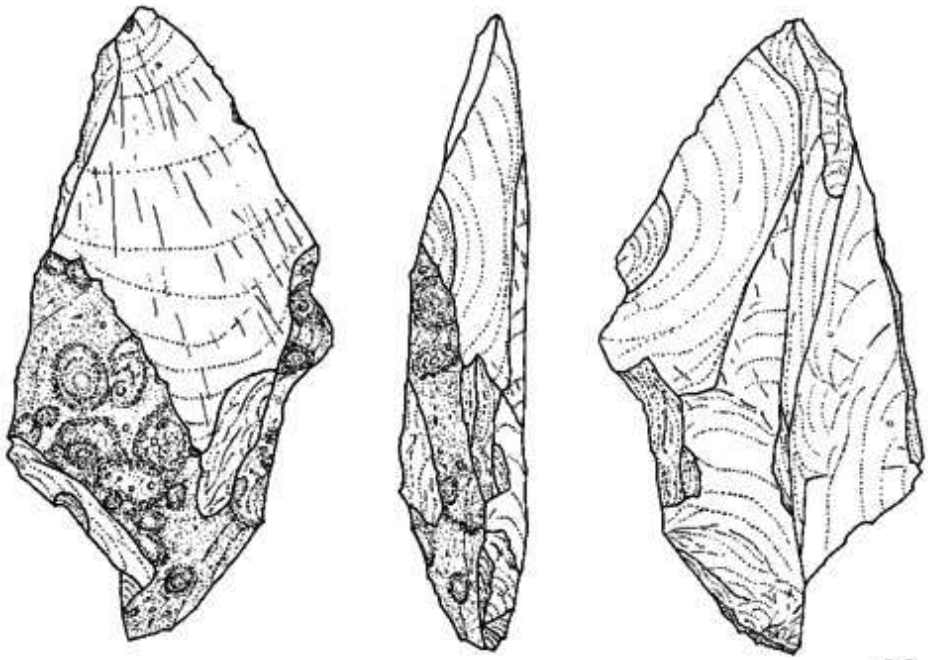
第18図　ピエス・エスキーユ実測図

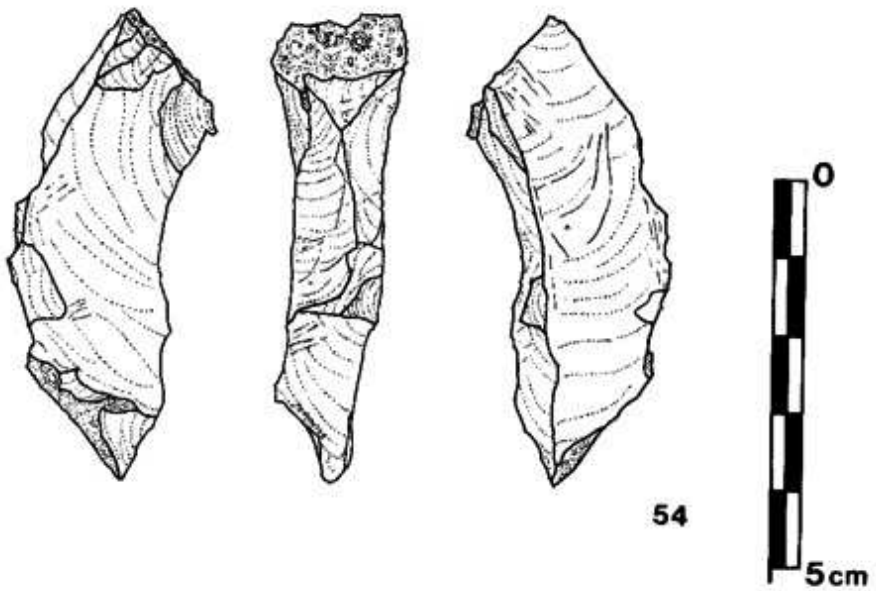


第19図　ピエス・エスキーユ実測図

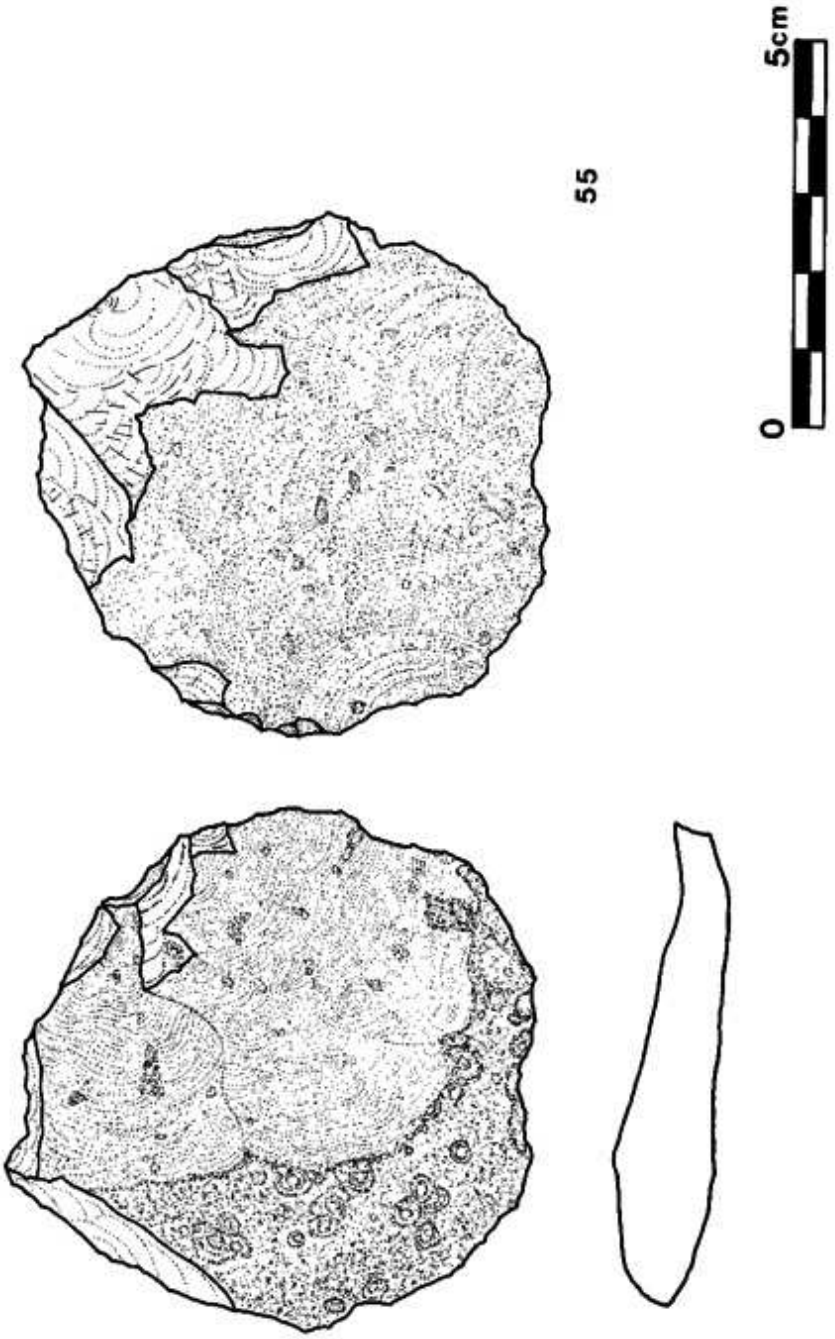


第20図　ピエス・エスキーユ接合資料実測図

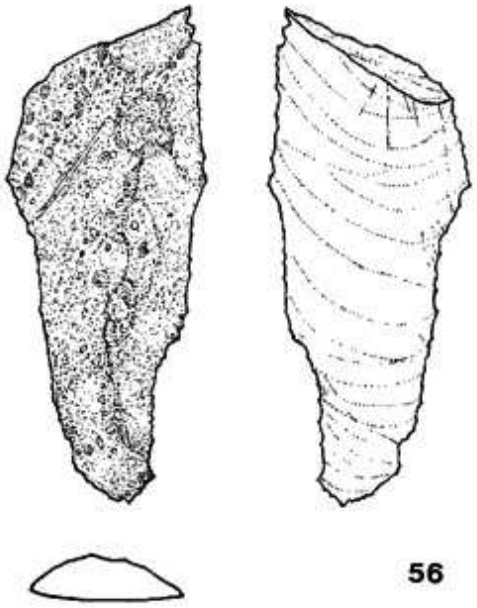


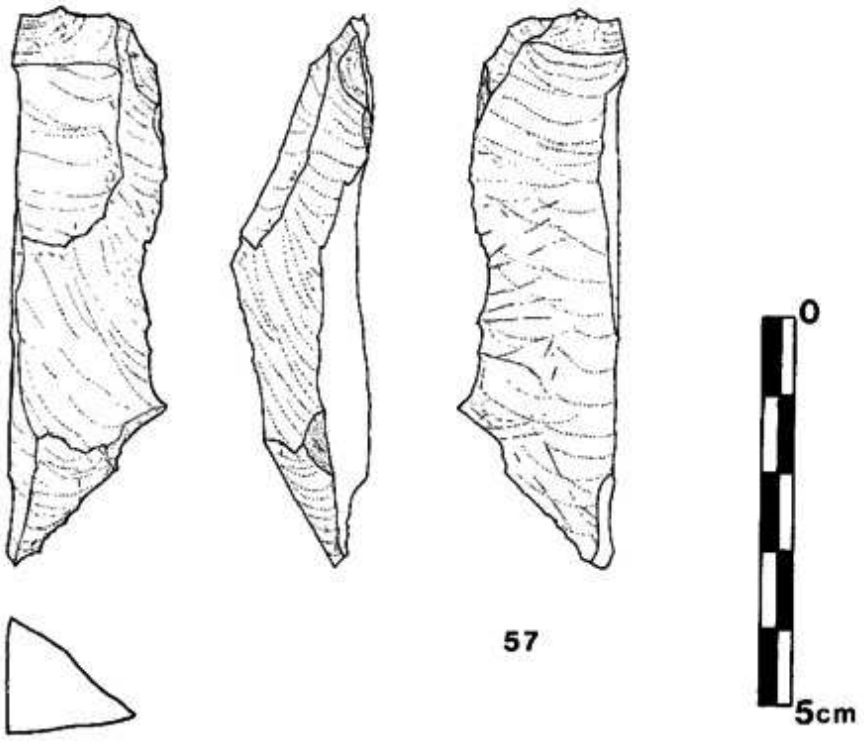


第21図　石核実測図

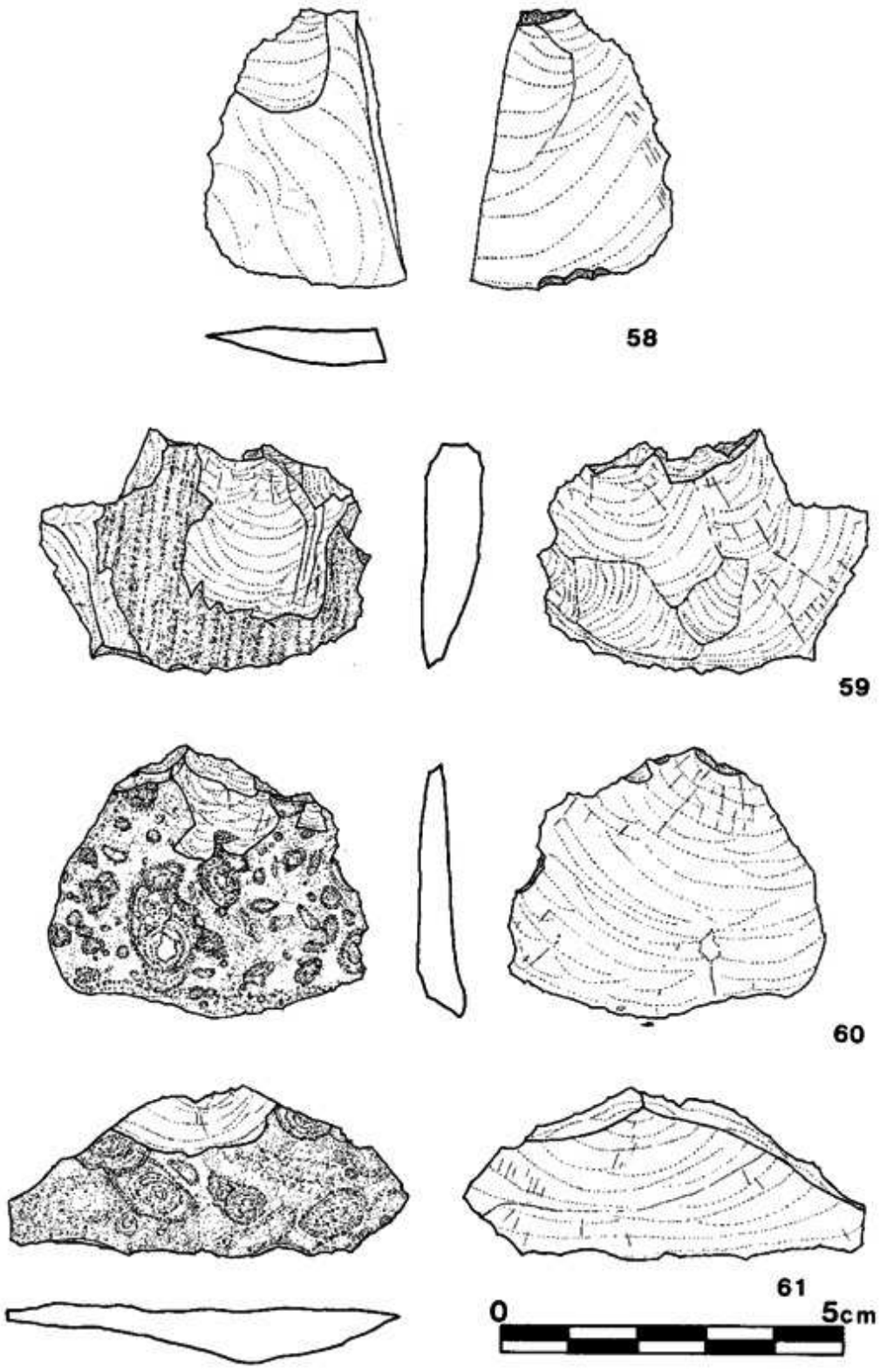


第22図　剝片実測図

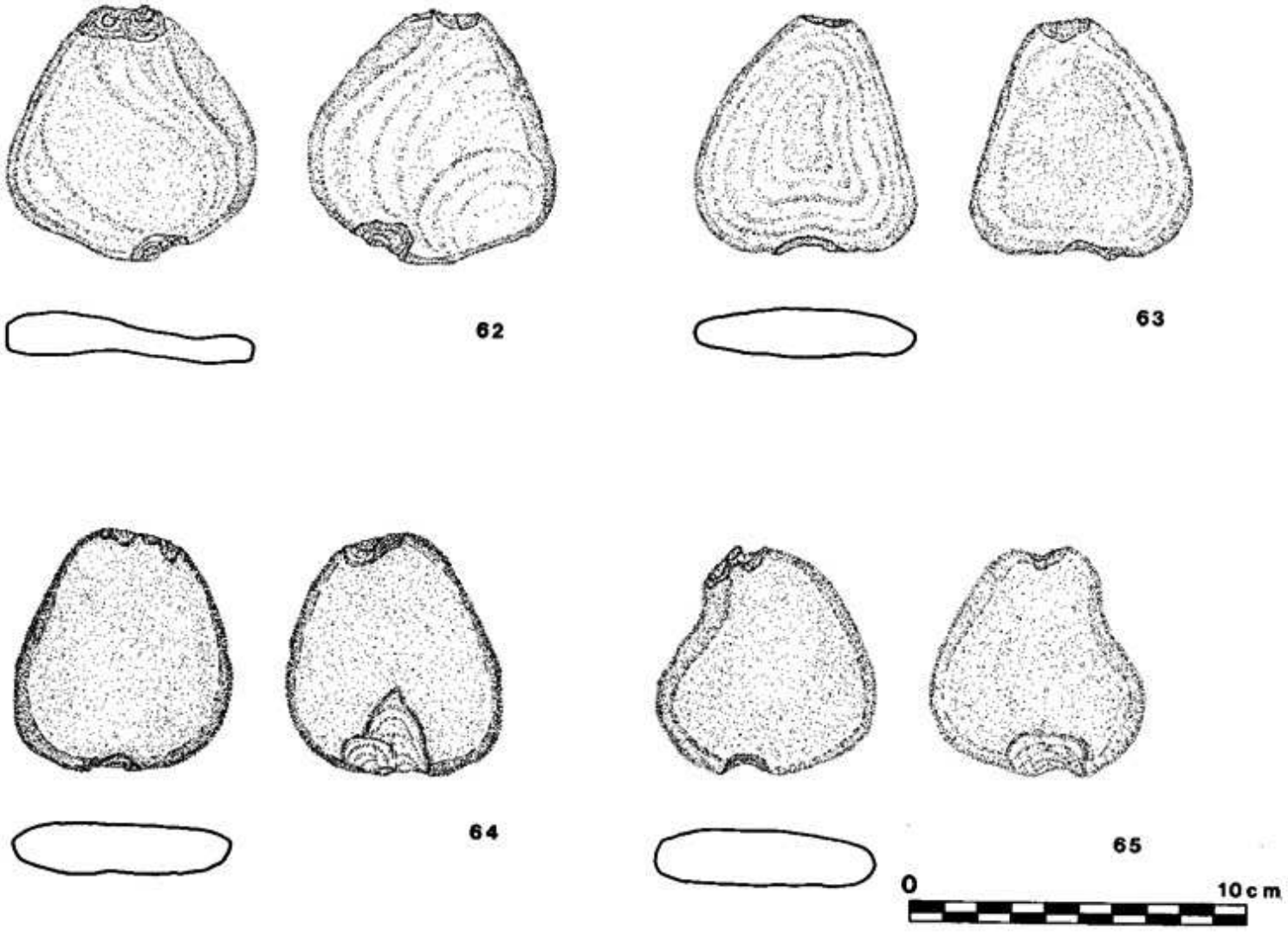




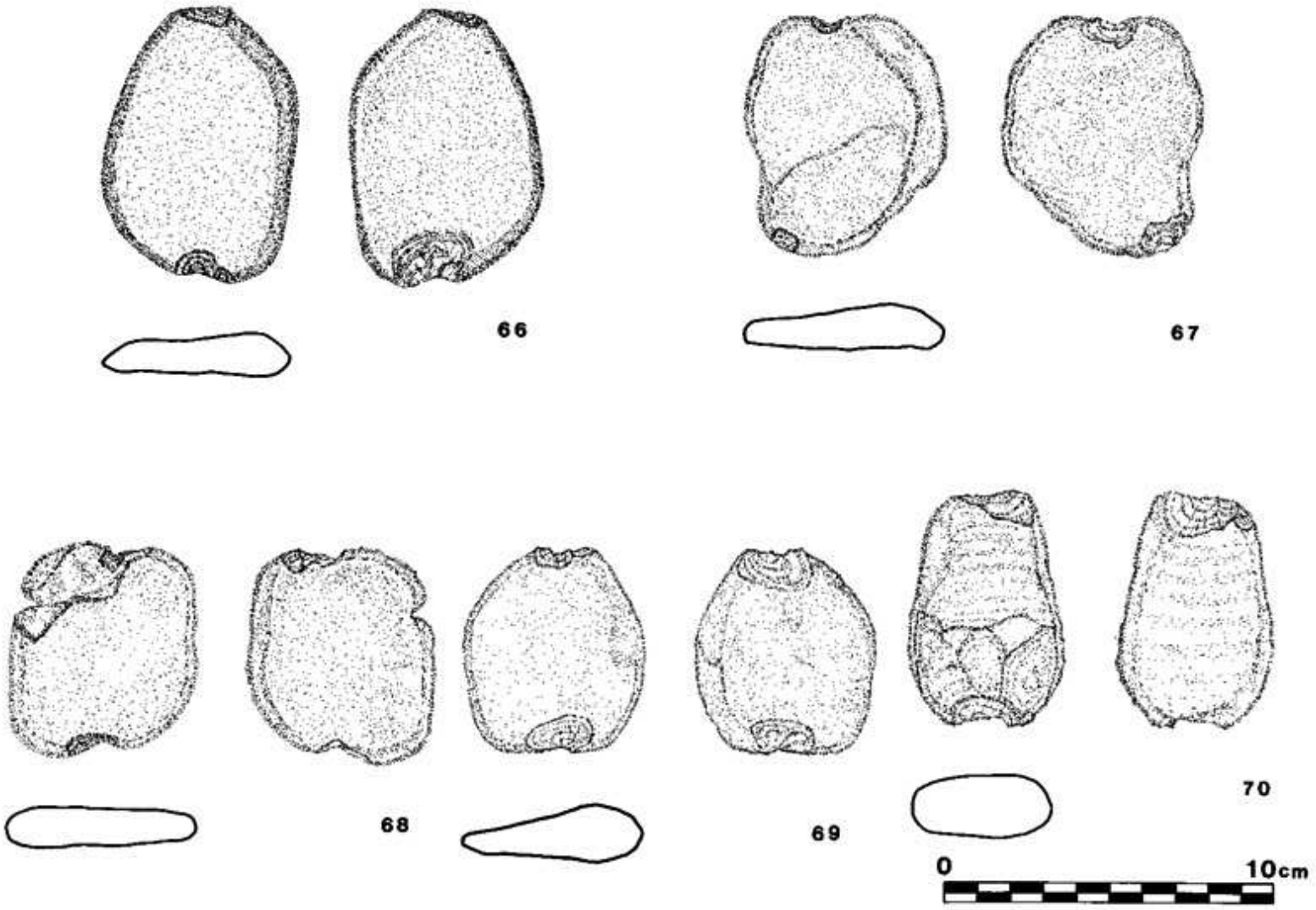
第23図　剝片実測図



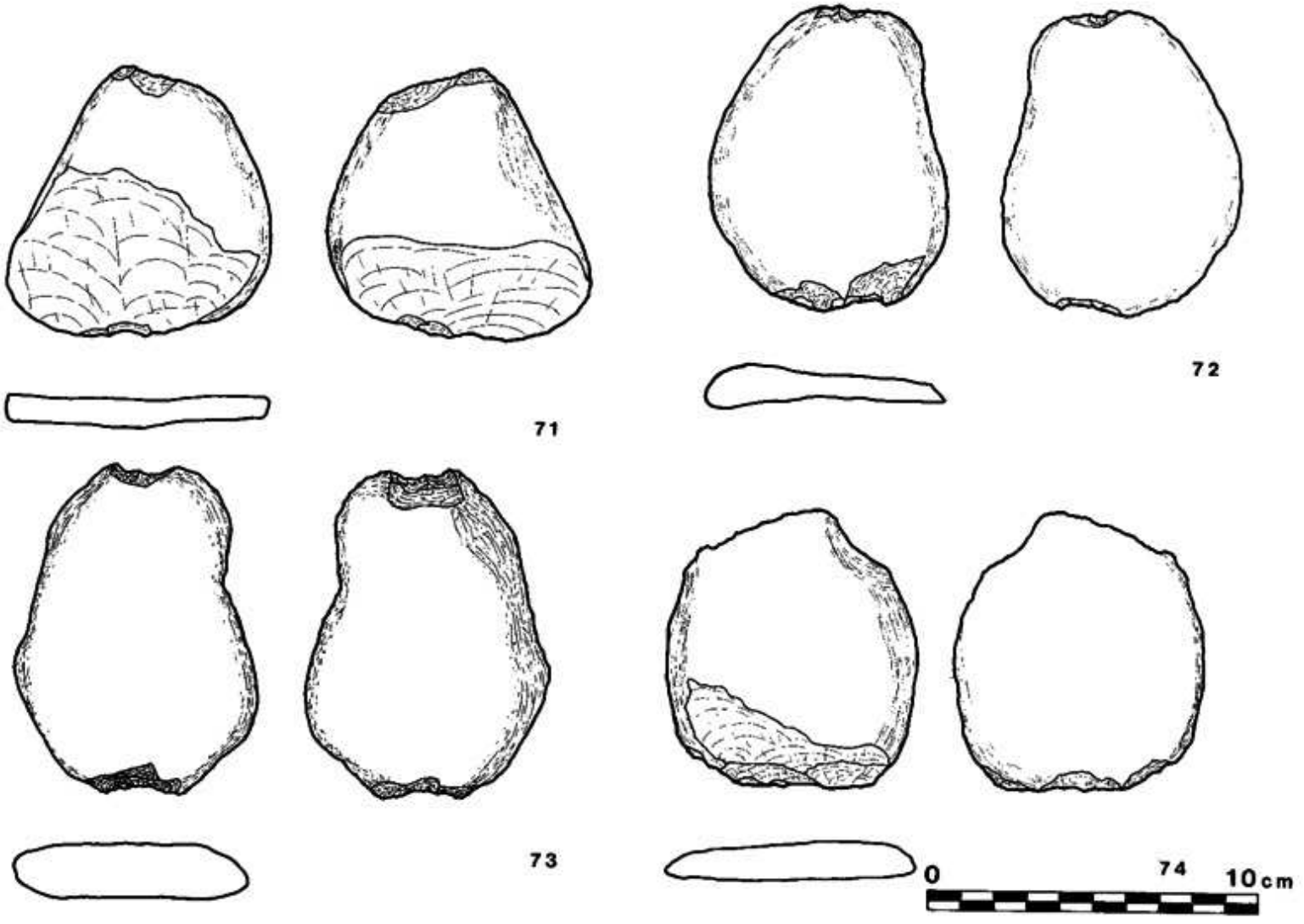
第24図　剝片実測図



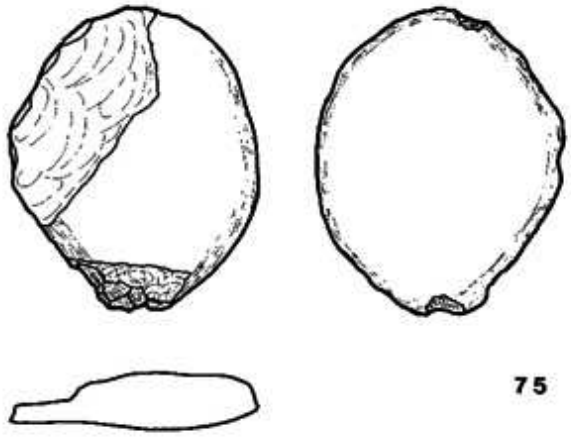
第25図　礫石錘実測図

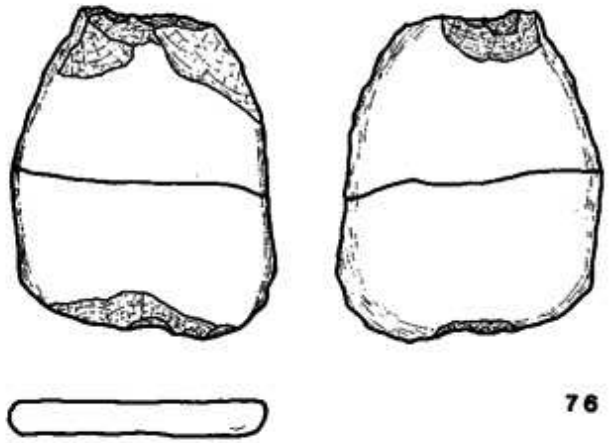


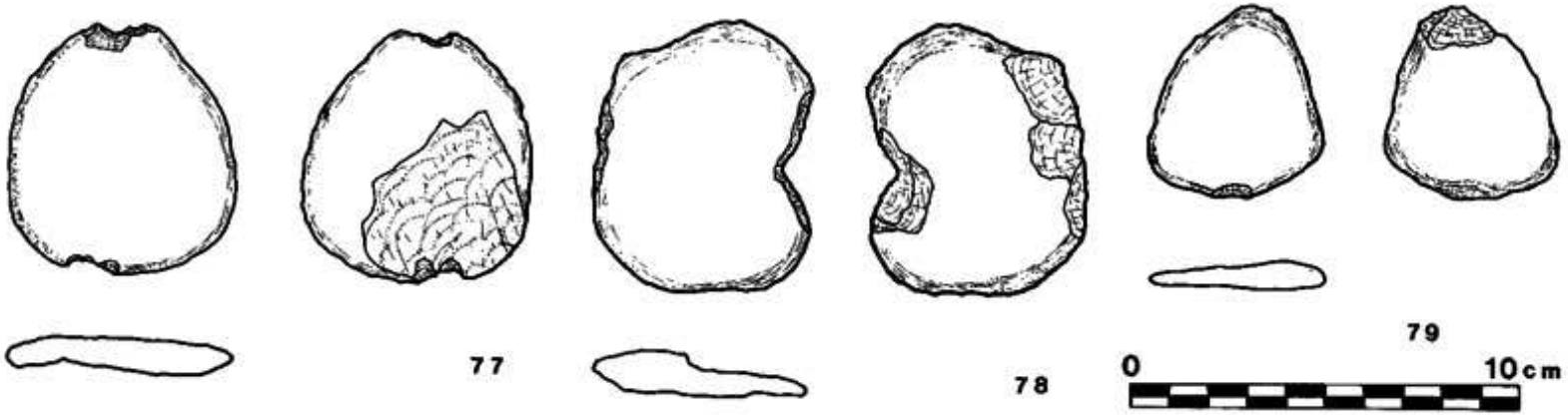
第26図　礫石錘実測図



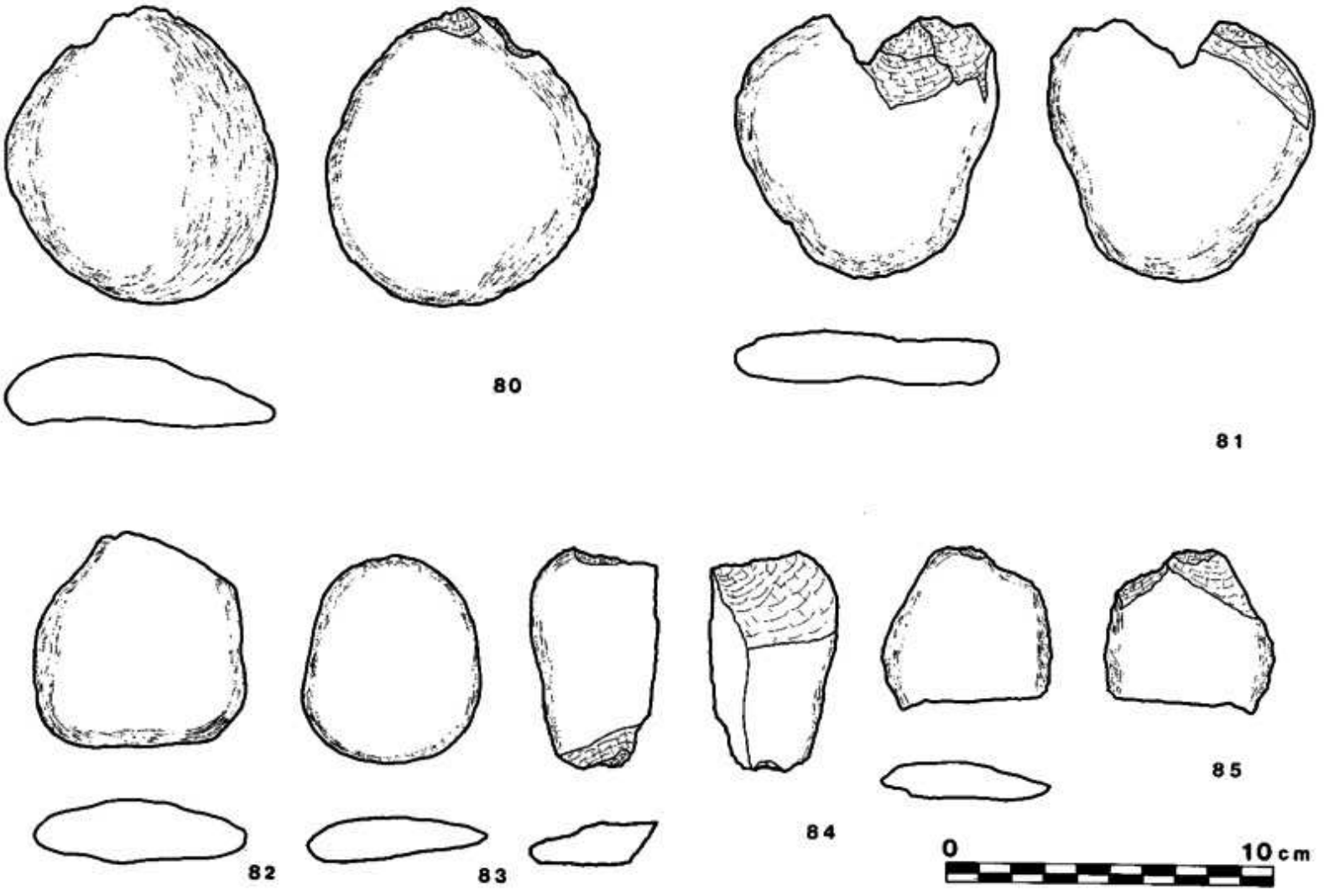
第27図　礫石錘実測図



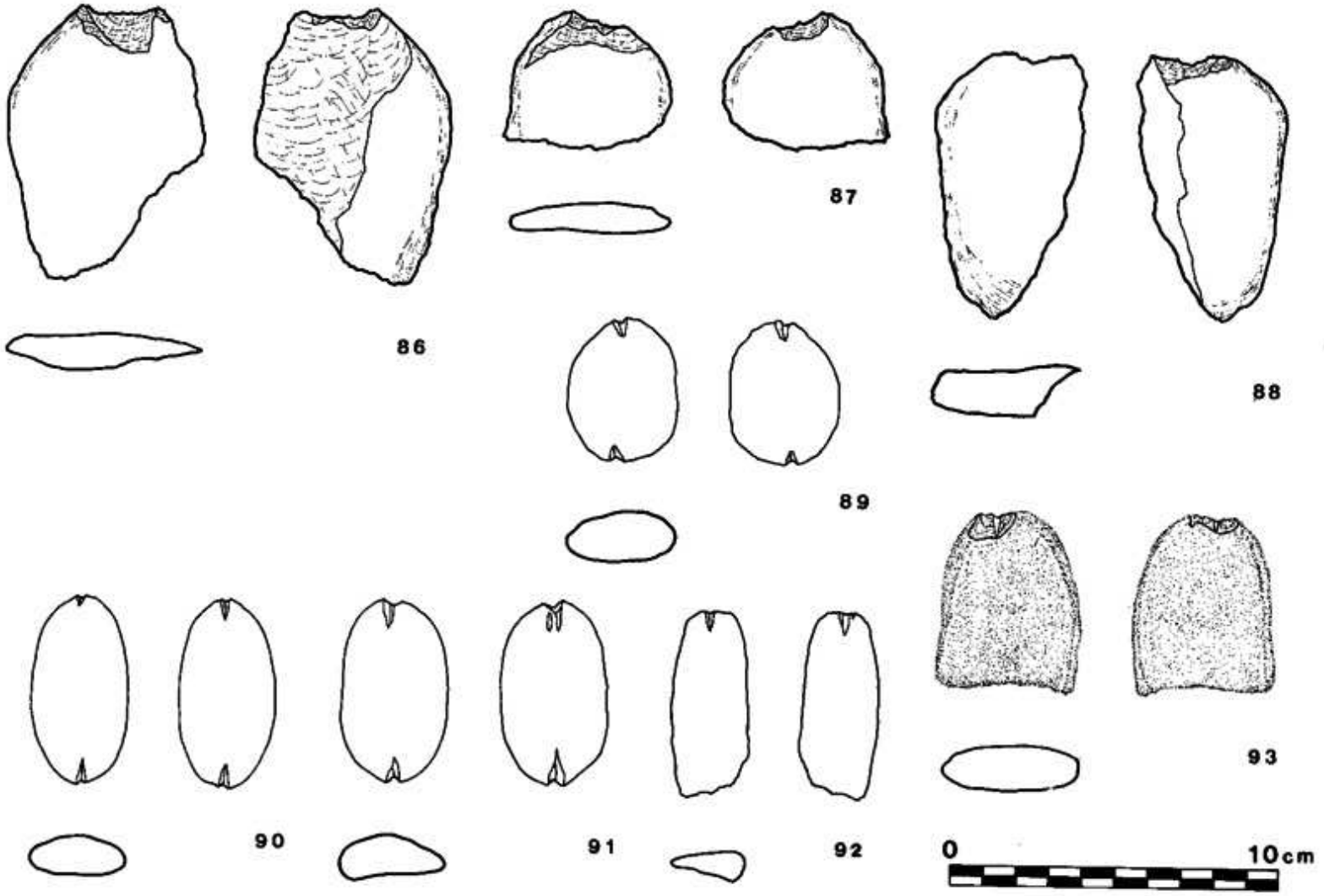




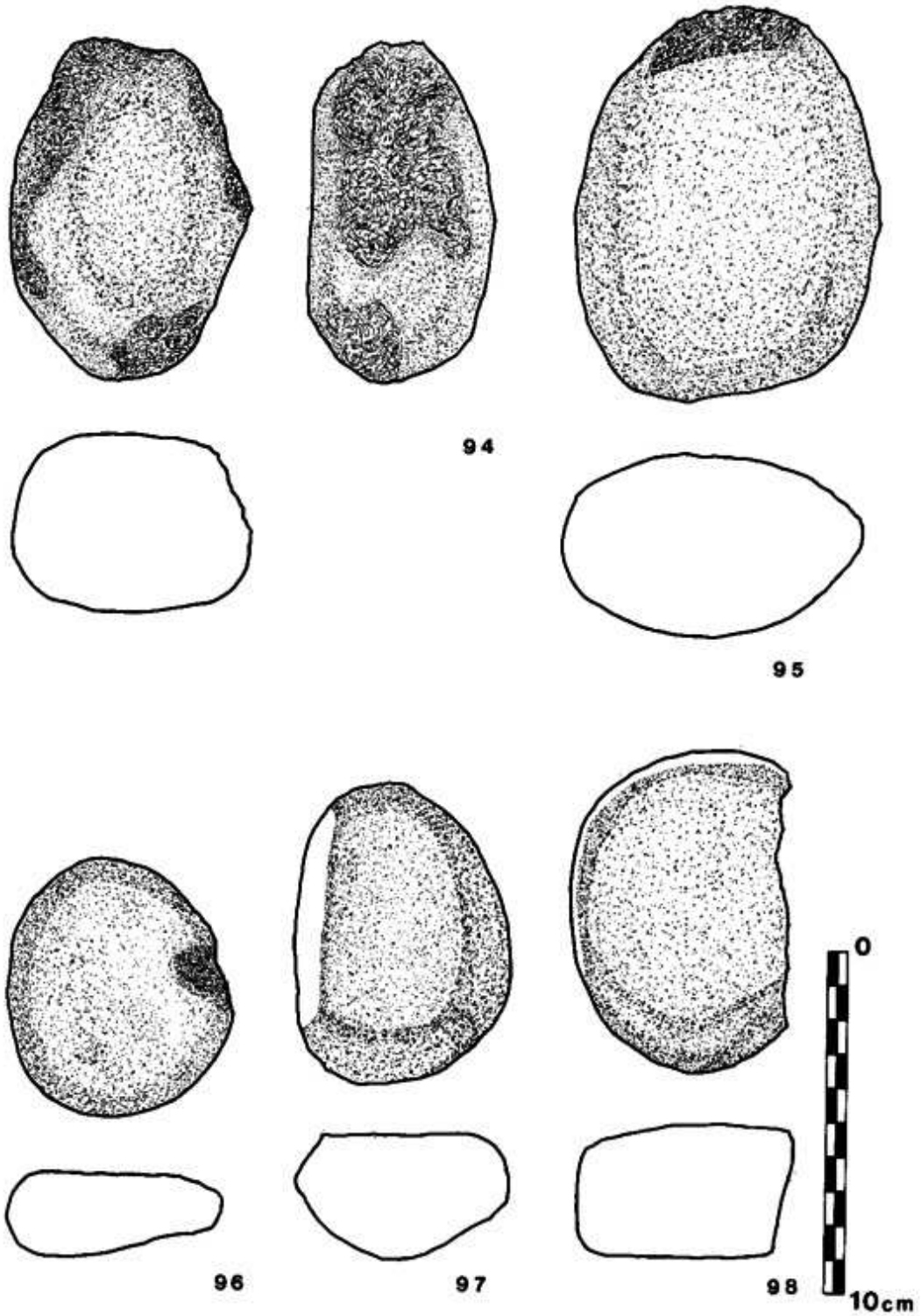
第28図　礫石錘実測図



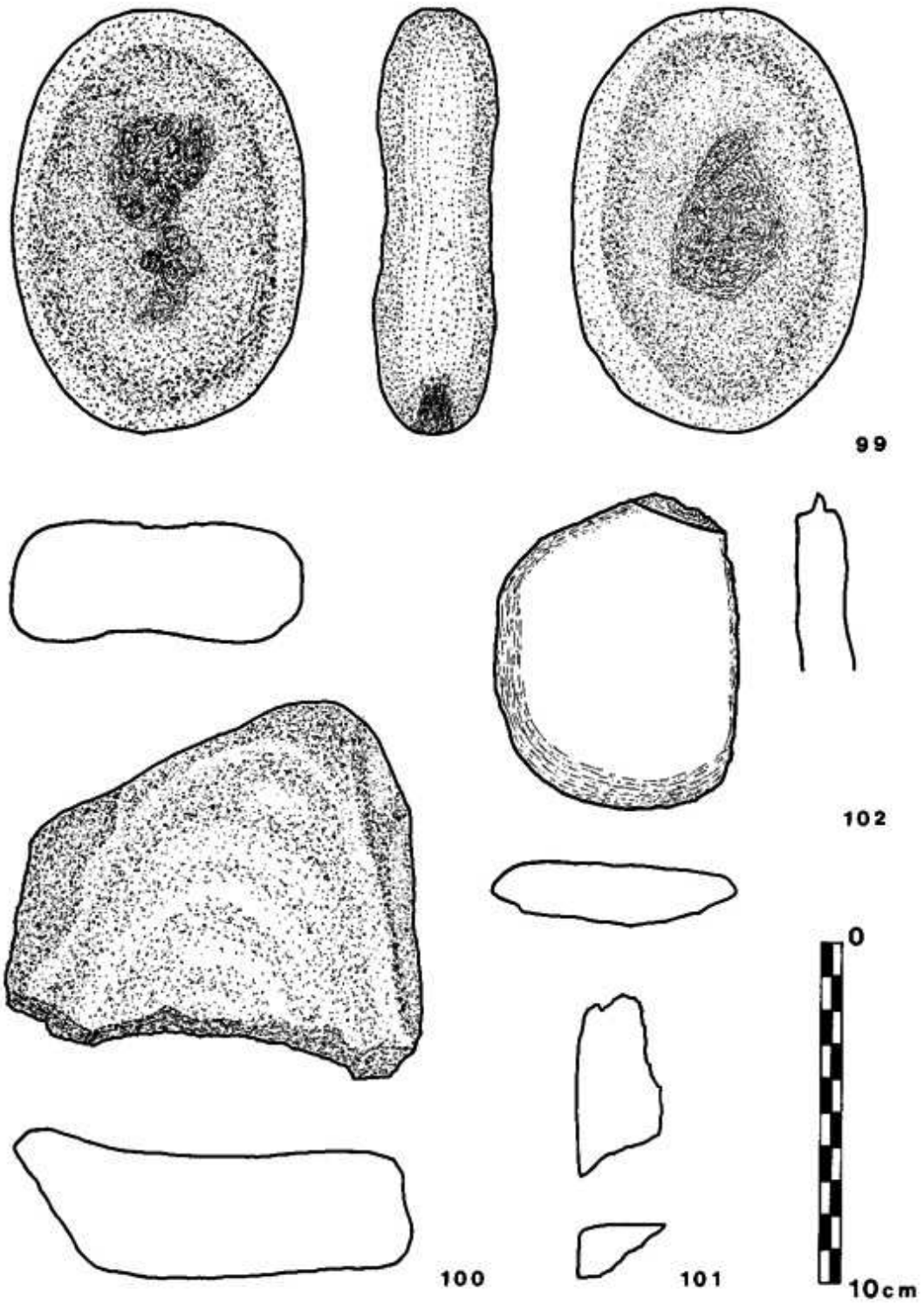
第29図　礫石錘・未製品・素材・折損品実測図



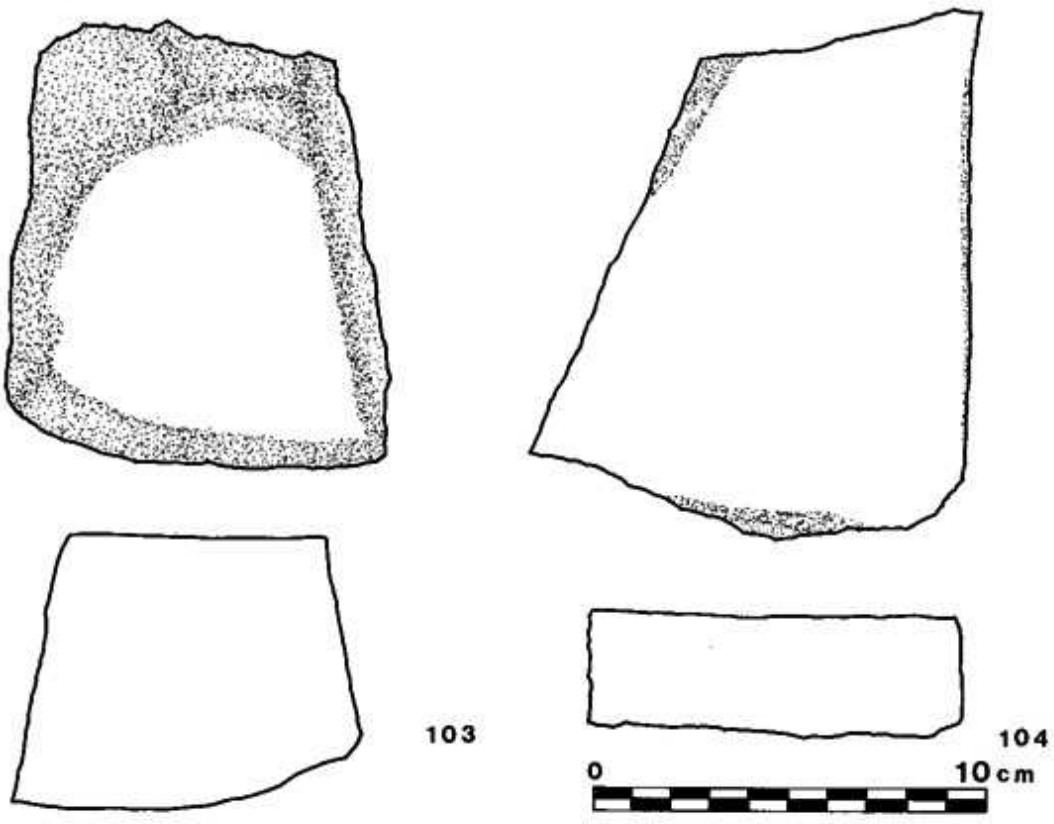
第30図　礫石錘・折損品・切目石錘実測図



第31図　敲石・すり石実測図



第32図　台石・磨製石斧・用途不明品実測図



第33図　砥石実測図

V．石器の岩質とその原石採集地について

はじめに、石鏃及び、石鏃加工破片として多く出土している黒色の玻璃質安山岩（いわゆるサヌカイト）は、石材及びその産地について諸氏により研究されている。しかし、石鏃以外の石錐、砥石、敲石等についての石材及びその産地についての研究は、あまり進んでいないのが現状といえよう。これらの石器は、石鏃のように完全に加工され、原石の形と大きさをとどめていないものがほとんどであるのに比べて、原石の形と大きさを残しているもの、又は原石にほぼ近い形と大きさを示しているものがほとんどである。このことは、現在の岩石の分布、現在の川原石や礫層中の石ころの形や大きさ、岩質とを比較することにより採石地を推定できる条件を多分に満していると考えられる。

以上のことを考慮して石錐・砥石・敲石等を中心に41資料を調べた。鉱物の判定には、30倍の実体顕微鏡を使用した。

岩質について

石器として使用されている岩石種は第2･3表にも示すように、流紋岩、石英斑岩、安山岩、玢岩、溶結凝灰岩、砂岩、泥岩、片岩、ホルンフェルス等である。

各岩石の肉眼的特徴について述べる。

流紋岩：角礫と亜角礫のものとがある。淡灰緑色を呈する。淡緑色の条が認められるものもある。造岩鉱物として細粒の無色透明・自形の長石・石英を含む。石英は複六方錐をなす高温型のものも認められる。石基は淡灰緑色から淡黄土色を呈し、緻密で堅い。

石英斑岩：亜円礫と円礫のものとがある。淡茶褐色を呈する。造岩鉱物として、石英・長石が顕著である。石英は最大径9㎜に及び、自形をなし多い。無色透明や淡茶褐色透明を呈する。長石は石英に比べて粒径が小さく、径が2㎜に及ぶものもある。量的には、石英に比べて少ない。石基は淡茶褐色や淡黄土色を呈し、緻密で堅い。

玢岩：亜角礫で淡灰緑色を呈する。直径約1㎜の孔が点在し、孔の中は、細粒の石英で充塡されている。造岩鉱物としては、長石と電気石が認められる。長石は細粒で白色透明・針状をなし、網目状に分布する。電気石は黒色細粒で自形をなしわずかである。石基は淡灰緑色を呈し、緻密で玻璃質である。

溶結凝灰岩：亜円礫で暗灰色を呈する。溶結構造が認められる。造岩鉱物は石英と長石である。石英はわずかに赤褐色化して、最大径3㎜にも及び、多い。長石は乳白色を呈し、石英に比べて粒径は小さく、多い。石英・長石いずれも自形を示すものがほとんどである。基質は暗

灰色を呈し、緻密で堅い。

砂岩：亜角礫と円礫のものとがある。淡黄土色を呈する。構成砂粒の石種は、花崗岩・泥岩・チャートであり、鉱物としては、長石・石英である。チャート粒はわずかに角の磨滅した亜角礫状を呈し、花崗岩・泥岩・長石・石英粒は角が認められる角礫状である。花崗岩粒は無色透明の石英・長石と細粒の黒雲母からなる。泥岩は灰色を呈し、柔らかい。最大径は7㎜に及ぶ。チャート粒は黒色で玻璃質である。長石粒は無色透明のものと、乳白色のものとがある。石英は無色透明のものと淡茶色透明のものとがある。構成砂粒の石種と鉱物種の量により、石英質砂岩、硅長質砂岩、長石質砂岩に区分される。また、泥岩を含むものは砂粒の淘汰が悪く、礫質砂岩に属する。泥岩粒を含まないものは淘汰が良い。

泥岩：亜角礫と亜円礫のものとがある。淡赤褐色、黒色、暗灰緑色を呈するものがある。黒色のものは、わずかに剥離面が認められる。いずれも緻密で堅い。

片岩：亜角礫と亜円礫のものとがある。黒色や暗灰緑色、灰色を呈する。いずれも剥離性が発達している。造岩鉱物として、石英、石墨、黒雲母、白雲母、絹雲母が認められる。いずれも細粒である。造岩鉱物の種類により、石英片岩、石英・石墨片岩、石英・絹雲母片岩、両雲母片岩、絹雲母片岩等に区分される。特徴ある鉱物が認められない泥質の片岩を泥質片岩とした。

ホルンフェルス：亜角礫（？）の破片である。黒色を呈する。礫や砂質部を認められる淘汰の悪い泥岩のホルンフェルス化したものである。礫としては長径3㎜の流紋岩の亜円礫を含む。

原石の採石地について

原石の形と大きさを推定する方法にはいろいろあるが、加工による破損部と原石の部分との関係から推定するのも1つの方法である。例えば、石錘の場合、両端にのみ加工の割れ口が残る。他の部分は川原石や海岸等の石のような磨滅の様子を示す。すなわち、両端の加工部以外は原石の形と大きさをとどめていると考える方法である。敲石であれば、石の中央部のくぼみ以外は原石の形と大きさをとどめていると考える方法である。

NB・B 13のような板状の石は、角を残しており、海岸や丘陵地の礫を採石したとするよりも、岩石露出地から採石したと考える方が妥当であろう。

また、砂岩製の敲石や石錘に多い左右対称で円礫のものは、海岸等の礫に多い。川原石は、川の上流、中流、下流によって、大きさと形が異なり、岩石種も異なることがある。

以上のようなことを考慮して、石器の原石採集地を推定する。

流紋岩又は溶結凝灰岩は、姫路から摂津西部にかけて広く分布する流紋岩類の一部に類似す

る。亜円礫や亜角礫は川原石であろうが、角のある板状の石は岩石の露出地で採石したと考えられる。

砂岩の磨滅の様子からみれば、海岸の礫に類似する。岩質的には、和泉山脈の南半部に分布する砂岩に類似する。また、同付近の丘陵地の礫層中にも同種の礫が含まれる。しかし、採石条件を考慮すれば、海岸の方がはるかに良いことから、泉南付近の海岸から採石した可能性が強い。

片岩は、ほとんどが石錘として使用され、加工部もわずかでほぼ原石の形をとどめていると考えられる。片岩の分布は紀伊半島であれば、紀ノ川流域であり、中国地方では岡山県と鳥取県の境付近である。距離的にみれば紀ノ川流域を推定するのが妥当であろう。岩石種と形、大きさからみて、紀ノ川流域でも下流の和歌山市東部付近の川原石に類似する。

石英斑岩、玢岩、泥岩、ホルンフェルスについては原石の採集地を推定しがたい。

なお、この石器の岩質調査に便宜をはかっていただいた豊中市教育委員会の柳本照男氏、橋本正幸氏に御礼を申し上げる。

Ⅵ 要　　約

北摂地域において、今回の発掘調査を実施した野畑遺跡で、縄文時代後期に所属する遺跡を確認し得たことには意義がもたれ、野畑遺跡の成果を前稿で詳述しているので調査の成果に基づいてまとめとしたい。

今回の調査は、限定された調査面積内で、検出された遺構は不定形な溝状遺構、焼礫、焼土（Ｆｉｒｅｐｉｔ）である。焼礫や焼土については、屋外に設けた炉跡の可能性がある。遺構に伴う遺物類は若干認められ、ほとんどの遺物は包含層に多数含まれていた。

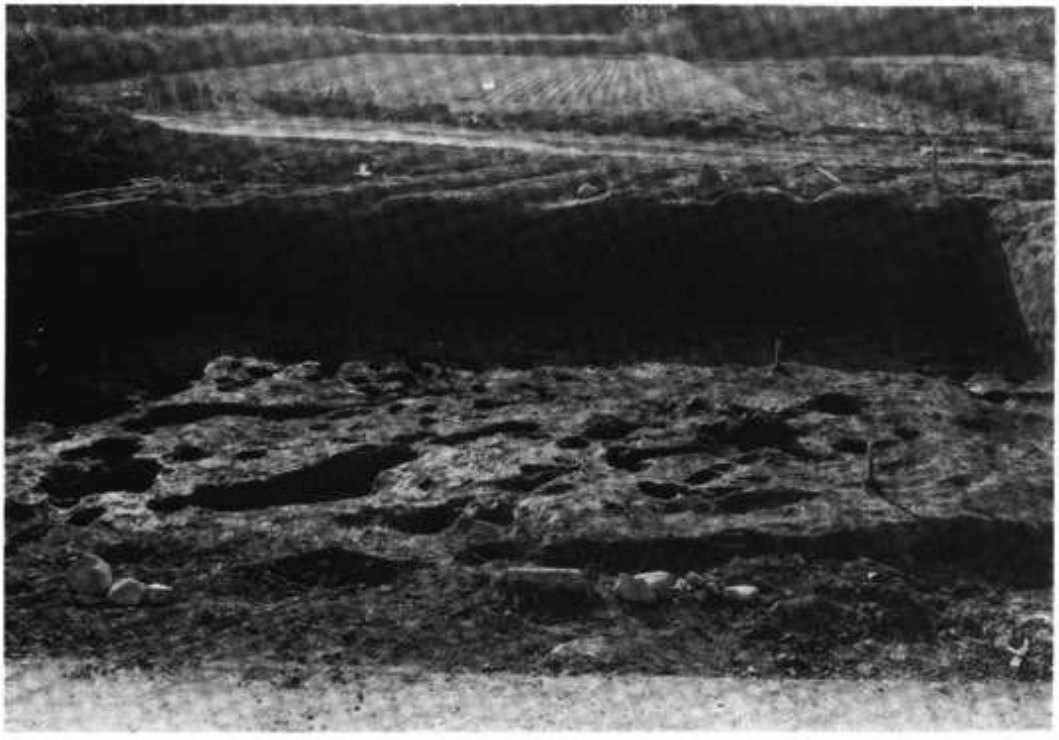
土器の問題についてみると、従来、中部瀬戸内、近畿地方の土器型式編年は、縄文後期の前葉、中葉、後葉期の三時期に区分され、本遺跡を従来の土器型式編年で各時期に位置づけると後期前葉に中津式、福田ＫⅡ式土器が含まれ、後期中葉では、津雲Ａ式、北白川上層式土器などである。これらの各時期の土器は、同一地層に混在されていた。したがって、型式土器の前後関係については、明らかでなかった。

図　　版

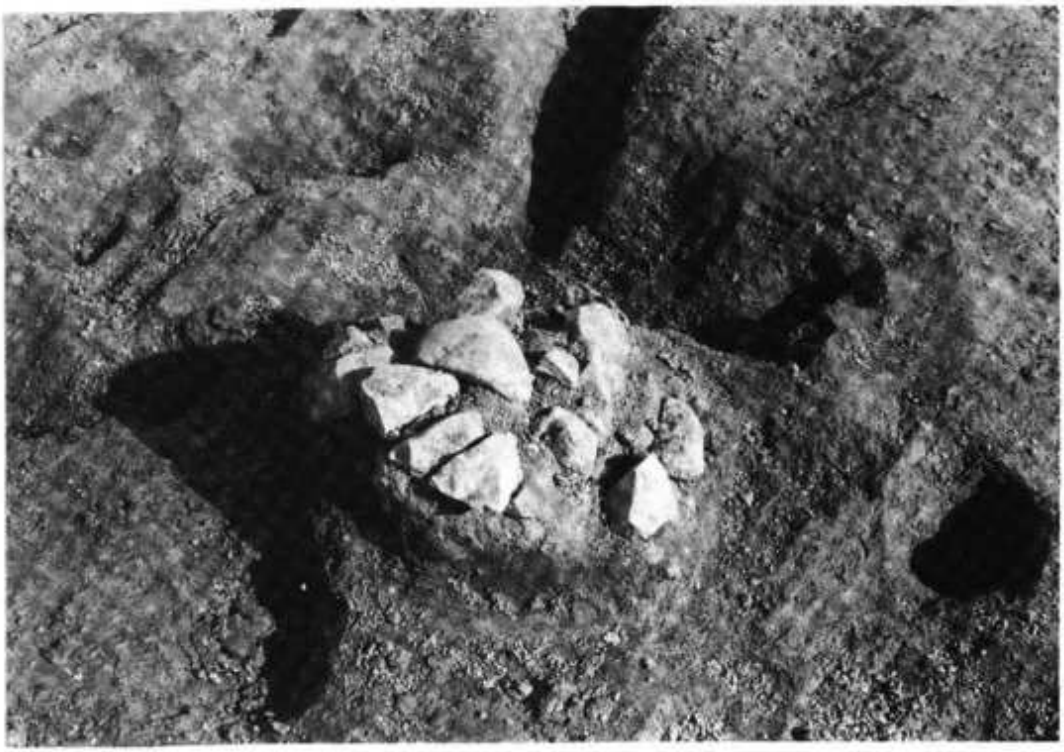
(1) 遺跡の遠景（北西より）

(2) 発掘風景（西より）

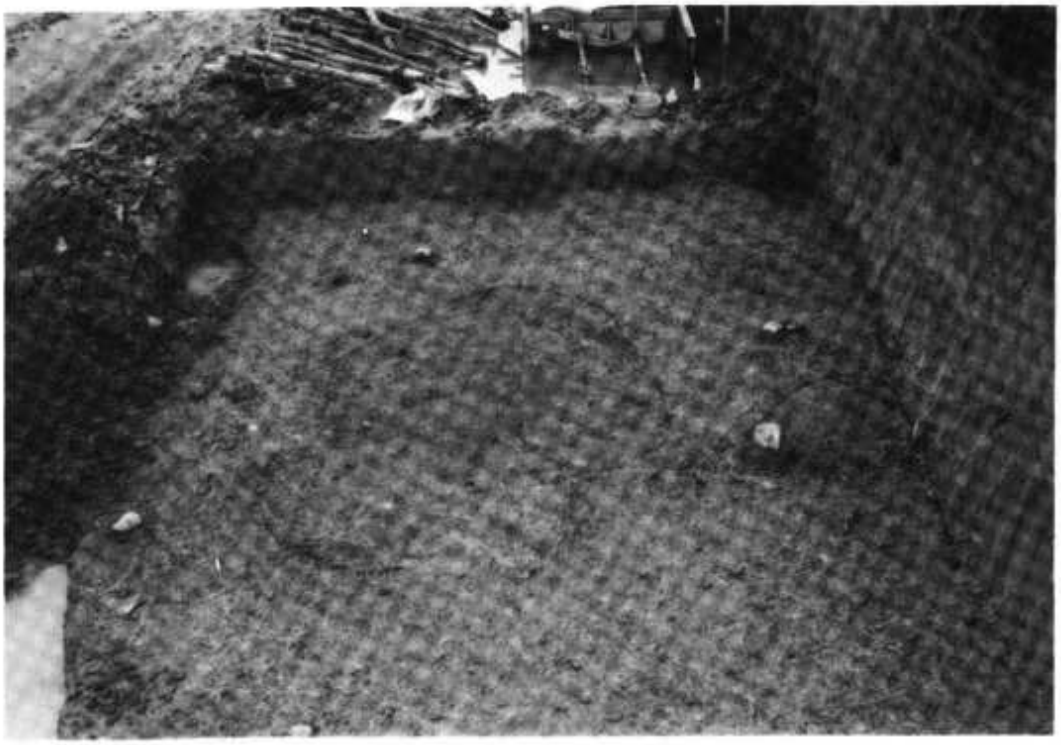
(1) 調査区全域の遺構（東北より）



(2) B，C地区の遺構（北より）

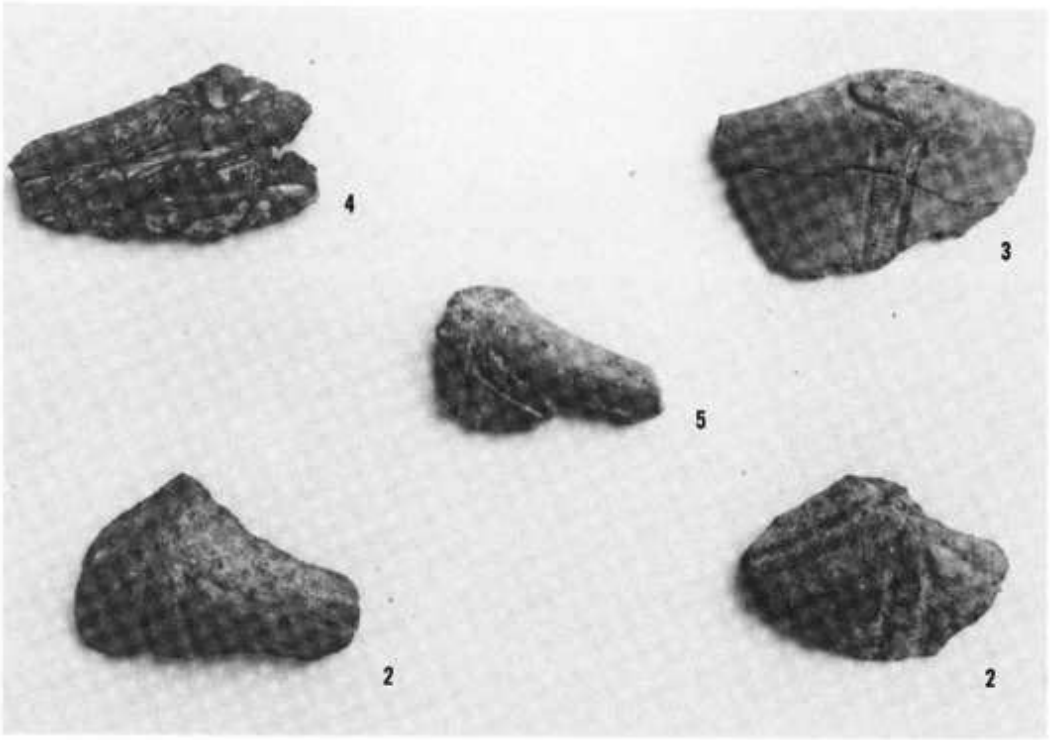


(1) 焼礫遺構（西より）

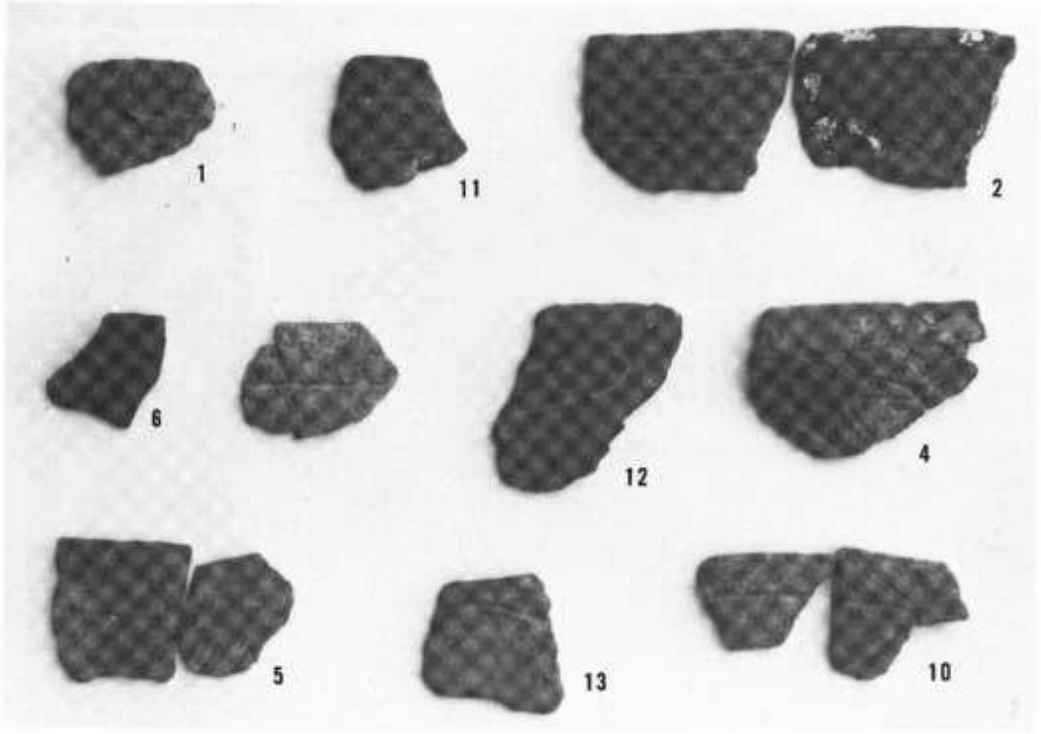


(2) 焼土遺構（西より）

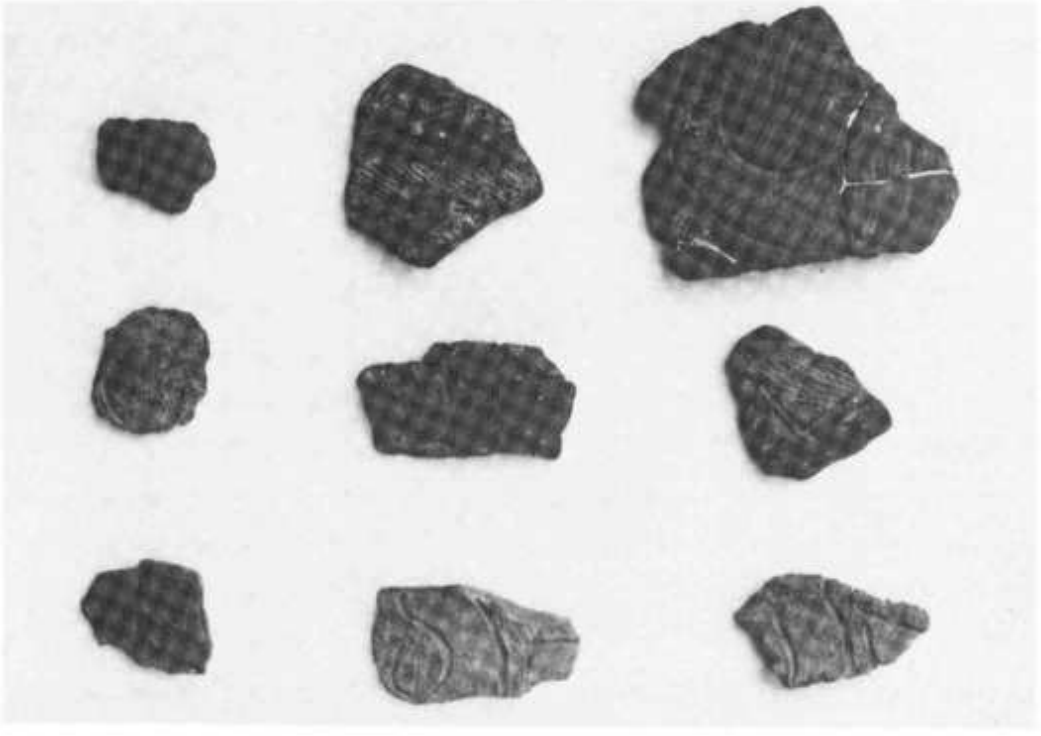
(1) 1類



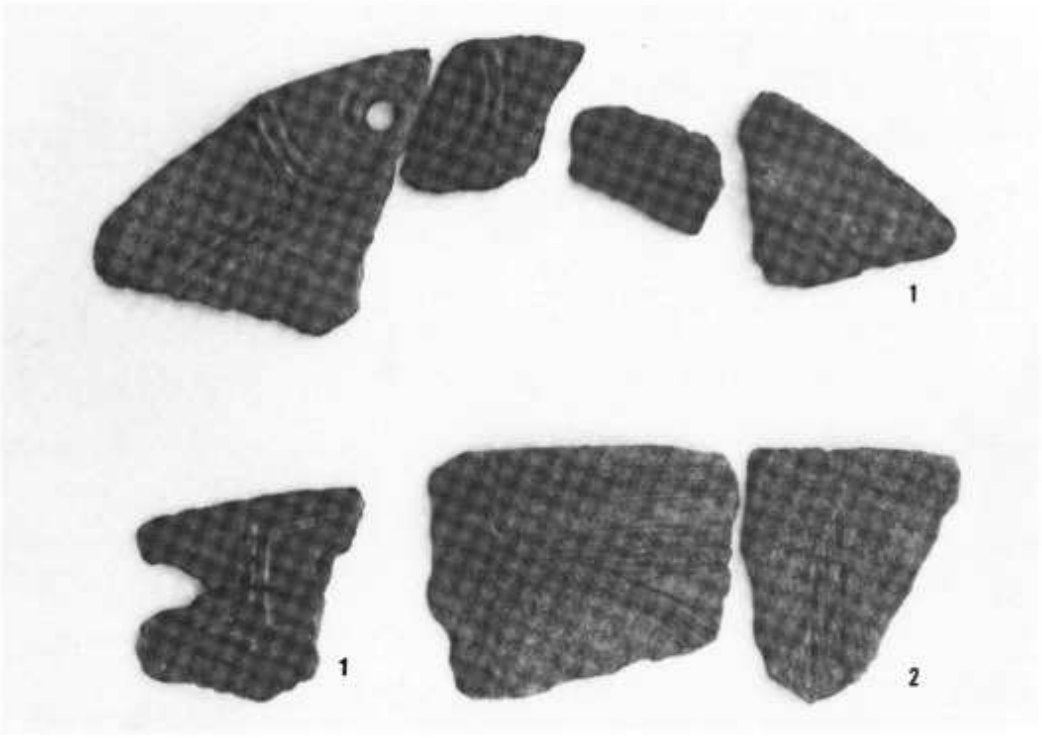
(2) 2類A種



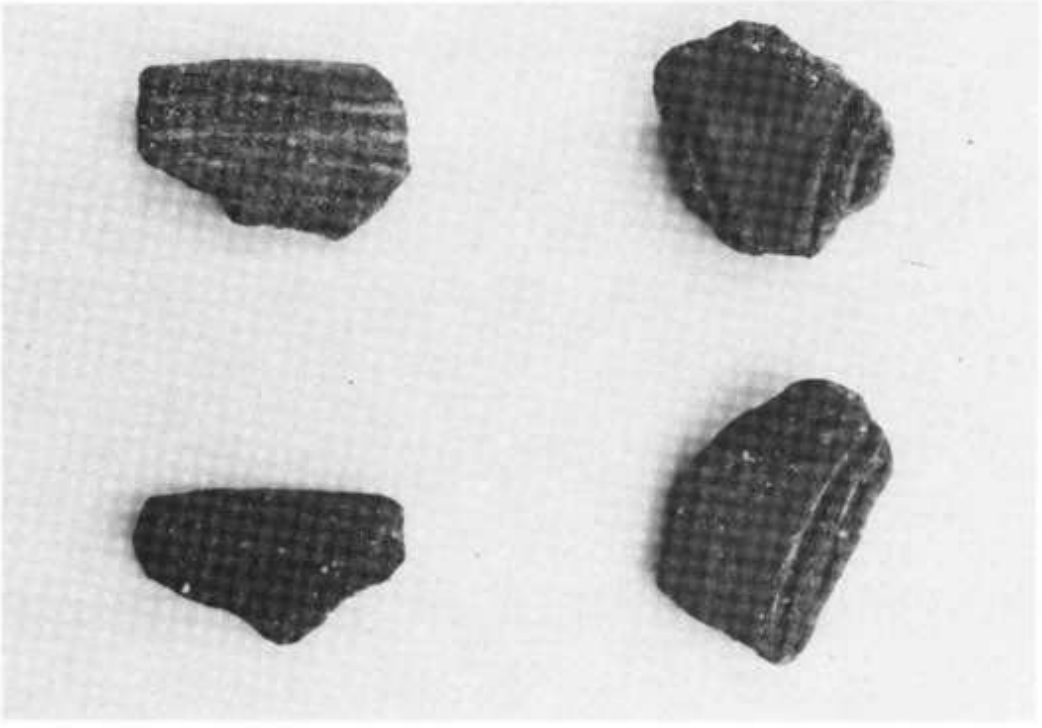
(1) 2類B種



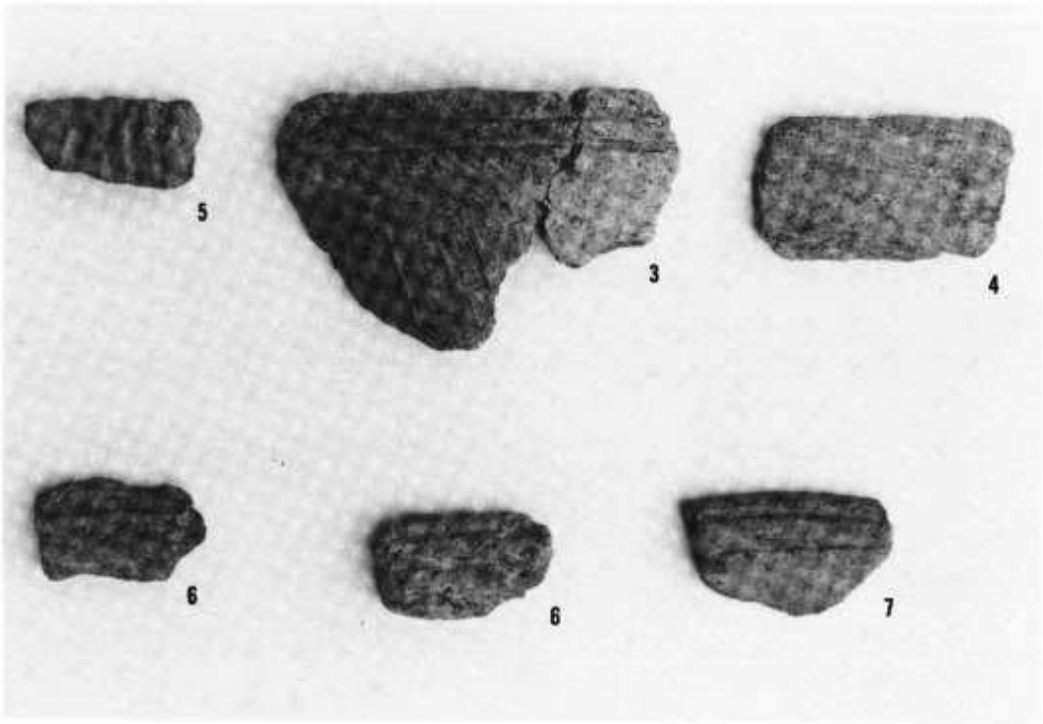
(2) 2類A種・B種胴部文様



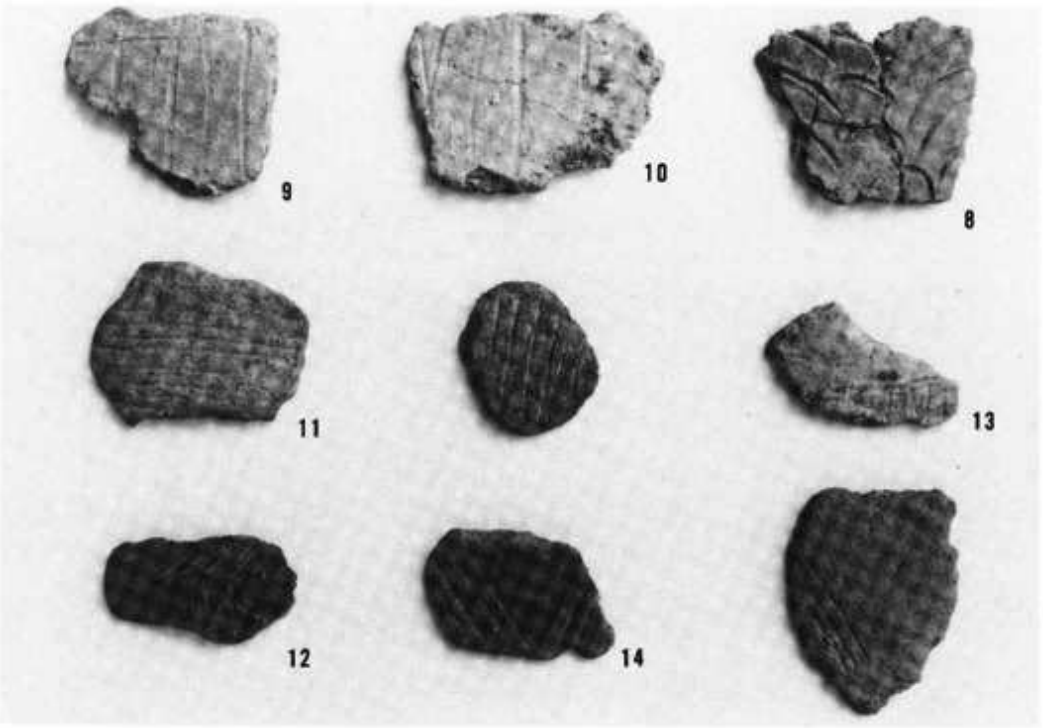
(1) 3類



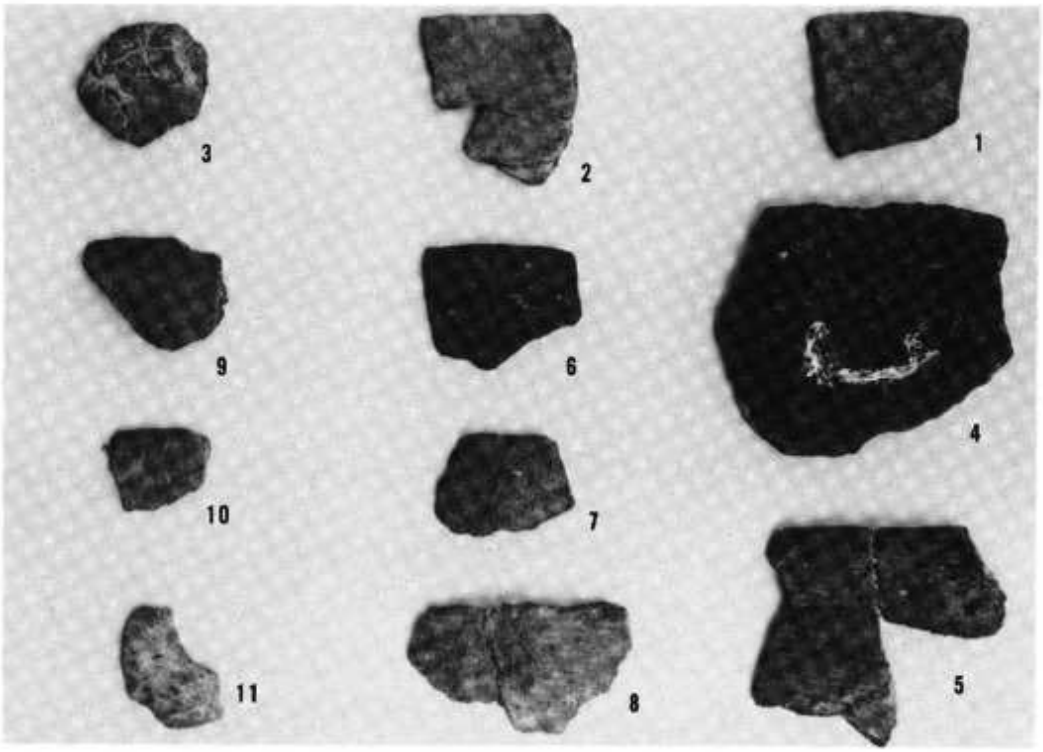
(2) 3類



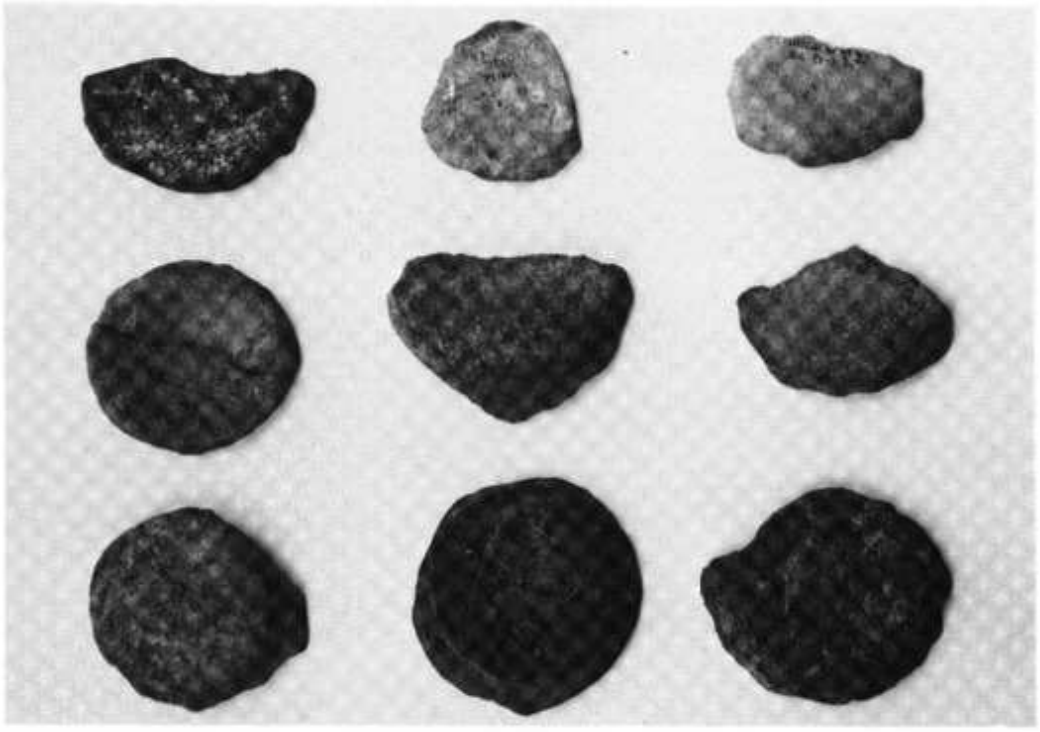
(1) 4類



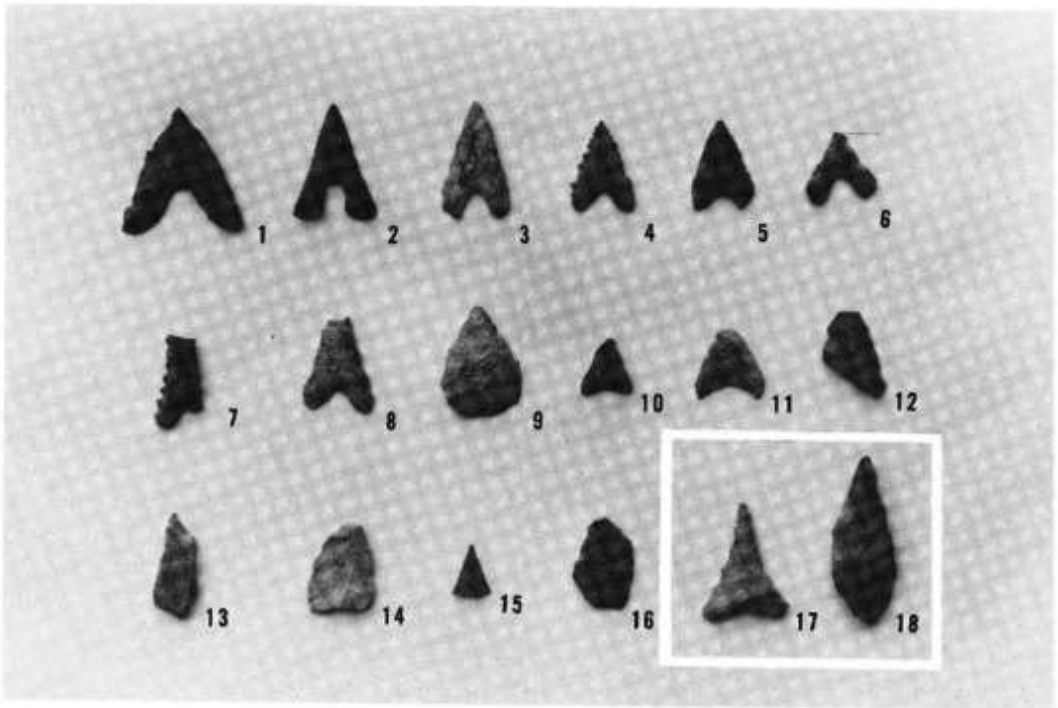
(2) 垂下沈線文・垂下条線文



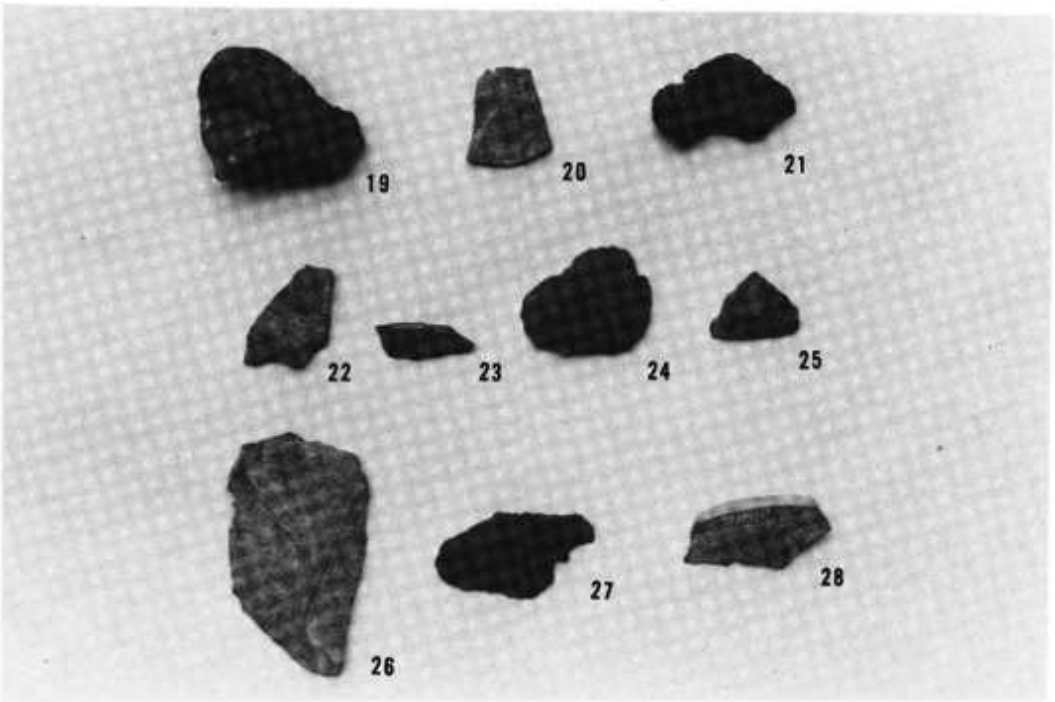
(1) 無文土器



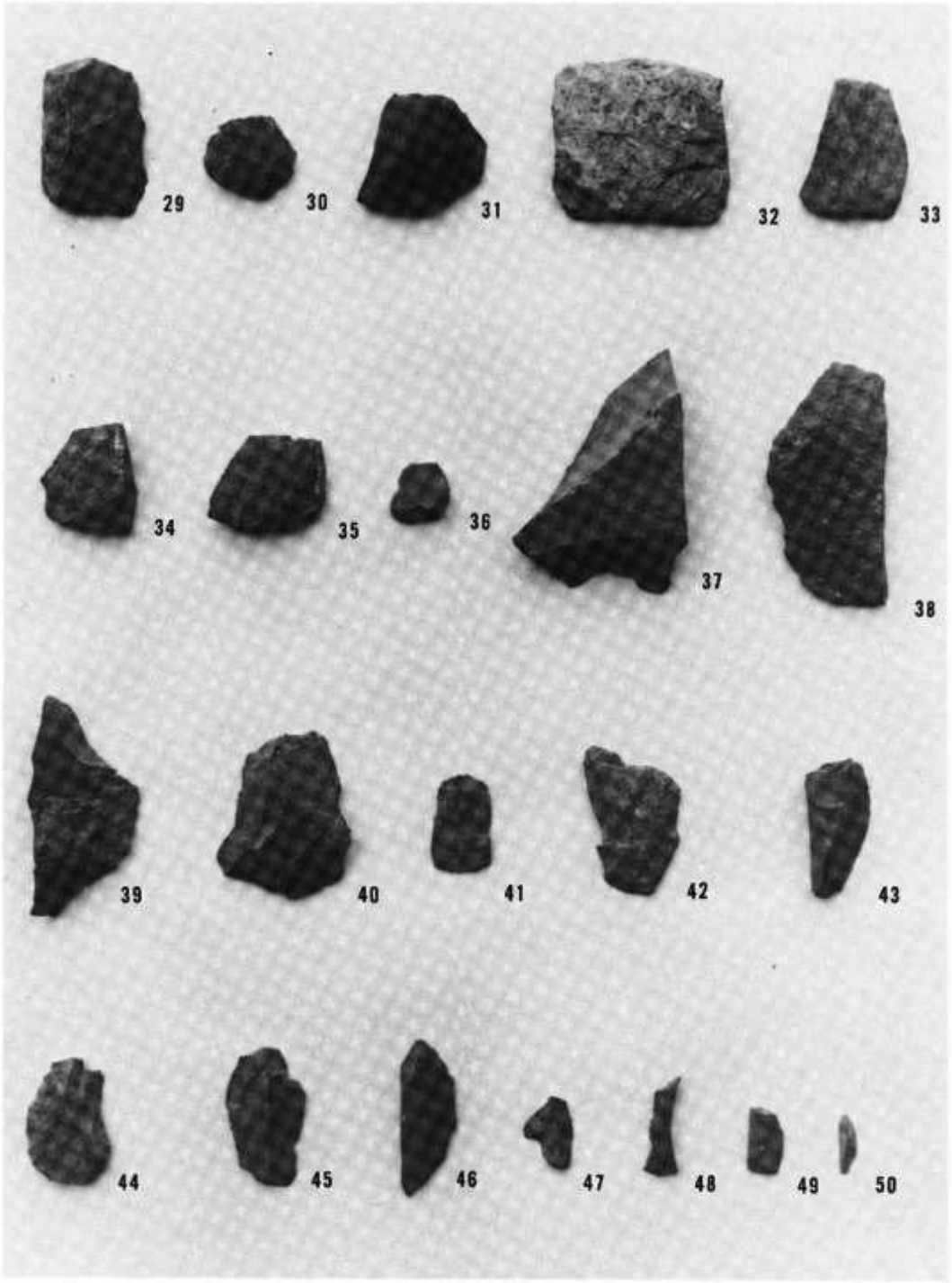
(2) 底部



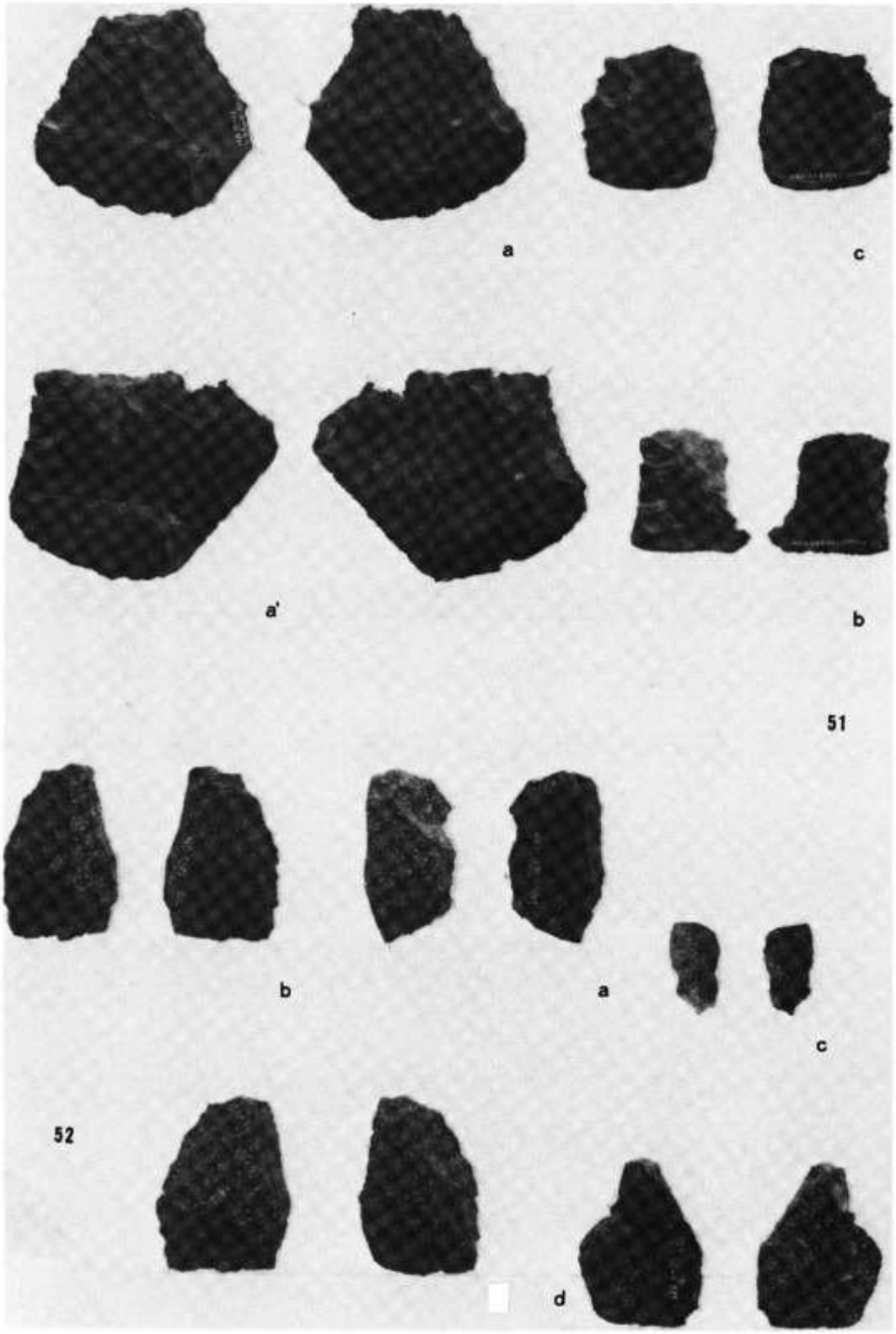
(1) 石鏃・石錐



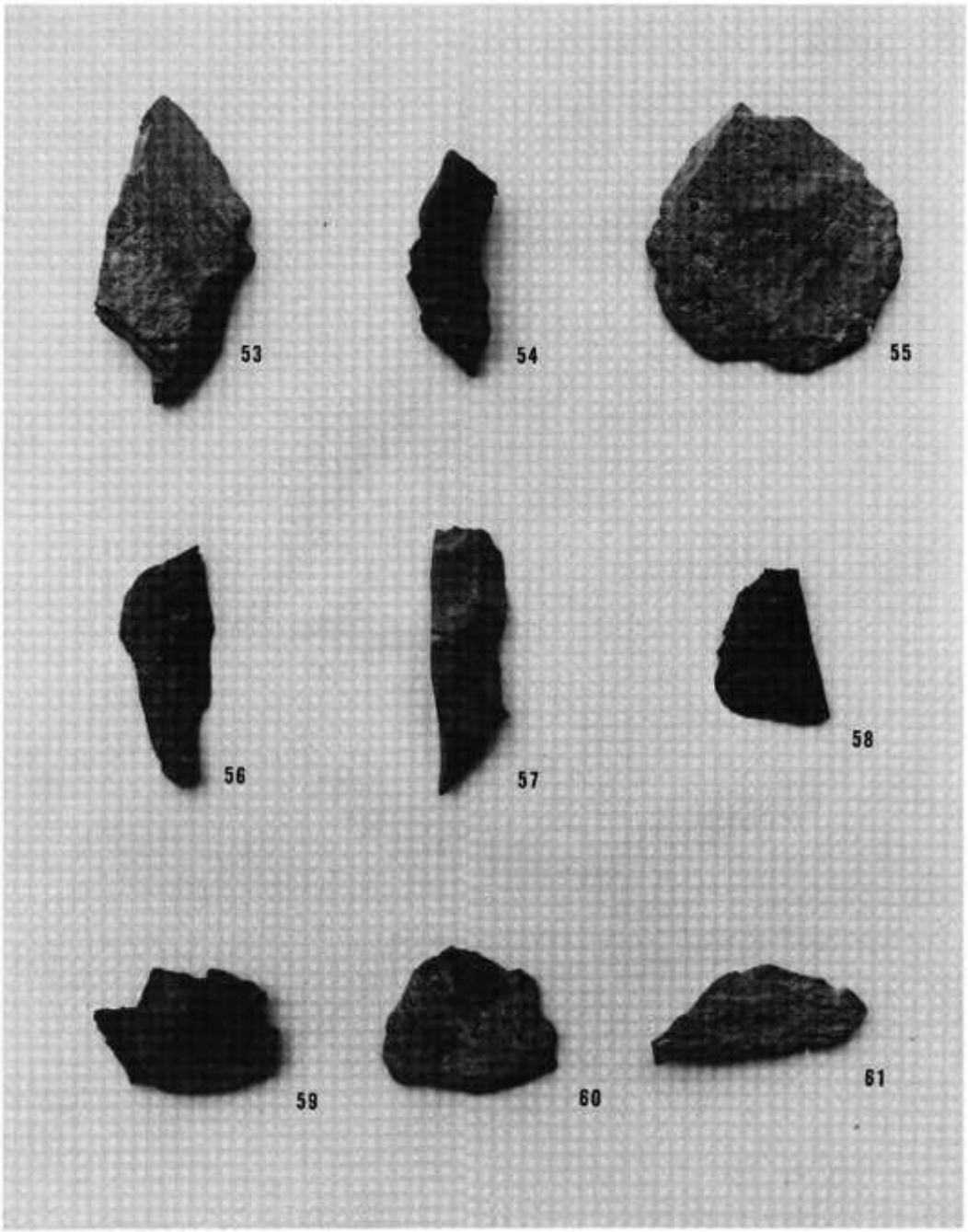
(2) 削器・使用痕のある剥片



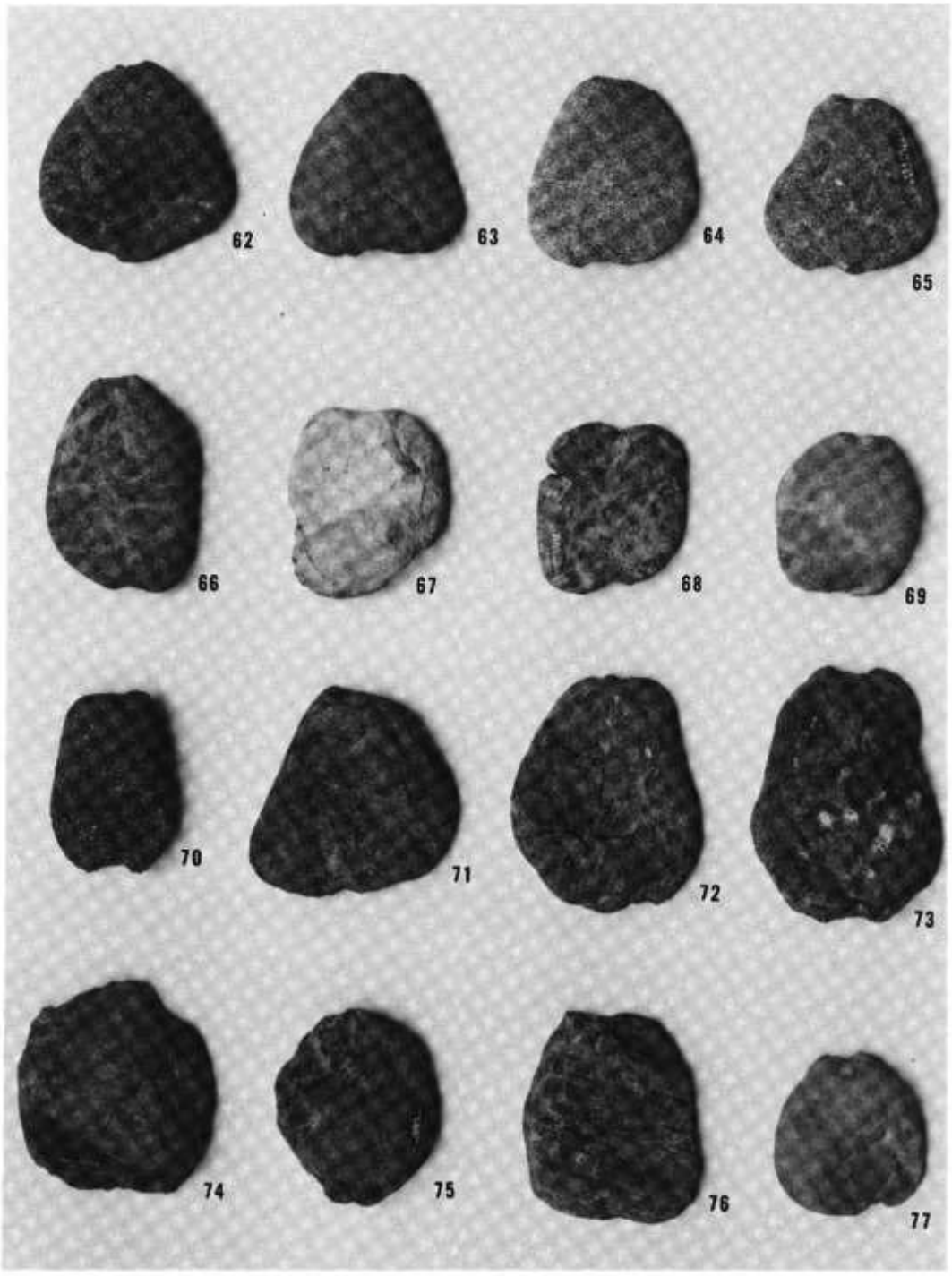
(1) ピエス・エスキーユ



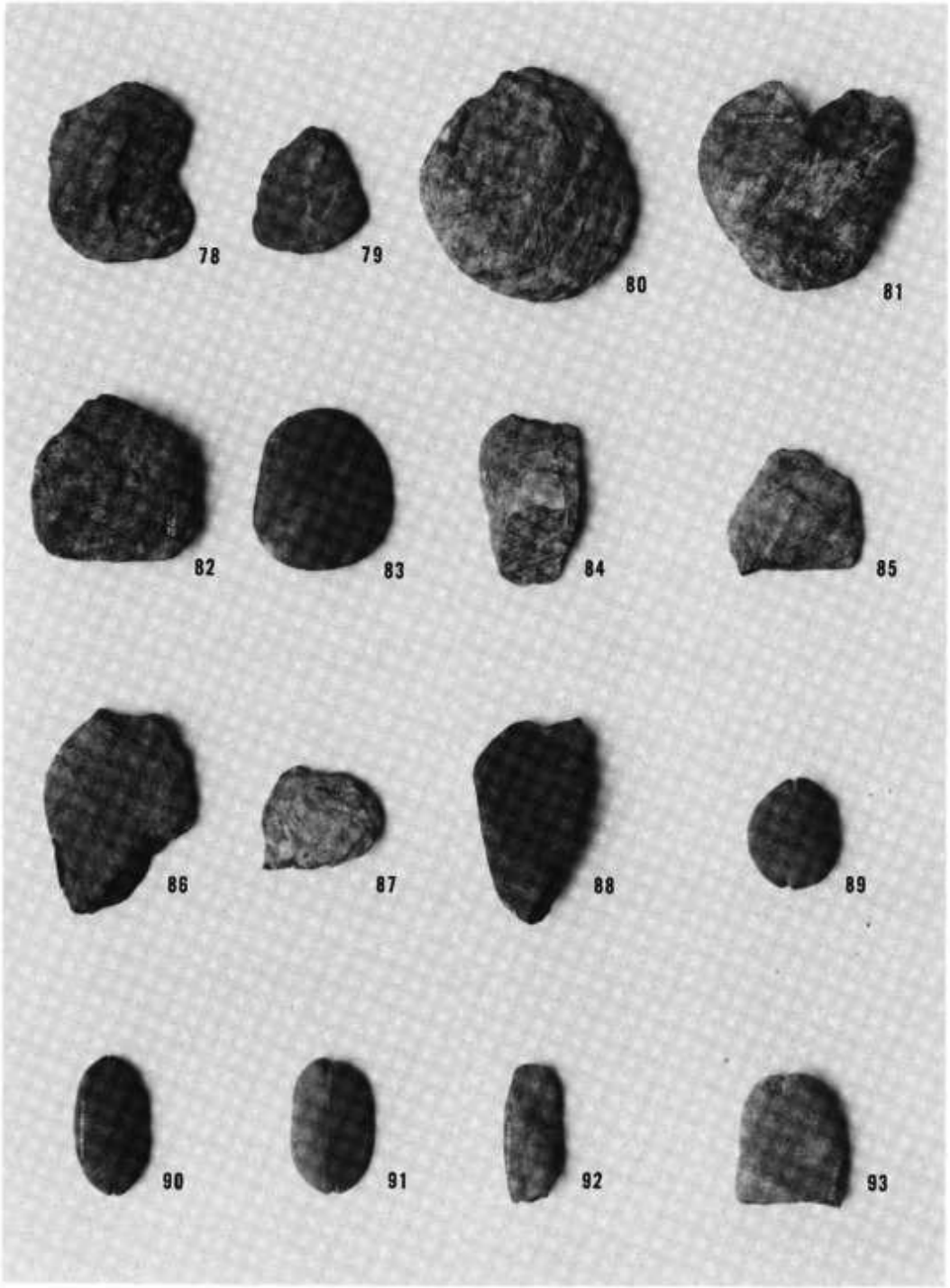
(1) ピエス・エスキーユ　接合資料



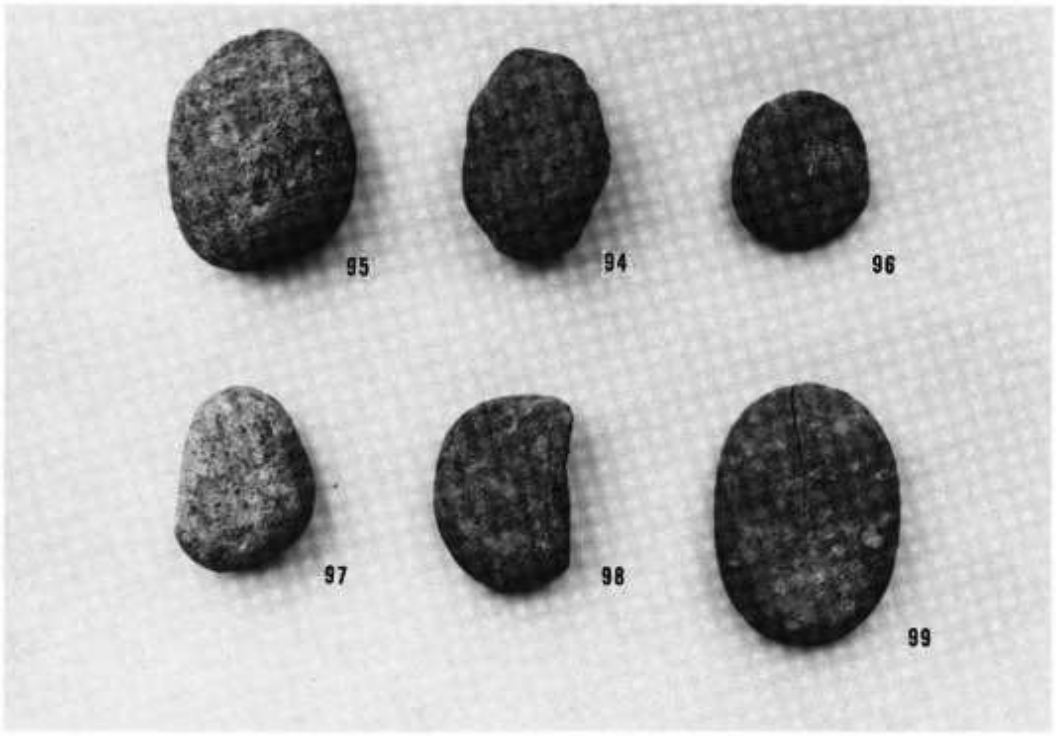
(1) 石核・剝片



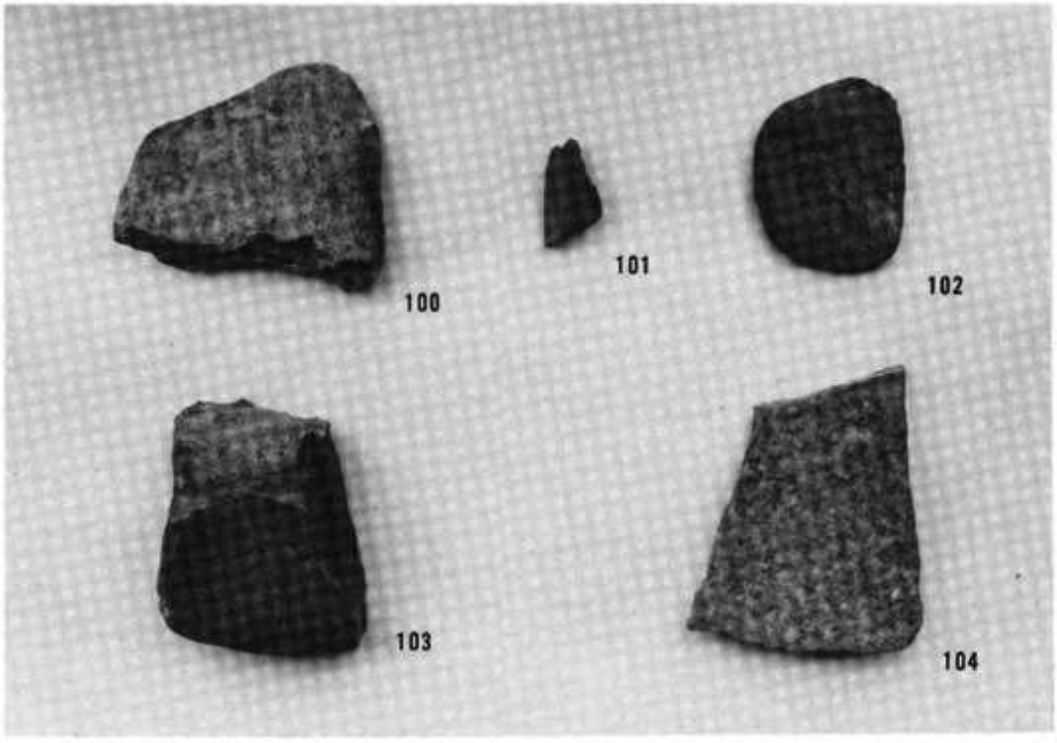
(1) 礫石錘



(1) 礫石錘・切目石錘



(1) 敲石・磨石・台石



(2) 台石・磨製石斧・用途不明・砥石

豊中市文化財調査報告第8号
野　畑　遺　跡
1981年6月
発行　豊中市教育委員会
豊中市中桜塚3丁目1−1
編集　社会教育課文化係
印刷　やまかつ株式会社